

# 平出遺跡群発掘調査報告書

——県道長野・荒瀬原線バイパス工事に伴う発掘調査——



1992

長野県上水内郡牟礼村教育委員会

## 「平出遺跡群発掘調査報告書」お詫びと訂正

標記刊行物につきまして、下記の誤りがありましたのでお詫びして訂正致します。

訂正箇所	誤	正
1頁 下から6行目	牟礼村村長	牟礼村長
2頁 上から8行目	欠落	調査員 横山かよ子 長野市埋文センター 〃 笹沢正史 駿沢大学
2頁 下から5行目	市西譲道	市西護道

# 平出遺跡群発掘調査報告書

— 県道長野・荒瀬原線バイパス工事に伴う発掘調査 —



1992

長野県上水内郡牟礼村教育委員会



平出遺跡発掘調査団

## 序

平成の時代を迎え、村びとの恋願でありました北岡街道（現県道長野・荒瀬原線）改良計画が実現の運びとなり、平出地籍は現道の西側にバイパスが建設されることになりました。

平山遺跡群が、この計画線上に点在していることから、県教委のご指導のもと、平成元年に遺跡確認の試掘調査を行い、その所在を確かめながら調査地点を 4カ所にしぶって、平成 2～3 年にわたり本発掘を行いました。

この結果、平出地籍は須恵器に適した良質の土があり、それを採取した多くの土坑や、窯址、それに多くの須恵器の不良品を埋めた土坑などが発見され大きな成果が得られました。

また、史跡「三本松」は別名「行人塚」とも呼ばれ街道の行路病人等でなくなった人を祀った地ともいわれてきましたが、拡幅工事の際に 2 体の人骨が発見され、信大医学部に鑑定をお願いしましたが古い伝えが証明される結果を得ました。

ここにご指導を賜った県教委文化課、調査をご担当下さった諸先生方、経費をご負担下さった県土木部長野建設事務所ご当局、炎天下発掘をお手伝い下さった皆様方に深く感謝申し上げる次第であります。

とりわけ、小林調査団長には、折からの県下高速自動車道建設計画地の広範にわたっての発掘調査と期を同じくしたため考古学専門家が極度に不足するところとなり、学校現場をもたれる先生に、たってご無理をお願いしたために、2 ケ年にわたり夏休み等を犠牲にして現場に張り付きご指導いただき、さらにその後この報告書にまとめていただきました。

その労苦にただ感謝あるのみであります。

総じてこの調査を通じ、平出地籍が広範にわたって焼き物に適した土の埋蔵地として古き時代に着目され活用されていたことが、昭和47年の長野国際カントリークラブ造成時に発見された窯址とも結びあわせ、より明らかにしていただくことができました。

竣工なった快適なバイパスに車を走らせるとき、この報告書が、遠い昔の人々の在りし日の暮らしに思いをつなぐ一助ともなれば幸いと念じています。

終りにバイパス建設の際、史跡「三本松」のうち一本が拡幅計画地内に取り込まれ、あわや伐採という危機もありましたが、長野建設事務所ご当局のご配慮により修景施設として存命の途を探索いただき事なきを得ました。時宜にかなったお取り計らいに心から感謝とお礼を申し上げ、序文といたします。

平成 4 年 3 月

前牟礼村教育長 町田 清司

## 例　　言

- 1 本書は、県道長野荒瀬原線のバイパス工事にかかる牟礼村平出地区内の遺跡の発掘調査報告書である。調査は牟礼村教育委員会が長野建設事務所の委託を受け実施したものである。
- 2 発掘調査は平成2年度・3年度に実施し、整理作業は平成5年度まで行った。
- 3 発掘調査の記録、および出土遺物は、牟礼村教育委員会が保管している。その際に用いる遺跡の略号は、西浦遺跡A地区「MHA-A」・B地区「MHA-B」、東浦遺跡「MHII」、上の山遺跡「MHU」、三本松遺跡「NHS」である。
- 4 本書の作成に関わる図面・遺物の整理は主として小柳義男が実施したが、遺物トレースの多くは横山かよ子の協力を得た。遺物写真は岡本公和によるものである。
- 5 本書における実測図の縮尺は住居址、窓址60分の1・土坑40分の1・土器4分の1・石製品3分の2を原則としたが一部縮尺の異なるものがある。なお、各実測図にその縮尺を示してある。
- 方位は磁北を使用している。
- 6 写真図版中の番号は実測図番号と一致する（例、図版12の「9-1」の場合は第9図1で示すものの遺物写真である）。
- 7 本書の執筆・編集は主として小柳が行ったが、第2章第1節、第2節2および第6章第1節1については矢野恒雄が執筆した。
- 8 本調査にあたり、猪沢浩・関川尚功・百瀬長秀・原明芳の各氏にご教示、ご指導をいただいた。また、本書の作成にあたっても、朝比奈克文・原明芳・出河裕典・百瀬新治の各氏に土器についてのご教示、ご指導をいただいた。感謝申し上げる。

## 本文目次

口 紜	
序	
例 言	
第1章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の体制	1
第2章 平出地区の概観	3
第1節 平出地区的地理的環境	3
第2節 平出地区的歴史的環境	3
1 平出地区的遺跡分布	3
2 平出地区的歴史的環境	6
(1) 古寺院について	6
① 西性寺	6
② 勝樂寺	7
(2) 平出願生寺と磐城	8
(3) 磐城と城下の平出	9
(4) 江戸時代の平出	11
(5) まとめ	12
第3章 平山西浦遺跡の調査	13
第1節 調査の概要	13
第2節 調査の結果	13
1 層序と地形	13
2 A地区	13
(1) 旧石器時代の遺物	13
(2) 繩文時代の遺物	14
(3) 平安時代の遺構と遺物	14
① 土 坑	14
② その他	20
3 B地区	22
(1) 平安時代の遺構と遺物	22
① 土 坑	22

② その他	36
ア SX 1	36
イ 遺構外出土の遺物	38
4 成果と課題	39
ア 土坑の性格	39
イ SK 2 の出土遺物の年代	39
ウ 土坑の年代	40
エ 須恵器の製作技法について	40
オ 瓦	41
第4章 平出東浦遺跡の調査	43
第1節 調査の概要	43
第2節 調査の結果	43
1 層序と地形	43
2 繩文時代の遺構と遺物	44
(1) 土 坑	44
ア SK 1	44
イ SK 2	44
3 平安時代の遺構と遺物	44
(1) 住居跡	44
ア SB 1	44
(2) 土 坑	45
ア SK 3	45
イ SK 4	45
4 成果と課題	46
第5章 平出上の山遺跡の調査	48
第1節 調査の概要	48
第2節 調査の結果	48
1 層序と地形	48
2 平安時代の遺構と遺物	49
(1) 黒 跡	49
① 1号窯	49
ア 1次窓体の構造	49
イ 2次窓体の構造	49
ウ 2次窓体出土遺物	50

② 2号窓跡	53
3 成果と課題	54
第6章 平出三本松遺跡	57
第1節 調査の概要	57
1 遺跡の概要	57
2 調査の概要	57
第2節 調査の結果	58
1 江戸時代の造構と遺物	58
(1) 七葬墓	58
① 1号墓	58
② 2号墓	58
(2) 出土人骨	59
2 成果と課題	59

## 挿図目次

挿図 1	牛札村遺跡分布図	4
挿図 2	平出地区を中心とした全図	7
挿図 3	磐城の城図	10
挿図 4	平出字界図	11
挿図 5	西浦遺跡 A 地区出土繩文土器拓影	14
挿図 6	縞刻のある土器	16
挿図 7	S K 2 出土の环法量	29
挿図 8	西浦遺跡 B 地区 S K 2 出土遺物実測図	31
挿図 9	甕の擬口縁内部に残る同心円の叩き目	41
挿図 10	東浦遺跡遺構全体図	43
挿図 11	S K 2 出土押型文土器	44
挿図 12	東浦遺跡出土遺物実測図	46
挿図 13	上の山 2 号窯址実測図	54
挿図 14	平出遺跡群周辺の古窯址分布図	55
挿図 15	2 号墓出土遺物	58

## 図目次

第 1 図	西浦遺跡地形図	61
第 2 図	西浦遺跡遺構分布図	62
第 3 図	西浦遺跡 A 地区土坑実測図	63
第 4 図	西浦遺跡 A 地区土坑実測図	64
第 5 図	西浦遺跡 A 地区土坑実測図	65
第 6 図	西浦遺跡 A 地区土坑実測図	66
第 7 図	西浦遺跡 A 地区 S K 16 出土遺物実測図	67
第 8 図	西浦遺跡 A 地区土坑出土遺物実測図	68
第 9 図	西浦遺跡 A 地区土坑出土遺物実測図	69
第 10 図	西浦遺跡 B 地区土坑実測図	70
第 11 図	西浦遺跡 B 地区土坑 (S K 3) 実測図	71
第 12 図	西浦遺跡 B 地区 S K 2 出土遺物実測図	72
第 13 図	西浦遺跡 B 地区 S K 2 出土遺物実測図	73

第14図	西浦遺跡B地区SK2出土遺物実測図	74
第15図	西浦遺跡B地区SK2出土遺物実測図	75
第16図	西浦遺跡B地区SK2出土遺物実測図	76
第17図	西浦遺跡B地区SK2出土遺物実測図	77
第18図	西浦遺跡B地区SK2出土遺物実測図	78
第19図	西浦遺跡B地区SK2出土遺物実測図	79
第20図	西浦遺跡B地区SK2出土遺物実測図	80
第21図	西浦遺跡B地区SK2出土遺物実測図	81
第22図	西浦遺跡B地区SK2出土遺物実測図	82
第23図	西浦遺跡B地区出土遺物実測図	83
第24図	西浦遺跡出土石製品実測図	84
第25図	西浦遺跡出土瓦拓影	85
第26図	東浦遺跡、上の山遺跡地形図	86
第27図	東浦遺跡遺構実測図	87
第28図	上の山遺跡地形図(上)1号窯址1次窯体実測図(下)	88
第29図	上の山遺跡1号窯址(2次窯体)実測図	89
第30図	上の山遺跡1号窯址出土遺物実測図	90
第31図	上の山遺跡出土遺物実測図	91
第32図	三本松遺跡地形図・土葬墓実測図	92

## 写真図版目次

- 図版1 西浦遺跡全景・調査風景
- 図版2 西浦遺跡A地区SK14断面と出土した甕・土坑群
- 図版3 西浦遺跡A地区土坑群
- 図版4 西浦遺跡A地区土坑群
- 図版5 西浦遺跡A地区土坑調査風景・調査図
- 図版6 西浦遺跡B地区全景
- 図版7 西浦遺跡B地区SK2遺物出土状況
- 図版8 西浦遺跡B地区SK2遺物出土状況
- 図版9 西浦遺跡B地区SK2遺物出土状況
- 図版10 西浦遺跡B地区SK3
- 図版11 西浦遺跡B地区SK4・SK5
- 図版12 西浦遺跡A地区出土遺物

- 図版13 西浦遺跡出土遺物
- 図版14 西浦遺跡B地区SK2出土坏
- 図版15 西浦遺跡B地区SK2出土坏
- 図版16 西浦遺跡B地区SK2出土坏
- 図版17 西浦遺跡B地区SK2出土坏
- 図版18 西浦遺跡B地区SK2出土坏
- 図版19 西浦遺跡B地区SK2出土坏
- 図版20 西浦遺跡B地区SK2出土坏・蓋
- 図版21 西浦遺跡B地区SK2出土遺物
- 図版22 西浦遺跡B地区SK2出土瓦
- 図版23 西浦遺跡出土遺物
- 図版24 西浦遺跡出土遺物
- 図版25 底部円柱づくりをしめた坏
- 図版26 西浦遺跡B地区出土網文土器・東浦遺跡SK1出土網文土器
- 図版27 上の山遺跡遠景・近景
- 図版28 上の山遺跡近景・1号窯址と2号窯址
- 図版29 上の山遺跡1号窯址
- 図版30 上の山遺跡1号窯址
- 図版31 上の山遺跡1号窯址
- 図版32 上の山遺跡1号窯址
- 図版33 上の山遺跡1号窯址
- 図版34 上の山遺跡1号窯址
- 図版35 上の山遺跡2号窯址
- 図版36 上の山遺跡1号窯址出土坏底部
- 図版37 東浦遺跡遠景・近景
- 図版38 東浦遺跡SK2・SK3
- 図版39 東浦遺跡1号住居址
- 図版40 三本松遺跡全景・1号墓出土人骨

# 第1章 発掘調査の経過

## 第1節 調査に至る経過

昭和60年度から事業を開始した県道長野荒瀬原線バイパス工事（完成予定平成6年度）の実施に伴い、村内遺跡分布図に示される平出遺跡群地内を同バイパスが通過することが判明。これが本調査の契機となった。

平出遺跡群は牟礼村の南東部に位置し、長野市に近く付近には遺跡が多い所である。このため県教育委員会の指導により、平成元年度に遺跡の範囲確認のため試掘調査を行った。

その結果調査地点を4カ所に指定し平成2年7月25日～平成4年3月31日までの日程で調査を行い記録保存するはこびとなった。

## 第2節 調査の体制

### \* 遺 跡 名 平出遺跡群遺跡

西浦遺跡 牟礼村大字平出字西浦803

三本松遺跡 牟礼村大字平出字行人塚2952

東浦遺跡 牟礼村大字平出字東浦727

上ノ山遺跡 牟礼村大字平出字上ノ山12799

### \* 発 挖 期 間

西浦遺跡 平成2年7月29日～8月22日

三本松遺跡 " "

東浦遺跡 平成3年4月2日～4月9日

上ノ山遺跡 平成3年7月15日～8月8日

### \* 調査委託者 長野建設事務所長 丸山昌義

### \* 調査受託者 牟礼村教育委員会

### \* 調 査 会

顧問 平井博文 牟礼村村長

理 事 小林柱太 教育委員

" 近藤隆治 議會議長

( " 横山淳 "

( " 広田勝 "

矢野恒雄 文化財調査委員長

会長 清水凡夫 教育委員長

" 井沢信雄 文化財副委員長

( " 高野孝雄 " )

" 青山紫朗 文化財調査委員

副会長 広田勝 議会文社委員長

" 原田茂 "

(〃 上原悦明 〃 ) 理事 米沢稔秋 文化財調査委員  
理事 丸山弘鉄 教育委員 〃 丸山久 〃  
〃 高野孝雄 〃 〃 中川義夫 公民館長

\* 調査団

团长 小柳義男 長野市芹川小学校教諭  
調査顧問 笹沢 浩 中野実業高校教頭  
調査主任 矢野恒雄 文化財調査委員長  
調査員 森山公一 信濃町・印刷会社経営

\* 調査協力者

丸山昌義 長野建設事務所長	平林哲男 長野建設事務所係長
(仮田今朝夫 〃 )	(西沢 博 〃 )
小山田友久 長野建設事務所建設課長	柳沢豊茂 長野建設事務所技師
(長沢 徹 長野県建設事務所技師	石川 功 车札村建設課建設係長
松田謙吾 車札村建設課長	大川説夫 〃 管理係長
(広田秀和 〃 )	

\* 地元協力者

渡辺幸夫 平出区長	(八木保太郎 平出分館長)
(山崎 明 〃 )	和田公男 〃 副分館長
原田利隆 〃 副区長	(原田正二 〃 〃 )
(白鳥岳史 〃 〃 )	渡辺繁夫 〃 分館主事
渡辺湊 〃 分館長	(小林隆夫 〃 〃 )

\* 調査事務局

局长 町田清司 教育長	(局員 近藤祐 臨時職員)
(〃 山田邦彦 〃 )	〃 三ツ井吉次 社会教育係長
次長 仲俣一重 教育次長	〃 伊藤恵子 教育委員会事務局主査
局員 山田邦彦 教育相談員	

\* 作業協力者

前田竹千代 渡辺幹夫 松木保男 名古信雄 小林和多利 寺島直子
上野三治 市西謙道 尾崎忠 津沢実夫 丸山嘉吉 土屋亘
竹花民夫 柳沢勇喜男 寺野たまの 伊藤ますみ 近藤祐 伊藤利男
佐藤友紀 尾崎望 原田妙子 原田卓也 神谷袈裟雄 原田忠直
佐藤仁美 寺島つやこ 森孝雄 木賀田直治 森泉 伊藤勉
原田豊子

## 第2章 平出地区の概観

### 第1節 平出地区の地理的環境

平出遺跡群の点在する地域は牛札村の南東に位置する大字平出と番匠集落で、標高約600m前後の高原である。南端は磐山(744.5m)山系で長野市と接する。長野市側はやや急峻な地形をなして善光寺平に下っている。北は東西に連なる大字牛札前高山山系を分水嶺として南に傾斜している。東は豊野町、西は大字袖之山に接している。地形的には平出北部は中央を北東に流出する小渓の月見川があるため、やや高原盆地的である。

五月初旬、桃の開花期に平出南部の一角にたって北西を眺めれば、桃畠の彼方に飯綱山・黒姫山・妙高山・斑尾山等の残雪をいただく靈峰が望見され、いわゆる「丹霞郷」の名勝として知られる風光明媚な地である。

気象上は北端に標高650m前後の前高山山系を負って南傾斜しているので、牛札村でも冬雪が少なく春の農作業開始が早い。しかし山が浅く月見川の自然流が一つあるだけで用水路もなく、特に南部は専ら天水田地帯でオカドコの畑作地帯である。戦前からこの畑地・山林に逐次果樹栽培が導入され、土質の良さとも相まって現在では牛札村隨一の果樹園芸地区として、その生産を上げている。中でも桃は約10haもの桃畠地が造成され、おいしい桃として全国的に販路がひびて有名である。

北部の山地、字吉山・カギ畠・ワレ石・北八反田・長老山等の一角に大字牛札地区の山とあわせて約100haのゴルフ場が開発され、当地区側には外周道路も完成し農道として活用されている。

集落は平出地区的東方、南北に縦貫する旧北国街道（現県道長野荒瀬原線）沿いに集まり、善光寺平からの越えの入口に立地している。殊に南部は道路に面して完全な街村をなしている。

一昨年より旧道の西側に長野荒瀬原線のバイパス道路建設が進められ、集落内の交通安全が確保されようとしている。また、この地は東は豊野町の神代坂や白坂峠に接続し、西は袖之山を経て、飯綱山東山麓そして戸隠に達する交通の要衝でもある。(矢野恒雄)

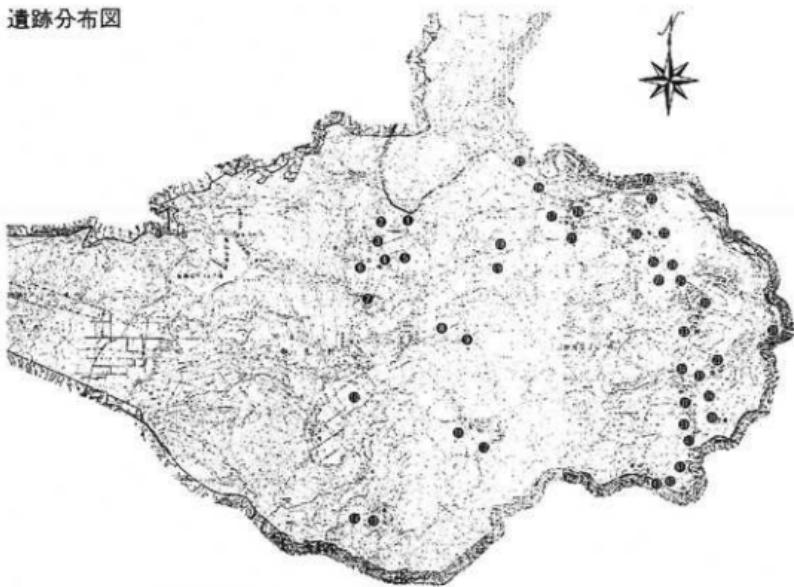
### 第2節 平出地区の歴史的環境

#### 1 平出地区的遺跡分布

平出地区には縄文時代の遺跡が3ヶ所、弥生時代の遺跡が2ヶ所、古墳時代の遺跡（古墳）が3ヶ所、平安時代の遺跡が7ヶ所分布していることが明らかになっている[1]。

縄文時代の遺跡には東浦A（字東浦）・平出南（字長山）・庚申塚（字西浦）遺跡があり、東浦A遺跡からは加曾利E式I:器片と磨製石斧が出土している。平出南遺跡からは加曾利E式および

## 遺跡分布図



村内遺跡一覧表

番号	種別	時代	名稱	所在地
1	包藏地	古	上の山遺跡	古町字上の山
2	"	繩	石原 "	石原 "
3	"	"	蟹原 "	柳里字蟹原
4	"	"	大岩 "	字大岩
5	"	繩~平	下向山 "	字下向山
6	"	繩	南 "	字南
7	"	"	接道 "	字接道
8	"	"	茶臼山 "	川上字茶臼山
9	"	古	強清水 "	字強清水
10	"	繩・古	丸山 "	高板字丸山
11	"	平	かつも原 "	袖之山字かつも原
12	"	繩	東久保 "	字東久保
13	"	繩~平	甘池 "	坂口字甘池
14	"	平	上向 "	字上向
15	"	繩	西屋敷 "	小玉字西屋敷
16	"	繩・古	小玉 "	字小玉
17	"	跡	庚申塔 "	黒川字庚申塔
18	"	"	前田 "	字前田
19	"	平	殿屋敷 "	字殿屋敷
20	"	"	裏町 "	牟礼字裏町
21	"	"	七割 "	字七割
22	"	"	榮町 "	字榮町
23	"	弥~平	穂詰 "	"
24	"	繩	東前坂 "	字前坂
25	"	繩~平	宮の下 "	豐野字宮の下
26	"	"	大久保 "	字大久保
27	"	平	山道平遺跡	豊野字山道平

番号	種別	時代	名稱	所在地
28	平	古	桃原 "	豊野字桃原
29	"	山道	"	字山道
30	"	弥・古	北の原 "	字北の原
31	"	古・平	谷 "	字谷
32	窯址	平	番匠窯址 "	字番匠
33	包藏地	平	家岸遺跡 "	平出字家岸
34	"	宝飯	"	字宝飯道
35	"	繩・平	東浦A "	字東浦
36	"	平	東浦B "	"
37	"	古・平	平出北 "	"
38	"	酒浦	"	字酒浦
39	"	弥	酒浦 "	字西浦
40	"	リ	平出南 "	字長山
41	古墳	古	小丸山古墳 "	平出字西浦
42	"	リ	庚申塔遺跡 "	"
43	"	リ	鐵治久保古墳 "	"
44	包藏地	繩	明月寺遺跡 "	柳里字明月寺
45	城跡	中世	矢箇山城跡 "	牟礼字城山

挿図1 牟礼村遺跡分布図

塙ノ内式の土器片と磨製石斧が出土し、庚申塙遺跡からは磨製石斧が出土している。

弥生時代の遺跡は西浦（字西浦）・平出南（字長山）遺跡があり、西浦遺跡からは大型蛤刃石斧が、平出南遺跡からは箱清水式土器片が出土している。

古墳は小丸山古墳（字西浦）・前方後円墳の庚申塙古墳（字西浦）<sup>[2]</sup>・銀治久保古墳<sup>[3]</sup>がある。また、髻山山麓の小高い山頂にも径15mほどの円墳が確認されている。この他にも庚申塙古墳の周辺に古墳が存在していたようである<sup>[4]</sup>。当地には、現在までのところ古墳時代の集落址は確認されておらず、これらの古墳を築いた勢力は善光寺平にあったものと思われるが、今後の課題でもある。

平安時代になると半札村の遺跡は急増しており、平出地区でも家岸（字家岸）・室飯（字室飯道）・東浦A（字東浦）東浦B（字東浦）・平出北（字東浦）・酒浦（字酒浦）・前高山窯址（字古山）の遺跡が確認されている。

家岸遺跡からは須恵器高台坏など須恵器片が多量に出土している。室飯遺跡からは土師器片が出土している。東浦A遺跡からは多量の土師器と須恵器坏・甕が出土している。東浦B遺跡からは土師器坏・甕・須恵器片などが出土し、平出北遺跡からは高台坏・蓋等が出土している。酒浦（坂浦）遺跡からは、須恵器の甕の破片等が出土している。

今回の調査によっても東浦遺跡において住居址1棟が検出されたのを初め、西浦遺跡では粘土探掘土坑と思われる土坑を多数検出するなど、この時代の発展ぶりがうかがえる。

前高山窯址はゴルフ場建設にともない昭和47年に調査された。その結果、三地点から6基の窯址が発見され調査されている。調査の概要は上水内都誌などに紹介されている<sup>[5]</sup>。この他周辺の現地調査により宇明神山・字針ノ木・字吉ノ沢・字葡萄原において5遺跡7基以上の窯址を確認している<sup>[6]</sup>。隣接する番所地区には番所古窯<sup>[7]</sup>もあり、今回調査した上の山窯址も含め一帯はかなりの規模の窯業地帯であったようである。

中世の平出地区的歴史的環境は次項に詳しい。

## 註

- 1 「長野県史考古資料編」にはこのほかに縄文時代の遺跡として「平山分校附近遺跡」と名づけられた遺跡があるが、これは「農業振興等開発地域埋蔵文化財緊急分布調査報告書」では「東浦A遺跡」に含まれており、本書はそれにしたがうこととする。  
『長野県史考古資料編』遺跡地名表 P58 長野県史刊行会 1981  
『農業振興等開発地域埋蔵文化財緊急分布調査報告書』P10～ 長野県教育委員会 1971
- 2 松沢芳宏「長野県上水内都半札村庚申塙古墳について」「信濃」31巻12号 1979
- 3 「農業振興等開発地域埋蔵文化財緊急分布調査報告書」P16 長野県教育委員会 1971
- 4 井沢信夫「前田遺跡」P10 半札村教育委員会 1981  
栗岩英治「髻山及附近の探査」「信濃」1次第2卷10号 P16 1933
- 5 笹沢 浩「上水内都誌歴史編」P195～ 上水内都誌編集会 1976
- 6 多くは前高山窯址や上ノ山窯址出土の遺物と類似するが、いくぶん古い様相の遺物もみられる。調査はまだ不十分であるので稿をあらためて報告したい。
- 7 笹沢 浩「上水内都誌歴史編」P201～ 上水内都誌編集会 1976

## 2 平出地区の歴史的環境

平出の文献上における地名の初出は天正十年（1582）で上杉景勝朱印状案地行方之覚に「百貫文嶋津領平出」（『信濃史料』補遺上）とある。もちろんこれ以前から平出の集落は存在していたことは間違いない。ところで平出地区には牛込村唯一の古い中世的な伝承をもつ寺院跡があるので、これらを手がかりに地域の歴史を追求することにする。

### （1）古寺院について

#### ① 西性寺

新潟県能生町にある鬼谷山西性寺の『靈宝略縁起』に「親鸞聖人建暦二辛未（壬申）の年（1212）流罪赦免を蒙り、則御帰路の恩召立願にして国府の御庵室（越後国に承元元年専修念佛停止され流罪）を出土ひて、信濃路へ趣ましましけり。（中略）水内郡太田の庄黒川の郷平出の城主楠田出雲守といふ領主あり、ふと祖師聖人を拝し奉るに宿僧の催しにや、そぞろ有り難き思いを生じ御教化を願ふによって、通夜専修念佛易行他力の理を念頃にすすめ在りしに宿念忽ちに満足し、信心歡喜のおもいをなす事いふ計なし。（中略）出雲守終て後、子孫なお祖師聖人の御跡をしたふこころざしやまずして、常陸國稻田といふ所にて、御対面を遂げ則御弟子となりぬ。法名淨願房と附たまふ。（中略）淨願房歡喜の思ひを成、頂戴して本国へ船り、平出村に一字を建立して楠田西性寺と号す。（下略）」とある。寺に赴いて真偽の程を伺うと、このことを示す原史料はない。したがってすべて歴史的事実として肯定はできないが、その背後には歴史的なものをいくつか推察されるのである。

第一に親鸞が関東に赴く途中、黒川郷平出を通ったと言うような古道があった。現在この古道筋について大字平出字八方と大字袖之山字八方口の字標を南に下る塩沢道（峠）を令制東山道に比定している。したがって楠田出雲守は東山道端の字八方辺に居住していたことになる。現在、字八方の山ふところに、寺屋敷跡らしき場所がある。今後の調査・研究に期待するものである。

第二は楠田氏が親鸞に帰依して西性寺を創立したとあるが、その頃、黒川郷には西黒川に居館して矢筒山に山城をもつ島津氏がおったことを思う時、楠田氏は島津氏の領内を離れ親鸞の専修念佛をとなえて農民を指揮した小領主であったろうと察せられるのである。

後述するが、西性寺は後からこの地に入ってきた願生寺を手次ぎ寺として、その寺内になっている。その後永く願生寺門徒として平出にあったが、次の慶長八年（1603）の御裏書（西性寺藏）は、西性寺が確かに平出に寺地があったことを示す唯一のものである。

本願寺駕教如（花押）

慶長八年癸卯穀穗七月廿日

証如上人直影

願生寺門徒水内郡

太田庄黒河郷平出村

願主 駕願尊

願主の駕願尊は西性寺の第十三世である。現在残念ながら平出地区には西性寺の存在を語る人

は一人もいない。

## ② 勝樂寺

長野市大字村山字地蔵窪60-1番地の一角に、間口一間奥行一・五間の小堂があつて中に石の地蔵尊が安置されている。その傍らに、昭和63年7月22日建立の井上山勝樂寺跡の標柱が立っている。その側面に「康永二年(1343)牛札村平出ヨリ里村山村当地に移転、慶長十一年(1606)故アッテ上高井郡福島村ニ移住ス。」と書いてあるのを読んで驚いた。早速福島(現須坂市)の勝樂寺(淨土真宗本願寺派)を訪問し、二十五代住職智秀氏にその寺史を拝聴した。

それによると開祖は唯仏と称し親鸞聖人から法名を賜り聖人流罪勅免の折りは、現地に残り建保四年(1216)の秋、信州は柏原に堂宇を建立し六十七年後、弘安三年(1280)に三代の玄慶が黒河郷平出に移り、ここにいること六十三年間、康永二年平出を去ったと言うのである。これ等は単に寺伝ではあるが頗るにあたうするものである。しかし平出地区では、これまでまったく知られていない。以上二つの寺伝からして鎌倉末期には既に平出に門徒寺院が二ヶ寺もあったということになり、その周辺住民も門徒に帰依していたことがうかがわれるのである。



挿図2 平出地区を中心とした全国

## (2) 平出願生寺と磐城

從来、上平出の寺屋敷跡が磯部六ヶ寺の一つである願生寺跡に比定されている。延宝七年(1679)の『平出村畠方検地帳』(平井博文氏蔵)にも既に「上平出寺屋敷」の耕地名が登場する。

願生寺の一派である真宗東派證念寺(牛札村本町)について明治八年『社寺関係書類』(牛札村役場蔵)によると、その由緒縁起に「(上略) 応仁二子年(1468)七世祐栄、信濃国水内郡磐山ノ麓ニ移転シ一村開発シテ平出村ト称シ一字ヲ建立シテ平出坊ト称ス。永正拾六年(1519)本願寺第九世実如上人、信州水内郡太田莊黒川郷平出願生寺願主裕賢ト本尊ノ裏書ヲ賜フ。(この掛軸牛札の證念寺に現存)」永禄年中上杉謙信ニ磐山ヲ譲リ黒川村ニ居住シ(現東黒川袖組に願生寺跡あり。)謙信の命ニ依テ長男尊照ハ越後國頸城郡新井村ニ一字建立ス。(現上越市新井別院の地)祐賢・乗尊ハ信濃ニ止り、願生寺改称シテ證念寺ト号シ住職ス。天正七年(1579)織田信長石山合戦ノ節、平出一族上京シニ男平出監物討死ス、三男平出三右衛門法名淨性坊ト賜リ越後國鬼伏ニ一字建立シ、西性寺ト号ス。」とある。

これらには、いくつかの重要な地域の歴史が秘められている。まず第一に「上杉謙信ニ磐山ヲ譲リ」は、それまで願生寺は磐城の城主であったことを示し、平出一円の領主的な武士の頭領でもあったことになる。このことについて『大高山願生寺年歴』(新潟県新井市除戸の真宗大谷派願生寺)には「川中島の合戦後、上杉謙信は願生寺の磐山城を要害の地とし、願生寺を袖之山(前述の東黒川)に移した。その代替として謙信は祐賢の子栄賢に長老山北国寺ほか七カ寺を寄付しそ



写真1 長老山出土の五輪塔片

の支配を命じた。この北国寺が新井願生寺のもとである。」と述べられている。この中で長老山北国寺とあるが、現在平出には長老山があって（延宝七年の『平出村畠方検地帳』にもあり）山麓から五輪塔が出土している。長老山北国寺の山号長老山は平出の長老山にちなんだもので、その頃長老山の麓に天台か真言の寺院があったことを意味するものではなかろうか。

また、字長老山に接した宇仲畠には経塚山もあって経石が出土している。まさに、この地域は願生寺門徒が立地する以前から古寺院が存在したことを見かがわせるものがある。

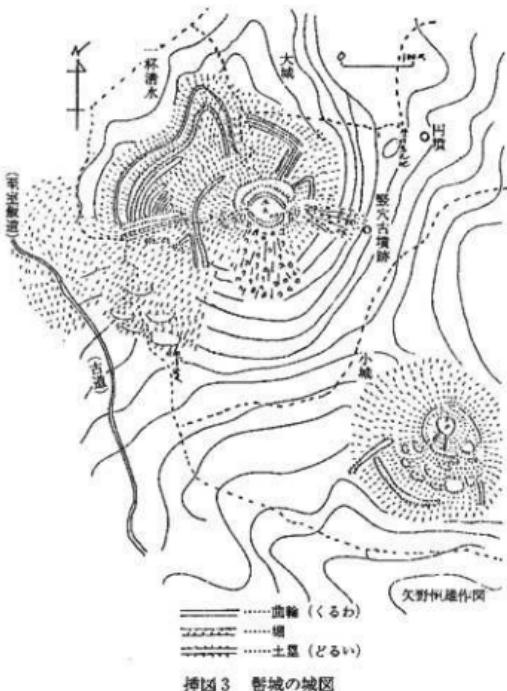


写真2 豊城山全景

### (3) 豊城と城下の平出

豊山（744.5m）の頂きにある豊城本丸は現在、長野市の地籍で牛込村地籍分は本丸を除く山の北半分である。しかしこの城を支配した城主の寺地は、上杉・武田を除いては牛込村側の平出地区にあった西性寺であり願生寺で興味深いものがある。ここに願生寺跡入口には馬場跡もあった。従って現在の豊城跡の造構は西性寺・願生寺の城主の時代から逐次構築され、最終的には上杉・武田によって完成されたものである。上杉・武田の戦いについては次のような文献がある。永禄七年（1564）九月五日上杉方の直江大和守から岩船長忠等に宛て武田信玄の軍に備えさせた書状案（『信濃史料』十二卷）に「（上略）敵はもとより山へ小旗四・五本にて毎日武具致す由に候。これをば如何とも御覧じ量らせられ、御擬をなされ御覧じなすべく候。（下略）」とあり、武田方の兵が豊城にせまり来る様子がうかがわれる。

城図でもわかるように北麓の平出側には曲輪、堀、土塁が懸然と残り、殊に横堀末端が縫堀となつて本丸に通じている点は珍しい。北方からは縫堀と横堀の間を利用して本丸下の曲輪まで達する赤線の大手道らしきものがある。山城に関する地名として水の手の一杯清水、謙信馬洗池、



挿図3 豊城の城図

北国街道を境に西方は月見川の上流にあって、ちょうど豊城の北にあたる城下の村と考えられるのである。その中央に字仲戸がある。延宝七年の検地帳では「中くね」地名が出てくる。これは仲戸と同一地名と考えて間違いない。「くね」とは樋をめぐらした有力者の居住地の名残地名である。

前述のように、ここには経塚もあり、その山手にはやや人口的な平地もあって住居跡がうかがわれる。とにかく、この仲戸のあたりを中心として、中世には城下の村として人家が存在したことは間違いない。

交通的には南方から一杯清水—上平出—室坂道—カギ畑と、いわゆる牛込（室坂）の矢筒城をめざした室坂道の古道がある。この道筋の存在については先年国土調査にあたった牟礼村の係員も証言されている。さらにまた東方神代坂を上ってきた道は青野神社跡北側を通りウドノ坂（善知鳥坂の意で近くの宇葡萄原の諧謔）—清水窪—上平出—八方—袖之山から戸隠方面をめざす古道が上平出で前記の室坂道と交叉している。したがって上平出の順生寺跡即ち城主の館は交通の要衝にあったと言えるのである。

鍛冶久保（武具を作る）がある。

ところで、一般的に豊城は大城のことをさし、別に大城の東南部に統いて小規模な小城がある（城図参照）。子細に調べると小曲輪・土塁等が確認される。ここは上杉氏の名将守佐美定行の城跡とも言われている。

実際に布陣したのは、宇佐美沢の北国街道端の南斜面のようである。

北方明神山（延宝七年の『平出村畠方検地帳』にもその名あり、大正十二年まで山頂に大穴牟佐神社あり。）の頂上の周囲には土塁跡が残っている。たぶん豊城関係の砦跡であろうか。



挿図4 平出字界図（明治18年平出村一筆銀図による）

#### (4) 江戸時代の平出

平出村高辻の変遷（表1）

慶長7年	143石3斗
正保4年	152石余
元禄15年	530石6斗9升9合
天保5年	530石6斗9升9合

平出の北部（山神代は別）は西方の字上平出方面から明神山周辺に移住してきたものと伝えられている。そして慶長十六年（1611）北国街道の全面開通により、街道端へも逐次移転し、さらに平出の南部街道端に新田の村が伸びて、元禄期には平出新田村が独立している。（元禄六年の年貢割付状に「平出新田村」とある。）これらの事を実証するが如く延宝七年（1679）の『平出村田方検地帳』（平井博文蔵）中に、「本屋敷」の耕地名が記載されている。これは前居住地の屋敷地の意で字日向あたりがこれに比定されている。また延宝七年の畠方検地帳には「吉野在家」に九郎兵衛の耕地「下下畠反六斗」の土地がある。同検地帳では「九郎兵衛屋敷」（現当主原田茂氏）として三斗の免を許可された開拓の祖で、同家には「北の本村のほうから移住してきた。」との伝承があるのにかんがみ、最初は吉野在家に居住していたことになる。おそらく吉野在家はいまの字吉ノ沢であろう。

平出村の高辻の変遷は『信濃史料叢書』十一巻によると（表1）のようである。この石数は新田の村をも含めた数量である。新田村が成立した元禄期には一躍増加している。

延宝七年の平出川方と平出新田の田方検地により、耕地名の高を示すと（表2）のようである。

延宝七年 平出村・平出新田の田方耕地名と石数  
(表2)

平出新田 田方		平出村 田方	
八 反 田	約6石	日 向 田	約13石
八 方	3	下 八 反 田	9
東 う ら	3	ど ぶ 田	9
西 う ら	3	ぶ どう 原	7
清 水 錦	2	明 神 山	6
上 平 出	2	は ば 下	6
鐵 治 錦	1	む ろ い 道	5
長 山	1	川 ば た	5
一 杯 清 水	1	本 尾 敷	4
長 老 山 こ し	0.5	よ し の さ い け	4
針 ノ 木	0.3	中 く ね	3
袴 須 山 海 道	0.1	川 原 田	3
せ とう 山 の こ し		長 老 山 こ し	2
ぶ た う 原	0.1	仁 左エ門山 こ し	2
池 田		こ し ま い	1
		清 水 く ぼ	1
計	約24石	計	約80石
検地帳では23石5斗4升 2合		検地帳では79石6斗1升 6合	

——は、現在も使用されている小字名

同年の検地帳によると平出村の田畠の総石数は約284石であるから、田はその28%であり、平出新田の方は田畠合計の1%である。如何に水田の石数が少ないかがうかがわれる。殊に南の新田の方が少なく文字通りの畑作中心のオカドコである。

#### (5) まとめ

江戸時代は北国街道にそって街村をなし、畑作中心の寒村であるが、中世においては西性寺・願生寺等が立地し城下の町としての文化地帯をなしている。この要因としては善光寺平からの峠越えの東山道等の入口にあり、また鬱城の城下にあった事も考えられるが、土地の生産力との関係はどうか、今後に残された研究課題である。

(矢野恒雄)

## 第3章 平出西浦遺跡の調査

### 第1節 調査の概要

西浦遺跡は牛札村大字平出字西浦803番地周辺に所在する。

遺跡は舌状にのびた低い尾根にはさまれた低地に位置し（第1図）、標高は583～585m前後ある。

遺跡の存在は、県道長野・荒瀬原線のバイパス工事に伴う事前調査（試掘調査）によって確認された。

発掘調査は平成2年7月29日より8月22日まで実施され、調査面積は2,700m<sup>2</sup>近くになる。

調査は進行上、農道の通る舌状にのびた尾根を境にA・Bの2地区に分けて実施したが同一の遺跡と考えて良いものである。

調査によってA地区からは16基の土坑が、B地区からは5基の土坑と性格不明の遺構が1基検出された（第2図）。土坑の中には灰白色粘質土の採掘を目的に掘られたと考えられるものがあり、また、土坑内に須恵器や土器類などの遺物がのこり土坑が形成された時期が9世紀後半を前後する時代であると判断できるなど貴重な所見が明らかになった。

### 第2節 調査の結果

#### 1 層序と地形

遺跡は平出神社の北側60～110mほどの間に広がる。遺跡の中央および北側と南側は、神社の位置する山裾から伸びている尾根によって囲まれ、北東方向に開く地形である。

層序はおむねI層表土（耕作土）、II層黒土、III層茶褐色土、IV層灰白色粘質土（下部はハミスを多く含む）、V層灰白色粘質土、VI層黄白色砂質層の順に堆積している。

尾根の部分ではII、III層の堆積が少なく北東方向に厚くなる。

#### 2 A地区

##### （1）旧石器時代の遺物

2点の剥片が14F地点より出土している（第24図1・2、写真図版23）。いずれも表面が風化しており石質ははっきりしない。1点は縦長の剥片で、もう1点は横長の剥片である。

本遺跡の北900mほどに位置する中高山遺跡からは、貝岩製の石刀・彫刻器、黒曜石製の石核などが発見されている〔1〕。また、（仮称）葡萄原遺跡からの表採資料〔2〕にも局部磨製石斧がみられ今後の一帯の詳細な分布調査が待たれる。

## (2) 繩文時代の遺物

SK 2 および SK 16より各1点の土器片が出土している。

SK 2 より出土したものは(挿図5-1、写真図版26)、現存部で6cmほどの一本の沈線が横に施されている。いっさに引かれたように見えるが、途中に2ヶ所の引き継ぎの痕が観察できる。胎土には白色あるいはキラキラ光る鉱物などを多く含む。赤褐色に良く焼けている。

挿図5-2はSK 16より出土している。口唇部は細い棒状のもので押圧されている。表面はみがかれ、内面も条痕が残るがその上をかるくみがいているようである。胎土には砂粒がめだつ。これは、晩期後半に位置づくものであろう。



挿図5 西浦遺跡A地区出土繩文土器拓影(1/2)

## (3) 平安時代の遺構と遺物

### ① 土 坑

#### ア SK 2 (第3図)

長径190cm、短径155cmほどの楕円形にちかい形をしている。深さは115cmほどある。

SK 2 と SK 3、SK 4はB地区と境をなす舌状にのびた尾根の縁に並ぶように検出されている。

土坑はIII層上面で検出された。III層とIV層を掘り込み、さらにV層を35cmほど掘り込んでいる。土坑内は第3図に示すような堆積をしていた。

出土遺物 須恵器の壺と黒色土器Aの壺である。

須恵器壺は95点(550g)、黒色土器Aの壺は5点(35g)の破片が出土している。遺物はいずれも茶褐色土(炭化物を含む)層の中から出土している。

第9図21は須恵器の壺で口径13.8cm・器高3.6cmある。底部と体部との境がいくぶん屈曲し体部は内湾ぎみにのび、口縁部はいくぶん外反する。底部には糸切り痕が未調整のままのこる。

#### イ SK 3 (第3図)

長径200cm、短径190cmほどの円形にちかい形をしている。斜面にあるため深いところで150cmほどある。土坑はIII層上面で検出された。III層とIV層を掘り込み、さらにV層を50cmほど掘り込んでいる。

土坑内は第3図に示すような堆積をしていた。

出土遺物 須恵器の蓋が茶褐色土(炭化物を含む)層の中から1点出土している。SK 16出土の蓋と接合しているので後述する。

#### ウ SK 4 (第3図)

長径210cm、短径170cmほどの円形にちかい形をしている。斜面にあるため、深いところではほぼ140cmある。土坑はIII層上面で検出された。III層とIV層を掘り込み、さらにV層を40cmほど掘り込んでいる。

土坑内は第3図に示すような堆積をしていた。

出土遺物 須恵器の壺・蓋、土師器の壺・甕、黒色土器Aの壺が出土している。遺物はいずれも炭化物混じりの黒褐色土の中から出土している。

須恵器は壺35点(160g)、蓋1点(3g)、土師器は壺1点(32g)、甕40点(320g)、黒色土器Aの壺は12点(108g)の破片が出土している。

第9図22は黒色土器Aの壺で口径11.5cm・器高3.7cmある。底部と体部との境が屈曲し、厚めの底部が突出ぎみに見える。体部は内湾ぎみにのびる。内面は黒色処理されていないが、ヘラミガキで調整されており黒色土器とした[3]。底部はヘラ削りで調整されている。

このほか赤焼けの須恵器とも土師器とも判断つかないような繊片が22点(50g)ある。

#### エ SK 5 (第3図)

土坑の西側が用地からはずれ全体を確認できなかったが、確認できた部分で長径270cm、短径170cmほどあり、横円形にちかい形をしていたものと思われる。深さはほぼ120cmある。

SK5とSK8、SK12、SK13は調査区の西端に並ぶように検出されている。

土坑はIII層上面で検出された。III層とIV層を掘り込み、さらにV層を40cmほど掘り込んでいる。

土坑内は第3図に示すような堆積をしていた。

出土遺物はなかった。

#### オ SK 6 (第5図)

長径260cm、短径230cmほどの円形にちかい形をしている。深さはほぼ80cmある。

土坑はIV層上面で検出された。(遺跡の中央部周囲は重機で土を移動したため検出が遅れた可能性がある。)IV層を掘り込み、さらにV層を35cmほど掘り込んでいる。東端の一部はSK9によって壊されている。

土坑内は第5図に示すような堆積をしていた。

出土遺物はなかった。

#### カ SK 7 (第5図)

長径270cm、短径230cmほどの円形にちかい形をしている。深さはほぼ80cmある。

土坑はIII層下部で検出された。III層とIV層を掘り込み、さらにV層を45cmほど掘り込んでいる。

土坑内は第5図に示すような堆積をしていた。

出土遺物はなかった。

#### キ SK 8 (第4図)

土坑の西側が用地からはずれ全体を確認できなかったが、確認できた部分で長径250cm、短径140

cmほどの半円形にちかい形をしている。深さはほぼ130cmある。

土坑はIII層上面で検出された。III層とIV層を掘り込み、さらにV層を40cm掘り込んでいる。

土坑内は第4図に示すような堆積をしていた。

出土遺物 完形の須恵器短頸壺が1点(277g)出土している。黒褐色土からの出土である。

短頸壺は、口径9.0cm・器高8.0cmで最大径は胴部中央にある。口縁部はゆるやかに外反するが、口唇のナデによって端部は内湾ぎみになっている。底部は糸切り後、一部にヘラによる調整が見られる。胴部下部にも底部から見て左回りにヘラ削りが施されている(第9図1)。

焼成は良い。

#### ク SK9(第5図)

長径280cm、短径220cmほどの大きさである。深さはほぼ75cmある。

土坑はIII層の中ほどで検出された。III層とIV層を掘り込み、さらにV層を20cmほど掘り込んでいる。北側の一部はSK6を壊している。

土坑内は第5図に示すような堆積をしていた。

出土遺物 須恵器の壺・高台壺・甕・小型壺、土師器の壺・甕・小型甕・蓋・皿・羽釜、黒色土器Aの壺・碗・鉢が出土している。

遺物はいずれも黒褐色土層の中から出土している。

須恵器は壺162点(1,015g)、高台壺3点(25g)、甕4点(45g)、短頸壺8点(62g)の破片が出土している。

第9図2は須恵器の壺で、口径12.8cm・器高3.7cmある。底部と体部との境が屈曲し、厚めの底部が突出ぎみに見える。体部は直線的にのび、口縁部はいくぶん内湾ぎみとなる。底部には糸切り痕が未調整のまま残り、ヘラ記号と思われる「一」が施されている。B地区のSK2出土の壺底部に見えるヘラ記号と比べると長く鋭い線であり様相を異なる。

短頸壺は口縁部がほぼ直立するものと、大きく外反するものとにわかれる(第9図5~8)。

口縁部がほぼ直立するものは、口径が14.6cmある大型のもの(5)と口径6.6cmの小型のもの(6)がある。口縁部は短く、体部は肩がなだらかにくだる。焼成は共に良好である。口縁部が大きく外反するものは、口径5.5cmと小型のもの(7)である。薄手な作りで胎土も細かい。焼成も赤焼けである点など特徴的である。8も口縁部が大きく外反するタイプのものと思われる。

土師器は壺10点(125g)、甕33点(800g)、小型甕6点(38g)、蓋1点(5g)、皿1点(6g)、羽釜1点(12g)の破片が出土している。いずれも小片で図示できなかった。

線刻を持つ土師器片が1点出土している(挿図6・写真図版23)。小型甕の胴部上半の破片のようである。斜めに3本の直線が引かれ、右側2本の直線と交叉するように一本の線が横にのびる。



挿図6 線刻のある土器(5)

破片が小さく全体の形をつかめないのは残念である。

黒色土器Aは壺84点(795g)、鉢2点(38g)、分類不明7点(33g)の破片である。

第9図3の壺は、口径が14.5cm・器高推定4.5cm。底部は削離しており整形方法は不明である。ヘラミガキは他の多くの壺と同様に内面のみに見られる。底部から口縁部にかけていくぶん内湾ぎみにのびる。椀の可能性もある。

同図4の壺は、口径が13.3cm・器高3.8cmとやや小ぶりである。内面と口縁部の外側にもヘラミガキが及ぶ。底部から口縁部にかけていくぶん内湾ぎみにのびる。

このほか赤焼けの須恵器とも土師器とも判断つかないような細片が58点(310g)ある。

#### ケ SK10(第6図)

長径320cm、短径220cmほどの長楕円形にちかい形をしている。深さはほぼ70cmある。

土坑はIV層上面で検出された。IV層を掘り込み、さらにV層を25cmほど掘り込んでいる。南端はSK14を壊している。

土坑内は第6図に示すような堆積をしていた。

出土遺物はなかった。

#### コ SK11(第6図)

長径230cm、短径200cmほどの円形にちかい形をしている。深さはほぼ65cmある。

土坑はIV層上面で検出された。IV層を掘り込み、さらにV層を30cmほど掘り込んでいる。

土坑内は第6図に示すような堆積をしていた。

出土遺物　須恵器の壺、土師器の甕・盤、黒色土器Aの壺が出土している。

須恵器壺は18点(555g)、土師器甕は7点(185g)、盤は1点(155g)、黒色土器Aの壺6点(178g)の破片が出土している。遺物はいずれも黒褐色土層から出土している。

第9図9~17は須恵器の壺で口径13~13.5cm・器高3.5~3.9cmと似た大きさである。底部から体部の境がまるみのあるものと屈曲のあるものがみられる。体部は内湾ぎみにのび口縁部がかるく外反する。底部はいずれも糸切り痕が未調整のままのこる。器面は薄くはがれ落ちたように観察される部分がみられたり、底部の外面が「黒斑状」になるなどB地区SK2出土の多くの壺と共通する。

同図18~20は黒色土器Aの壺である。18は口径15cm・器高5.2cmある。内面はヘラミガキされるとともに黒色処理されている。底部から体部にかけてはヘラ削りによって調整されている。体部は内湾ぎみにのび口縁部がかるく外反する。19は口径14.8cm。内面はヘラミガキされるとともに黒色処理されている。体部は内湾ぎみにのび口縁部がごくかるく外反する。20も内面がヘラミガキされるとともに黒色処理されており、底部から体部にかけてヘラ削りによって調整されている。

#### サ SK12(第4図)

土坑の西側が用地からはずれ全体を確認できなかつたが、確認できた部分で長径280cm、短径125

cmほどの半円にちかい形をしている。深さはほぼ150cmある。

土坑はIII層上面で検出された。III層とIV層を掘り込み、さらにV層を30~40cm程掘り込んでいる。

土坑内は第4図に示すような堆積をしていた。

出土遺物はなかった。

#### シ SK13 (第4図)

土坑の西側が用地からはずれ全体を確認できなかつたが、確認できた部分で長径160cm、短径130cmほどの半形にちかい形をしている。深さはほぼ120cmある。

土坑はIII層上面で検出された。III層とIV層を掘り込み、さらにV層を15cmほど掘り込んでいる。土坑内は第4図に示すような堆積をしていた。

出土遺物はなかった。

#### ス SK14 (第6図)

長径320cm、短径210cmほどの円形にちかい形をしている。深さはほぼ80cmある。土坑はIV層上面で検出された。IV層を掘り込み、さらにV層を40~60cmほど掘り込んでいる。北端はSK10によって壠されている。

土坑内は第6図に示すような堆積をしていた。

出土遺物 須恵器の蓋が1点、土師器の甕が1点出土している。茶褐色土混じりの黒褐色土の最下部からの出土である。

須恵器蓋は完形(190g)である(第8図10)。焼けひずみがあり、法量がはっきりつかめないが口径15cm・器高3.5cmほどと考えられる。天井部は丸みをおびており、その中央には扁平な擬宝珠様つまみが付く。天井部外面には肩部附近まで、ほぼ左右前後に回転ヘラ削り調整がみられる。口縁端部は下方へ短く屈曲している。焼成は良好で内側には自然釉がみえる。中央の径8.8cmほどの部分にはまるく自然釉がかかっていない部分があり、重ね焼きの痕と思われる。

土師器甕はほぼ完形(1,650g)である(第8図9)。口径23.8cm・器高34.5cmと大型である。

口縁部は、中ほどで屈曲しながらくの字状に外反する。最大径は口縁部にあるが、胴部最大径との差はわずかである。胴部外面上半はヨコナデ、下半部は縦方向のヘラ削りにより調整されている。内面は口縁部から胴部にかけてヨコナデがみられるが、胴部の大半はハケにより調整されている。底部はヘラによって調整されており、いくぶんまるみをおびている。

#### セ SK15 (第4図)

長径210cm、短径150cmほどの円形にちかい形をしている。深さはほぼ75cmある。

土坑はIV層上面で検出された。土坑内の堆積状況は遺憾ながら記録できていない。

出土遺物はなかった。

#### ソ SK16 (第6図)

長径190cm、短径180cmほどの円形にちかい形をしている。深さはほぼ90cmある。

土坑はIII層の中ほどで検出された。土坑内の堆積状況は遺憾ながら記録できていない。

出土遺物 須恵器の壺・蓋・長頸壺・小型壺・土師器の壺・甕・小型甕・皿・盤・鉢・黒色土器Aの壺、高台壺が出土している。いずれも土坑上部からまとめて出土しており、B地区SK2と類似した様相を示していた。

須恵器は壺27点(593g)、蓋4点(200g)、長頸壺3点(35g)、小型壺1点(30g)の破片が出土した。多くは小片であったが、第8図7の蓋はSK3出土のものと接合しほば全体を復元できた(170g)。焼けひずんでいるが、口径は14.1cmほどと思われる。天井部は丸みをおびており、肩の部分まで回転ヘラケズリがみられる。内側には灰釉がかかることほど良く焼けている。

同図8は底径4.0cmと小型の甕と思われる。底部は回転糸切目調整のままである。胎土はきめ細かである。赤焼けで土師器のようにもみえる。

土師器は壺16点(275g)、甕797点(16,960g)、小型甕34点(1,995g)、皿3点(48g)、蓋2点(102g)、盤30点(1,280g)、鉢2点(790g)の破片が出土している。

第7図1~5は甕である。1は口径23.7cmある。最大径部が胴部中央近くにあり、上半は横方向のナデ、下部は縦方向のヘラケズリがみられる。内面には横方向のナデが残る。口縁部は大きく外反しほば垂直に立ち上がる。この肩部には棱がつく特徴的な口縁部となる。2は口径23.4cmある。胴部と口縁部の径がほぼ等しい。口縁部および内面には横方向のナデが残り、胴部は口縁部よりやや下がったあたりから斜めにヘラケズリされている。口縁部は外反しやや内湾ぎみに開く。3は甕の胴下半部である。底部は丸底となる。斜位のヘラケズリがみられる。内面は底部付近は斜位の、それより上部は横方向のハケ目調整がされている。4も甕の胴下半部で、底部は丸底となる。底部付近は横方向の、やや上部は斜位の、その上には縦に近いヘラケズリが残る。内面は、底部付近に斜位のハケ目がみられるが上部ははっきりしない。5は口径18.4cmと小さめの甕である。最大径は口縁部にある。胴部上半はロクロ回転を利用したと思われる横方向のナデが、下部は縦方向のヘラケズリがみられる。内面は口縁部はロクロ回転を利用したと思われる横方向のナデがみられるが、それより下部は明瞭でない。指頭による調整がされているのかもしれない。口縁部は外反し内湾ぎみにのびる。

同図6・7は鉢である。6は口径23.5cm・器高14.9cmある。底径4.2cmと小さな底部からのびた胴部は、内湾しながら口縁部にいたる。肩の張りも弱い。口縁部の形状は5の甕とよくにている。胴部上半および内面はロクロ回転を利用したと思われる横方向のナデがみられる。下部は斜位のヘラケズリみられ、底部もヘラケズリされている。7は口径33.8cmと大型である。器形は6と似ているが、口縁部の屈曲が強く稜をなす点や肩の張りも強いなどいくぶん違いもある。胴部上半および内面にロクロ回転を利用したと思われる横方向のナデがみられること、外面下部に斜位のヘラケズリがみられることは共通している。しかし、ヘラケズリの方向が一定していないことや、内面の一部にハケ目による調整がみられる点違いがある。

第8図1~5は小型甕である。1は口径14.0cm・器高15.3cmある。厚手の底部からのびた胴部

は内湾しながら口縁部にいたる。口縁部は外反する。最大径はほぼ胴部中央にある。胴部上半から口縁部内面にはロクロ回転を利用したと思われる横方向のナデがみられ、胴部中央よりいくぶん口縁部に近いあたりから斜位、縱、斜位のヘラケズリとなり、底部付近には横方向のヘラケズリがみられる。底部もヘラケズリされている。2はほぼ完形で495gある。口径12.4cm・器高13.9cmある。胴部はまるみをおびており、外反する短い口縁部がつく。最大径はほぼ胴部中央にくる。底部に近い胴部がヘラケズリされているが、他は全面にロクロ回転を利用したと思われる横方向のナデがみられる。底部はヘラケズリされており、部分的に糸切り痕が残る。回転糸切りで切り離された後、ヘラケズリされているようである。胎土には砂粒が多く含まれている。赤褐色で焼成もよい。3は口径が14.0cm・器高12.6cmある。最大径は口縁部にある。底部はいくぶん厚めであるが全体は薄手に作られている。底部はヘラケズリされているが、他は全面にロクロ回転を利用したと思われる横方向のナデがみられる。4は口径が11.8cm、5は口径14.5cmある。ともに、最大径は口縁部にあり、ロクロ回転を利用したと思われる横方向のナデがみられるなど3と類似している。

同図6は蓋である。口径16.3cmほどと思われる。天井部のまるみは少ないが、下方へゆるやかにカーブし、端部は外に開きぎみに屈出する。

黒色土器Aは壺7点(93g)、碗1点(78g)、甕1点の破片が出土している。この甕はB区のSK2の甕と接合しているので後述する。このほか分類し難い土器が9点(113g)ある。

#### タ SK17(第5回)

長径150cm、短径130cmほどの円形にちかい形をしている。深さはほぼ75cmある。

土坑はIV層上面で検出された。土坑内の堆積状況は遺憾ながら記録できていない。

出土遺物 土師器の甕が1点出土している(第8図11)。甕はほぼ完形(1710g)である。口径23.7cm・器高33.4cmと大型である。口縁部は、くの字状に外反する。最大径は胴部にあるが、口縁部最大径との差はわずかである。外面は口縁部から胴部にかけて横方向のナデ、胴部の大半は縦方向の長いヘラ削りにより調整されている。内面は口縁部から胴部にかけて横方向のナデがみられる。胴部の大半はハケにより調整されているようだがはっきりしない。底部に近い部分ではハケによる調整が明瞭に観察できる。底部は径4cmと大変小さいもので、ヘラによって調整されている。

#### ② その他

この他に遺構に伴わない遺物破片が209点(1,733g)出土している。このうち器種の判明したものは150点ほどで、土師器の甕が71点(530g)で全体の47.3%になり、須恵器の壺が29点(160g)で全体の19.3%となる。以下土師器の壺が17点(120g)で全体の11.3%、須恵器の甕が13点(223g)で全体の8.7%、黒色土器Aの壺が11点(240g)で全体の7.3%などとなっている。この他に須恵器の高台壺・甕・蓋、土師器の盤が出土しているが、それぞれ1~数点にすぎない。また、黒曜石片1点といずれにも分類できなかった小片が60点(220g)ある。

出土地区別では11T・11U・12Uの3区に集中している。

11Tからは須恵器の壺が20点(90g)・甕が5点(65g)・土師器の壺が14点(100g)・甕が49点(355g)・盤が5点(170g)、黒色土器Aの壺が10点(220g)と分類できなかった小片が32点(75g)出土している。

11Uからは須恵器の壺が7点(30g)・高台壺が1点(65g)・甕が7点(155g)・蓋が1点(5g)、土師器の甕が8点(85g)、黒色土器Aの壺が1点(17g)と分類できなかった小片が24点(142g)出土している。

12Uからは須恵器の壺2点(38g)・甕1点(3g)、土師器の壺3点(20g)・甕14点(90g)、黒曜石片1点(3g)と分類できなかった小片が4点(5g)出土している。

3地点とも下部に土坑が検出されているので、それらのものと関係するのかもしれない。

#### 註

- 1 原田勝美・佐藤慶二 「上水内郡半礼村中高山出土の石器」長野県考古学会誌22 P33 1975  
森嶋 稔 「上水内郡誌歴史編」P38「中高山遺跡」上水内郡誌編集会 1976
- 2 三水村脅光寺久遠義正氏が所持されている。未発表資料
- 3 原 明芳 「松本平における平安時代の食膳具」『信濃』39·4 P279 1987

### 3 B地区

#### (1) 平安時代の遺構と遺物

##### ① 土 坑

###### ア SK 1 (第10図)

長径120cm、短径60cmほどの楕円にちかい形をしている。深さはほぼ35cmある。

土坑はⅢ層上面で検出された。

出土遺物はなかった。

###### イ SK 2 (第10図)

IV層への黒土の落ち込みとして明瞭に検出できた。径210cmほどの円形に近い形をしている。もっとも深いところで130cmある。底は凹凸を残すがほぼ平らであり径120cmほどに狹まっている。

土坑の下部60cmほどは灰白色粘土層を掘り抜いており、A地区の土坑の多くがそうであったように粘土を採掘する目的で掘られたものと思われる。土坑内は第10図のような堆積をしていた。

土坑内に堆積した黄白色粘質土混じりの黒褐色土巾から、不良品と思われる須恵器の环を中心多くの遺物が出土しており、遺物の総重量178kg (178,480g) に達する。埋没が進んだ過程でこれらの品が廃棄されたものと思われる。

出土遺物　須恵器の环・台付环・蓋・短頸壺・長頸壺・凸带付四耳壺・甕、土師器の环・甕・小型甕・蓋・甕、黑色土器Aの环・椀・甕・皿が出土している。また、瓦と砾石も出土している。

須恵器は环15,765点(133,180g)・台付环12点(895g)・甕15点(520g)・短頸壺3点(100g)・蓋9点(395g)・長頸壺3点(215g)・凸带付四耳壺1点(35g)の破片が出土している。

环の出土量が圧倒的に多い。図示したものは259点である。数が多く個々に説明すると煩雑になるのでいくつかのタイプにまとめて出土した环の特徴にふれてみたい。なお、図示したものについてはその法量を一覧表にまとめてある。

###### Aタイプ (第12図～)

底部から内湾ぎみに伸びた器形が口縁部下から外反する形で最も多く見られるタイプである。外反してから端部がふくらむものもあり細分可能である。

このうち、第14図1の环には内外面に爪状の压痕が残る(写真図版24)。老洞古窯址の報告<sup>[1]</sup>では高台を持つ环等の高台内側に断続的にあるいは連続的に1周する爪状压痕の例を検討され「何か偶然的についたものとも思われる」と述べられているが、本例は环の底部内外に多くの爪状压痕がみられる点で異質なものである。SK 2から出土した多くの环の中にも他に例を見ない。

###### A'タイプ (第17図など)

全体の器形はAタイプに似る。底部中央が非常に薄くなるのが特徴である。

底部は乾燥するさい割れやすいので、それを防ぐ工夫ではないかとも考えられる<sup>[2]</sup>。

###### A''タイプ

全体の器形はAタイプに似る。口縁部下に一条の沈線がまわるのが特徴である。

第20図29・30の2点がある。29（口径13.0cm・器高3.6cm）、30（口径13.2cm・器高3.5cm）ともに、大きさや胎土、底部の内外が黒斑状になっている点など他のタイプと共通している。

外傾指数は100をこえる。

Bタイプ（第18図1～17など）

底部からほぼ直線的に口縁部にいたる器形となる。

Cタイプ（第19図～第20図24など）

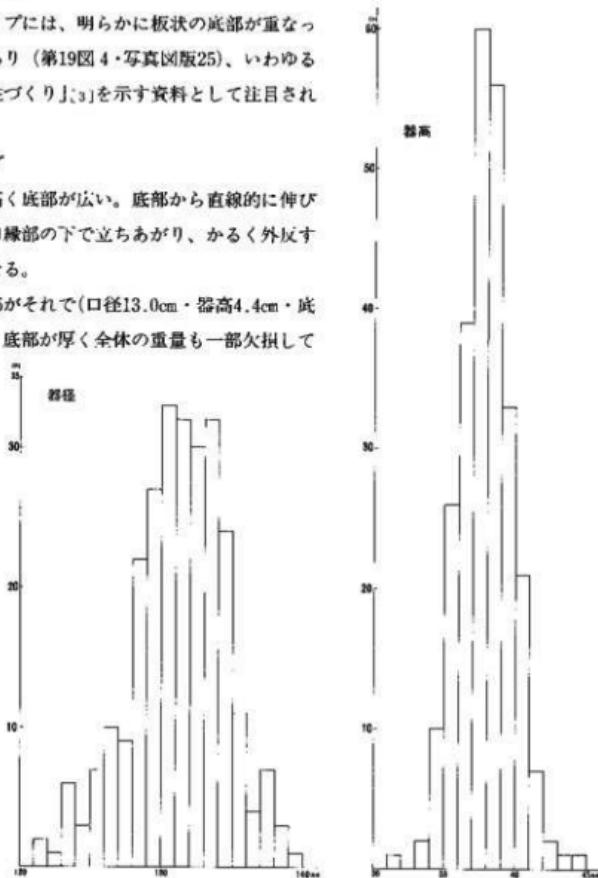
全体に厚めの底部を持ち、底部から体部へ垂直に立ち上がりその後、内湾ぎみに伸び口縁部下から外反する。

このタイプには、明らかに板状の底部が重なった資料があり（第19図4・写真図版25）、いわゆる「底部円柱づくり」<sup>13</sup>を示す資料として注目される。

Dタイプ

器高が高く底部が広い。底部から直線的に伸びた器形は口縁部の下で立ちあがり、かるく外反する器形となる。

第20図25がそれで（口径13.0cm・器高4.4cm・底径6.0cm）、底部が厚く全体の重量も一部欠損して



挿図7 SK 2出土上の分布量

SK 2 坯法量一覧表

実測番号	口 径 (mm)	器 高 (mm)	底 径 (mm)	重 量 (g)	実測番号	備 考
1201	135	40	57	147	69	
1202	132	38	60	105	117	
1203	122	39	56	123	129	
1204	126	40	52	100	123	
1205	129	40	56	120	127	
1206	138	39	56	95	158	
1207	130	37	54	90	243	
1208	129	40	58	107	95	
1209	131	39	62	100	167	
1210	134	38	58	90	219	
1211	126	36	52	75	242	
1212	134	39	60	98	148	
1213	133	38	55	134	45	完
1214	130	39	53	118	44	完
1215	132	35	56	81	91	
1216	134	37	60	106	96	ヘラ記号
1217	134	38	56	94	200	
1218	131	35	60	107	40	
1219	137	36	60	90	236	
1220	134	37	55	95	239	
1221	132	37	55	105	164	
1222	129	38	54	116	29	完
1223	134	38	55	85	124	
1224	132	38	52	128	21	完
1225	133	36	55	100	173	
1226	129	37	56	110	116	
1227	132	36	58	102	235	
1228	134	37	54	95	119	
1229	133	35	55	65	219	
1230	132	35	56	121	144	
1301	137	39	60	94	204	
1302	134	37	57	107	155	
1303	132	38	58	50	228	
1304	130	37	59	105	140	ヘラ記号
1305	133	38	56	125	71	完
1306	121	38	52	80	255	
1307	131	37	58	88	237	
1308	135	35	60	90	244	
1309	128	36	56	102	97	
1310	139	38	58	91	192	
1311	132	36	55	100	223	
1312	137	35	60	83	149	

実測番号	口 径 (mm)	器 高 (mm)	底 径 (mm)	重 量 (g)	実測番号	備 考
1313	129	37	58	80	190	
1314	134	37	62	118	268	
1315	135	36	57	103	193	
1316	129	33	54	90	251	ヘラ記号
1317	121	38	52	90	85	
1318	128	40	54	92	145	
1319	131	38	56	135	32	ヘラ記号 完
1320	132	38	58	127	64	ヘラ記号 完
1321	130	37	57	83	189	
1322	131	37	56	116	5	
1323	132	35	58	75	260	
1324	131	37	58	107	194	
1325	130	34	56	95	174	火だすき
1326	129	37	55	47	205	
1327	133	37	56	90	208	
1401	131	37	55	110	73	爪形痕
1402	130	37	60	134	60	完
1403	126	37	50	110	19	完
1404	127	38	60	110	187	
1405	132	36	55	95	184	
1406	131	38	55	120	104	
1407	133	36	56	82	151	
1408	132	38	56	80	232	
1409	132	38	58	80	136	
1410	127	37	59	123	102	
1411	129	37	56	89	233	
1412	131	40	56	110	152	
1413	129	38	56	125	63	ヘラ記号 完
1414	133	38	56	75	121	
1415	131	36	56	105	172	
1416	130	34	52	115	14	完
1417	135	38	58	98	258	
1418	133	36	57	125	70	
1419	135	36	60	145	31	完
1420	133	36	51	100	89	
1421	133	35	58	100	100	
1422	128	41	54	108	115	
1423	133	39	58	120	120	
1424	130	36	58	104	154	
1425	123	37	52	100	50	完
1426	129	38	60	120	72	完
1427	125	34	55	105	17	完
1428	128	36	55	117	108	完

実測番	口 径 (mm)	器 高 (mm)	底 径 (mm)	重 量 (g)	実測番号	備 考
1429	134	36	56	87	250	
1501	133	38	56	135	9	
1502	131	39	56	130	156	
1503	127	38	60	96	181	
1504	132	39	56	110	82	
1505	132	38	60	115	284	
1506	131	37	57	146	37	
1507	138	40	53	105	271	
1508	131	37	52	94	165	
1509	133	38	50	110	142	
1510	135	35	56	75	234	
1511	130	38	58	110	112	
1512	132	38	56	113	110	
1513	133	40	60	142	163	完
1514	131	38	52	105	245	
1515	130	36	58	100	118	
1516	123	38	52	100	106	
1517	130	37	58	120	147	完
1518	133	35	56	80	143	
1519	129	40	55	107	48	
1520	128	39	57	120	34	完
1521	128	37	55	95	101	
1522	131	36	60	99	222	
1523	133	37	59	107	90	
1524	138	37	54	80	133	
1525	127	34	52	85	93	
1526	133	37	56	108	84	
1527	133	34	53	70	210	
1528	132	38	53	110	241	ヘラ記号
1529	137	37	55	125	53	完
1601	131	37	58	132	25	完
1602	130	37	56	120	68	完
1603	123	38	56	95	170	
1604	128	36	54	108	30	完
1605	130	39	55	87	201	
1606	130	40	56	103	191	
1607	133	38	54	105	38	
1608	133	35	56	88	263	
1609	135	37	58	110	132	
1610	129	40	55	113	137	
1611	125	37	55	125	24	完
1612	137	36	56	100	178	
1613	124	35	54	130	51	完

実測番	口 径 (mm)	器 高 (mm)	底 径 (mm)	重 量 (g)	実測番号	備 考
1614	134	38	55	110	179	
1615	128	35	52	107	169	
1616	130	36	60	98	83	
1617	133	38	54	105	94	
1618	131	38	55	90	220	
1619	133	37	54	81	262	
1620	135	38	57	52	211	ヘラ記号
1621	130	37	58	85	253	
1622	132	35	58	84	229	
1623	127	38	56	126	33	完
1624	130	36	54	110	131	
1625	131	37	56	100	103	
1626	130	37	55	105	166	
1627	131	37	58	97	254	ヘラ記号
1628	134	36	55	115	39	
1629	133	39	58	119	59	
1630	127	39	54	112	41	
1631	132	37	55	92	227	
1701	128	36	55	96	47	
1702	125	40	50	100	105	
1703	132	33	61	95	92	
1704	132	34	56	105	112	
1705	131	36	57	120	57	完
1706	125	35	58	110	36	
1707	128	38	55	70	168	
1708	133	37	55	85	217	
1709	123	39	58	99	99	
1710	129	34	58	92	265	
1711	131	36	61	116	42	完
1712	126	39	55	90	86	
1713	128	40	50	92	206	
1714	132	35	58	80	146	
1715	131	34	55	108	67	
1716	126	39	52	69	215	
1717	131	38	58	110	109	
1718	131	36	58	105	54	完
1719	132	37	58	105	221	
1720	128	41	52	105	13	完
1721	125	36	52	117	16	ヘラ記号 完
1722	137	35	56	85	207	
1723	129	38	60	125	22	完
1724	130	37	55	122	55	完
1725	126	39	60	92	171	

実測番号	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	実測番号	備考
1726	128	35	60	83	224	外側癒着
1801	129	40	55	100	214	
1802	135	40	61	102	161	
1803	129	36	58	107	107	
1804	131	35	57	75	225	完
1805	134	37	54	103	141	
1806	129	38	58	89	88	
1807	130	36	55	87	195	
1808	124	35	60	95	98	
1809	128	38	58	105	12	完
1810	133	36	53	110	128	
1811	128	37	57	107	62	完
1812	136	37	60	120	153	
1813	133	39	55	85	238	
1814	136	36	58	108	111	
1815	130	38	54	75	256	
1816	134	39	60	94	257	
1817	131	38	56	115	26	
1818	123	36	55	120	15	完
1819	129	36	62	143	180	
1820	128	39	64	125	56	完
1821	131	39	56	105	125	ヘラ記号
1822	129	35	58	110	176	
1823	135	36	57	128	18	完
1824	132	34	56	80	212	
1825	126	37	50	70	209	
1826	126	37	50	125	11	完
1827	130	37	54	151	28	完
1828	136	38	57	137	80	二重底
1901	130	43	63	115	79	二重底
1902	127	41	55	105	78	二重底
1903	132	41	58	150	76	二重底 完
1904	127	42	56	139	35	二重底 完
1905	128	41	55	115	77	二重底 完
1906	130	39	63	130	65	完
1907	134	40	51	116	122	
1908	131	39	62	127	81	二重底
1909	133	40	58	138	23	完
1910	130	41	58	141	66	完
1911	131	39	64	111	138	
1912	130	39	52	95	114	
1913	132	39	60	90	230	
1914	124	42	49	82	266	
1915	126	39	51	73	231	

実測番号	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	実測番号	備考
1916	133	37	53	126	20	完
1917	130	37	58	115	157	ヘラ記号
1918	123	40	53	118	177	
1919	129	37	53	125	61	完
1920	133	38	57	130	74	
1921	125	37	56	120	75	完
1922	134	38	56	93	218	
1923	129	36	51	93	202	
1924	133	36	54	96	248	
1925	132	37	63	110	240	
1926	127	39	60	112	43	
1927	129	35	57	70	246	
1928	137	38	67	100	267	
1929	128	34	58	83	270	指頭压痕
2001	130	40	49	98	162	
2002	130	39	50	88	269	
2003	129	38	53	90	87	
2004	129	37	53	110	10	
2005	126	40	54	115	46	完
2006	132	37	56	110	58	
2007	134	38	60	105	186	底部小石
2008	131	36	60	100	261	
2009	132	41	52	95	135	
2010	131	38	53	80	259	
2011	129	38	52	93	160	
2012	128	39	52	100	134	
2013	131	38	58	112	150	
2014	128	37	60	95	247	
2015	133	37	60	100	139	
2016	130	37	51	85	203	
2017	134	37	60	105	185	
2018	130	38	58	94	249	
2019	136	39	54	80	159	
2020	133	35	55	78	213	
2021	129	40	58	117	52	完
2022	125	39	56	133	182	
2023	128	38	56	105	27	完
2024	128	39	55	77	252	
2025	130	44	60	153	226	
2026	129	35	60	91	175	重ね焼き痕
2027	134	37	60	126	130	
2028	135	31	53	100	126	
2029	130	36	55	110	183	
2030	132	35	56	90	188	

いるにもかかわらず出土品中最大の153gある。外傾指数は80を示し他と区別される。

以上器形をもとにいくつかのタイプにわけてみたが、中心となるのはAタイプである。

S K 2 出土の环の全体に共通する点もまた多い。

环の法量は口径12~14cm・器高3~4.5cmにおさまり、この範囲をはみ出すものはみあたらぬ。中心となるのは口径13.0~13.5cm・器高3.5~4.0cmのものである（挿図7）。

底部は、一部に表面が剥離したようになっていて観察しにくいものがあるが、確認できたものはすべて糸切り未調整で、回転はすべて右回転である。糸切り痕のようすから「糸」の太さに差異があることが観察される（第13図19・20など）。

このほか底部には細い棒状のものでさっと引いた直線「一」が施されているものがあり、ヘラ記号の一様であると思われる（第13図19・20、第17図21）。拓影で示した以外には、第12図16、第13図4・16第14図13、第15図28、第16図20・27、第18図21、第19図17の12点で確認されている。20点に1点ほどの割合でヘラ記号が見られることになる。

胎土には細かな石粒が含まれることが多いが、第20図7のように豆粒大の石を取り込んだまま焼成されたものも見られる。

焼成は灰白色あるいは黄みをおびた褐色（d 6に近い）で軟質に焼き上がっている。軟質であるからなのか、环の表面（内外面）が薄く剥離したかのように観察される個体が多い。

また、内面あるいは底部外面（多くは内外両面）が「黒斑」状になっている個体が多いことも特徴である<sup>[4]</sup>。

重ね焼きされたことは第17図26の底部外面に环の一部が癒着していることや、第13図25に火だすきが見られることからも明らかであろう。

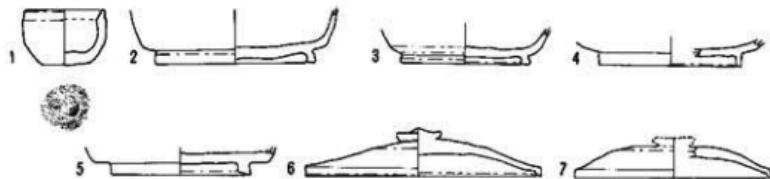
挿図8の2~5の台付环はこれまで説明してきた环と焼きがまったくことなり、青灰色で硬く焼かれている。

2は底部全面を回転ヘラケズリしている。底部中央部が下がり気味である。3・5は底部の中央部に糸切り痕を残し、周辺部を回転ヘラケズリしている。4は中央部を欠くため不明であるが残っている部分は回転ヘラケズリされている。

挿図8-6は完形の蓋である（255g）が赤焼けで形もゆがんでいる。天井部は丸みをおびており、中央部には擬宝珠様のつまみがつく。天井部外面には肩部まで左右前後に回転ヘラケズリされている。口径16.7cmほどになる。同7は中央部を欠くが、やはり天井部外面には肩部まで左右前後に回転ヘラケズリの痕がみられる。焼成は良く、内外面に重ね焼きの痕が残る。口径14.0cm。

挿図8-1は短頸壺としたが、「ぐい飲み」状のものである。口径5.7cm・器高3.9cmの小型のものである。口縁部は内湾ぎみになる。底部には糸切り痕が残り、底部から体部への立ち上がりの部分はヘラケズリされている。焼成は灰白色で軟質に焼き上がっている。

凸帯付四耳壺は小片であったが耳の部分を残していた。凸帯は薄い四角形で、耳は「B」形であった。孔はない。外面にタタキメはみられない。タタキ手法を省略して巻き上げろくろ技法で



插図8 西浦遺跡B地区SK2出土遺物実測図

仕上げたものの器壁は「もっとも厚い」といわれるが<sup>[5]</sup>、さほど厚みのないものである。

土師器は壺136点(1,430g)・甕703点(12,785g)・小型甕17点(1,220g)・蓋2点(40g)・盤54点(3,995g)の破片が出土している。

壺は小片が多く図示できるものが少なかった(第21図10)。

10の器形は須恵器に似ている。内外面ともに黒色処理されたかのようにみうけられるが、ヘラミガキされた様子はない。底部は糸切り未調整である。胎土はいくぶん砂粒が多く土師器の胎土に近い。同様な壺が数個体分ある。

甕の出七点数は多かったが、形のつかめるものは少なく2点図示できたのみである(第21図1・2)。1は口径が23.5cmある。底部が破損しているため器高は不明であるが28cm前後と推測される。最大径は胴部中央より口縁に近い部分にくるが、口縁部径との差は少ない。口縁部から、この最大径の部分の前後までは内外面ともロクロ調整痕がみえる。それより下の胴部はヘラケズリされている。内面はハケ目調整されているようである。

2は口径が20.9cmある。やはり、底部が破損しているため器高は不明であるが19.5cm前後と推測される。1の長脣タイプの甕とことなり、口径より器高が短く、胴が張るタイプである。口縁部と胴部の最大径がほとんど同じになる。口縁部及びその下の胴部内外面にはロクロ調整痕がみえ、胴部外側は口縁部下2cm前後からヘラケズリされている。内面には横方向のハケ目とその後に施された斜めのハケ目がみられる。

小型甕は比較的多く図示できた(第21図3~7)。3は口径14.7cm・器高13.3cmある。最大径は胴部の中央よりいくぶん上部にくる。口縁部は外反するが途中に稜をつくり、口縁端を引き出すように仕上げている。胴が張るタイプである。底部は糸切り未調整で全面にロクロ調整痕がみえる。赤褐色に良く焼けているが、外面の一部に「黒斑」がのこる。

4は口径13.1cmで、器高は推定10.5cm前後である。口縁部は短く外反する。口縁部と胴部の最大径がほとんど同じになる。全面にロクロ調整痕がみえるが、底部からのたちあがり部分はヘラケズリされているようである。5は口径13.9cm・器高12.4cmある。最大径は口縁部にある。口縁端部はいくぶんふくらみ丸みをおびる。底部は糸切り未調整で全面にロクロ調整痕がみえるが、底部からの立ち上がり部分は4と同様ヘラケズリされているようである。

6は口径14.0cmある。全面にロクロ調整痕がみえるが、胴下半部にはヘラケズリの痕もみえる。

内面には横あるいは斜めに施されたハケ目が見られる。7は口径14.1cmほどである。外反する長めの口縁部が途中で稜をつくり内湾ぎみにたちあがる。全面にロクロ調整痕がみえる。

同図13は蓋である。天井部の丸みは少ない。天井部外面の傾斜の少ない部分はヘラケズリされている。中央部の擬宝珠様のつまみはつかなかつたようである。蓋の端部は外に開く。

第21図14・15は盤と分類したものである。

14は脚部の径が14.1cmある。脚は「ハ」の字状に開く。底部の内外面が、指かヘラのようなもので押しつけるようにして整形されている。脚部は別づくりされている。底部以外は全面にロクロ調整痕が残っている。

15は脚部の径が13.7cmで、14とさほど差はないが脚の高さは2倍ほどある。底部は指かヘラのようなもので押しつけるようにして整形されている。坏部にはロクロ調整痕が残る。下部は脚部との接合部に近い部分はヘラケズリされている。底部内面には、ハケ状のものによる回転整形痕がみえる。脚部は内外面にロクロ調整痕が残る。この脚部は別づくりされている。脚部内面には黒斑がみえる。

黒色土器Aは坏1,316点(14390g)・楕31点(960g)・甕10点(1,145g)・皿18点(620g)・鉢2点(1,640g)の破片が出土している。

坏は17点図示できた。底部の整形方法や法量によっていくつかに分類できそうである。底部の整形方法の割合をみるとヘラケズリ62点、糸切り103点、中心部に糸切りを残し周辺ヘラケズリしているもの2点、不明46点となっている。

底部をヘラケズリしているものは8点図示できた(第22図4~9・11・13)。いずれも内面はヘラミガキされ、黒色処理されている。

4は口径18.1cm・器高6.6cmと大きい。底部から内湾しながら口縁部にいたる。

5は口径15.3cm・器高4.9cmある。7は口径15.2cm・器高4.9cmある。底部から体部のたち上がり部分にかけて回転ヘラケズリされている。器形は底部から内湾しながらのび、体部中央付近から外に開く。屈曲部分に稜ができる。器形も大きさも5とよくている。

8は口径14.6cm・器高4.7cmある。薄手のつくりで底部から内湾しながらのび口縁部下でかるく外反する。9は口径14.7cm・器高5.4cmある。底部から内湾しながらのび口縁部下でかるく外反する。6は口径13.7cm・器高4.1cmある。器形は5と類似しているが屈曲部は体部中央より口縁部に近い部分にくる。11は口径12.6cm・器高3.5cmと小さめである。口縁部外面も一部黒変している。13も口径12.4cm・器高3.5cmと小さめである。須恵器の坏の器形に似ている。

10の底部は欠けていて整形は不明であるが、底部からのたちあがり部分の張りの強さなどからヘラケズリであったと考えられる。口径15.8cm・器高は6.1cmほどと思われる。底部から内湾しながらのび口縁部にいたる。

糸切り未調整のものには、内面がヘラミガキされているが黒色処理されていない第21図8・9と内面がヘラミガキされ黒色処理されている第22図12・14~20がある。

8は口径14.9cm・器高4.5cm、9は口径15.2cm・器高4.3cmある。器形は底部から内湾しながら立ち上がってきた体部が、8は口縁部でやや外反するのにたいし、9はそのままのびる。

12は口径15.1cm・器高4.8cmある。口縁部がやや外反する。14は口径16.1cm・器高5.5cmで底部からの立ち上がり部分を、回転ヘラケズリしている。15は口径16.6cm・器高4.6cmで底部からの立ち上がり部分を、回転ヘラケズリしているようである。16は口径14.8cm・器高5.0cm。

19は口径15.9cm・器高5.6cm。底部からの立ち上がり部分を、回転ヘラケズリしている。

18は口径14.7cm・器高4.7cmで底部がいくぶん突出気味になる。底部には「一」のへら記号がある。

17は口径12.5cm・器高5.1cm。口径に対して器高が高い。器形は底部から内湾しながらのび、体部中央付近から立ち上がり気味になり口縁部を強く外反させる。20は口径13.4cm・器高3.8cmで、須恵器の环と似た器形をしている。

椀は1点図示できたのみである。第22図21は口径15.0cmある。高台部を欠くが底部にその痕がうかがえる。底部から内湾ぎみにのびていき、口縁部の下ででかるくくびれ縫をつくる。内面と外面の稜の上あたりまではヘラミガキされており、内面は黒色処理もされている。

皿は4点図示できた。いずれも高台がつく。第21図12は口径13.4cm・器高3.8cmある。内面はヘラミガキされているが、黒色処理はされていない。高めの高台部が「ハ」の字状に外に開く。付け高台である。底部の中央部には糸切り痕がみえるが、周辺部は高台を付けたときのナデのためかはっきりしない。

第21図11も内面がヘラミガキされているが、黒色処理されていない。口径は12.6cmある。高台部を欠き器高は不明である。底部は摩滅しておりはっきりしないが、ナデ整形されているようである。胎土には小石を多く含む。

第22図22は高台部は欠けているが、その痕が観察できる。口径12.8cmある。内面はヘラミガキされ黒色処理されている。ヘラミガキは暗文状に口縁部下から底部にかけ「ノ」の字状に右回りに施されているようである。底部には糸切り痕がみえるが、その上をナデしているようではっきりしないところがある。

同図23は口径11.8cm・器高3.1cmある。内面は黒色処理されているが、熱を受けたのかひび割れが多くヘラミガキの様子ははっきり観察できない。底部の中心には糸切り痕がみえる。高めの高台部が「ハ」の字状に外に開く。

第22図1はA地区SK16と接合した甕である。口径27.8cmある。胴部の大半を欠くが最大径は口縁部にくるようである。口縁部内側と胴部にはクロクロ調整痕が残る。胴部にはヘラケズリしているところもみえているので、下部はヘラケズリされていたものと思われる。内面は、横方向や縦方向のハケ目が多くみえ、黒色処理されている。

同図2・3は鉢である。2は口径が25.2cmほどある。底部を欠くが15cmほどの高さになると思われる。底部から内湾しながらたちあがり、口縁部にいたる。体部下部には斜めのヘラケズリ痕

がみえる。内面は、ヘラミガキされ黒色処理されている。

3は口径29.0cmある。小さな底部から内湾しながらのびていき、口縁部の下でややくびれ、かるく外反する。片口がつく。底部はていねいにナデである。体部下部はていねいにヘラケズリされている。上部はロクロ調整されているようである。内面はヘラミガキされ、黒色処理されている。

この他、高台部のみで土師器か、黒色土器Aか判断できないものが14点(45g)、分類できないものが520点(1,820g)あった。

瓦は、29点出土している(3,930g)。すべて平瓦と思われる。

第25図1は7点が接合してほぼ全体の形をつかめるものである(2,330g)。復元すると縦35.5cm・横20cmの大きさになる。

凸面には平行叩き目が施されている。叩き目は一方からだけでなく、上下の両方向から施されている。部分的に指頭状のナデや幅1.5cmほどの刷毛状工具による浅いナデが横方向にみられる。

凹面には布目が残る。その上を横方向に3~4cmほどの間隔で指頭や刷毛状工具によって押さえるようにナデしている部分が數カ所観察できる。粘土の継目であろう。

表裏の整形が済んだ後、上端を丸くなれて仕上げ、下端は何度かに分けて削られる(右から左へ)。その後、側面を仕上げている。

側面には凸面からみて右側面の隅に第25図6の側面にみられるような平行な条線が斜めに3~4cmみえ、それを切って下から上の方に削って仕上げている。

焼成は図の右側は赤焼け状態であるが、左上は還元焰焼成に近い状態に良く焼けている。

2の凸面には部分的に平行叩き目が残るが他はナデによって消されているようである。注目したいのは左端に平行叩き目によるものと思われる沈線が連続することである。

凹面にはやはり布目が残るがその上を指頭によって押さえるようにナデ、さらに端の3.5cmほどの部分には上から下方向に削りが施される。また、上端は横方向のナデとともに凸面の方向に引きあげていることも特徴である。焼成は良い。

4の凸面にはやはり平行叩き目が斜めに施されている。凹面に布目が残る。上端部はナデで整形した後に8mmほどの長さの連続した刺穴を加えている点に注目したい。

3の凸面の平行叩き目は1と同様に上下の両方向から施されていることが観察できる。5は3と同一個体かと思われる。

砥石は1点出土している(第24図3)。長さ5.6cm・幅1.5cm・厚さ1.4cmと完形である。重量は20gほどになる。上端部には径2mmほどの小孔が両端から穿孔されている。四面に使用の痕がうかがえる。石は赤茶色をおび細かな粒子で軟らかく土製品かのような印象を与える。

#### ウ SK3(第11図)

検出面で長径4m、深さ2mをこえる大型の土坑である。土坑はさらに東側に広がるが、用地

外のため調査できなかった。

土坑はIII層の上面で検出されている。さらに、IV層、V層を掘り抜き、VI層に達している。VI層からは水がわき出てくる。

土坑の下部はV層（灰白色粘質土層）を掘り込むかのように袋状に広がる。とくに南壁は灰白色粘質土層を深く掘り込んでいるため、上部層が崩落する危険があり奥行きを確認できなかった。おそらく、下部の長さは5mちかくになるものと思われる。

底面は凹凸はみられるもののほぼ平らに広がっている。

出土遺物 須恵器の壺、高台壺、甕、蓋、土師器の壺、甕、蓋、黒色土器の壺A、甕が出土している。いずれも土坑上部を覆う黒褐色土層からの出土である。

須恵器は壺42点(421g)、高台壺9点(110g)、甕18点(385g)、不明3点(55g)の破片が出土している。

第23図1は須恵器の壺で口径13.2cm・器高3.6cmである。底部から体部への屈曲部はまるみをもつが体部は直線的にのびる。口縁部はわずか内湾ぎみになる。底部は糸切り痕が未調整のままのこる。焼成は良く、口縁部の内外面には自然釉が付着している。

土師器は壺3点(65g)、甕22点(420g)、蓋1点(11g)が、黒色土器は壺20点(111g)、甕2点(125g)の破片が出土しているがいずれも小片で図示できなかった。

このほか赤焼けの須恵器とも土師器とも判断つかないような網片が30点(52g)ある。

#### エ SK 4 (第10図)

長径280cm・短径230cmほどの円形にちかい形をしている。深さはほぼ25cmある。

土坑はIII層上面で検出され、III層を25cmほど掘り込んだ浅いもので、他の土坑とは性質が異なるものと思われる。土坑内は炭化物を多く含む黒色土が堆積していた。

出土遺物 須恵器の壺、土師器の壺、甕、小型甕、短頭甕、黒色土器Aの壺、椀、甕が出土している。遺物は炭化物を多く含む黒色土中から出土している。

須恵器の壺は802点(5052g)出土している（第9図23～25）。23は口径12.9cm、器高3.4cmあり、底部からいったん外に開いた後、内湾ぎみにのび口縁部がかるく外反する。24は口径13.2cm、器高3.8cmあり、底部から内湾ぎみにのび口縁部がかるく外反する。25は口径12.7cm、器高4.1cmで内湾ぎみに開いた後、いくぶん外反ぎみにのびて口縁部にいたる。

底部はいずれも糸切り痕が未調整のままのこる。器面は薄くはがれ落ちたように観察される部分がみられたり、底部の内外面が「黒斑状」にみえるなどSK2出土の多くの壺と共通する。

土師器は壺4点(80g)、甕22点(400g)、小型甕1点(10g)、短頭甕1点(10g)の破片が出土している。

第9図30は口縁部がほぼ直立する短頭甕である。口径7.1cmと小型で、口縁部内側は厚めの頸部から大きく外反し口縁端部は鋭角になる。体部は肩がなだらかに下る。

黒色土器Aは壺50点(567g)、椀5点(142g)、甕1点(15g)の破片が出土している。

第9図26～29は椀である。26・27は椀の底部である。内面は黒色処理されていないが、ていねいにヘラミガキされている。底部は全面がナデによって調整されており糸切り痕はみられない。高台部はいくぶん外に開き気味である。

28・29は高台部を欠くが椀と考えられる。28は口径15cmある。29は口径16.8cmある。ともに底部から内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は外反する。内面はていねいにヘラミガキされ、黒色処理されている。

#### オ SK 5 (第10図)

長径220cm・短径190cmほどの円形にちかい形をしている。深さはほぼ180cmある。

土坑はIV層上面で検出された。IV層と、60cmほどあるV層を掘り抜き、さらに、VI層を35cmほど掘り込んでいる。

土坑内は第10図のような堆積を示していた。

出土遺物 須恵器の壺、土師器の甕、小型甕、黒色土器Aの椀が出土している。遺物の多くは黄白色粘質土を混じえた黒褐色土中(3層)から出土している。

須恵器の壺は104点(997g)の破片が出土している。第23図2～6はほぼ完形の壺で、7の小型甕と共に土坑内の3層下部でまとめて出土している。

2は完形で口径12.7cm・器高3.8cm(105g)、3は口径13.0cm・器高3.6cm、4は口径13.0cm・器高3.6cm、5も完形で口径13.6cm・器高3.3cm(122g)、6は口径13.0cm・器高3.3cmといずれもにた大きさである。

器形も底部から内湾ぎみにのび口縁部がかるく外反する点など類似している。

また、底部は糸切り痕が未調整のままのこり、器面が薄くはがれ落ちたように観察される部分がみられたり、底部の内外面が「黒斑状」にみえるなど焼成のようすもSK 2出土の多くの壺と共通する。

土師器は甕2点(35g)、小型甕1点(192g)が出土している。

第23図7は底部の中央が欠けるがほぼ完形の小型甕である。口径8.7cm・器高7.9cmある。反球胴からのびた短い口縁部は外に開く。最大径はほぼ胴部中央にあるが口径と大きな差はない。底部は糸切り未調整で、底部から胴部への屈曲部はわずかの間(1～2cm)ヘラケズリされている。中央部の欠損部はもとから底部が薄くなっている部分で、穿孔されたものか判断し難い。

黒色土器Aの椀は3点(40g)出土しているが図示できるものはなかった。

#### ② その他

##### ア SX 1

12F・12G・13F・13Gを中心に焼土がみられたり、遺物がまとまって出土するなど住居址などの存在を思わせる部分であったが、遺構を明確に検出できなかった。ここでは、SX 1として報告しておきたい。

出土遺物 須恵器の壺・甕、瓦、文様をもつ瓦質の土器、土師器の壺・椀・甕・小型甕・皿・

盤、黒色土器Aの壺・椀・皿・鉢さらに、石製品の紡錘車・砥石が出土している。

須恵器は壺587点(4,615g)・甕1点(60g)の破片が出土している。

壺は7点図示できた(第23図9~15)。9は口径13.1cm・器高3.7cm、10は口径13.4cm・器高3.6cmある。底部内側中央部が薄くなり欠けている。11は口径13.4cm・器高3.9cmある。口唇部に棒状のもので押したような痕が残る。

12は口径15.0cm・器高3.5cmとやや大型である。13は口径13.8cm・器高3.4cm、14は口径13.0cm・器高4.2cmで底部内側中央が薄い。15は口径13.5cm・器高4.2cmある。底部が厚くSK2に見られた二重底のタイプのものと類似している。

器形は9が底部から体部へ直線的にのびてから内湾ぎみになり口縁部がかるく外反するが、他は底部から内湾ぎみにのび口縁部がかるく外反する。10・12はそれぞれ底径6.6cm、7.8cmと他に比して大きめである。

底部は糸切り痕が未調整のままのこり、器面が薄くはがれ落ちたように観察される部分がみられたり、底部の内外面が「黒斑状」にみえる点など焼成のようすもSK2出土の多くの壺と共通する。

土師器は壺111点(920g)・椀1点(80g)・甕84点(1,150g)・小型甕2点(35g)・皿2点(194g)・盤2(70g)点の破片が出土している。

第23図19は皿である。完形で口径14.4cm・器高2.4cm、重量は177gある。ほぼ直線状にのびた体部は口縁部でおおきく立ち上がる。底部は糸切り未調整のようだが摩滅して明瞭ではない。胎土には小石や砂粒が多く含まれる。

2点出土した盤はSK16出土のものと接合している。破片が限られていて器形や大きさはつかめないが、口径は35cm近いのではないかと思われる。クロロ痕を残す。口縁は端部の近くで棱をつくって立ち上がる。

黒色土器Aは壺15点(640g)・椀3点(76g)・皿3点(30g)・鉢1点(15g)の破片が出土している。

壺は3点図示できた(第23図8・16・17)。第23図8は口径18cm近い大型の壺になるものと思われる。内面はていねいにヘラミガキされているが、黒色処理は施されていない。底部および底部からの立ち上がりの部分にはヘラケズリがみられる。16は口径16.1cm・器高4.5cmある。内面はていねいにヘラミガキされ、黒色処理されている。底部から内湾ぎみにのび口縁部が軽く外反する。底部および底部からの立ち上がりの部分にはヘラケズリがみられる。17は口径14.9cm・器高4.7cmある。内面はていねいにヘラミガキされ、黒色処理されている。底部からの立ち上がり部が屈曲しているので底部が突出ぎみにみえる。体部は内湾し口縁部はわずか外反する。底部は糸切り未調整のままである。

18は椀の底部である。内面はていねいにヘラミガキされているが、黒色処理されていない。高台部は外に大きく開く。底部は高台部付着後回転ナデされているようである。

瓦は8点(680g)出土している。

第25図6は平瓦の拓影である。凸面には平行叩き目が斜めから横方向に施されている。凹面には布目が残り、その上に、横方向に刷毛状の工具によるナデと指頭によると思われるおさえナデが加えられていることが観察できる。

また、側面にも横方向に刷毛状の工具によるナデが施されているように見える。同様なものはSK2出土の瓦の側面隅にみえる(第25図1の瓦)。還元炎焼成で須恵器を思わせるように良く焼かれている。

このほか、文様を持つ瓦質の土器片4点(95g)が出土している(写真図版23)。幅広の線刻をもつが、全体の構成をつかめず何を意図して描いたものか判断できなかった。胎土及び焼成は赤焼けの瓦と非常によく似ているが、表面の屈曲の様子などから判断すると瓦としてつくられたものではないようである。

石製品では紡錘車1点(72g)・砥石1点(19g)出土している。

紡錘車(第24図4、写真図版23)は径4.9cmほどの円形で中央部に径0.9cmほどの孔が穿孔されている。表面や側面には整形時のものと思われる細い直線状の擦痕が多く残っている。また、側面には長さ2cm、深さ3mmの傷がみえるが製作過程のものようである。石は細かな粒子で軟らかく凝灰岩質のものと考える。

砥石(第24図5)は半分ほど欠けているが、現存部で長さ2.7cm・幅2.4cm・厚さ2.1cmほどになる。中央上部には入り口が径4~5mmで、だいに径2mmほどになる小孔が穿孔されている。穿孔は一方から行われたようである。図の裏面を除く三面には(二面は欠ける)使用の痕がうかがえる。石は赤茶色をおび細かな粒子で軟らかく土製品かのような印象を与える点など、A地区SK2出土の砥石と同様な石質である。

#### イ 遺構外出土の遺物

この他に遺構に伴わない遺物破片が1,878点(12,395g)出土している。多くは須恵器の坏で1,480点(7,940g)出土しており出土数の80%近くをしめている。以下黒色土器Aの坏が179点(1,650g)で全体の9.5%、土師器の壺が126点(1,615g)で全体の6.7%、土師器の坏43点(340g)で全体の2.3%などとなっている。

この他に須恵器の甕・蓋・長頸壺・瓦、土師器の壺・小型甕・蓋・皿・盤、黒色土器Aの壺・甕・皿が出土しているがそれぞれ1~数点にすぎない。

出土地区別では、12E・13E・13F・14Fの4区に遺構外出土遺物の大半(83.5%)が集中している。

12Eからは須恵器坏212点(1,390g)、黒色土器Aの坏35点(305g)、土師器壺35点(500g)、土師器壺12点(55g)など計304点(2,450g)出土し、13Eからは須恵器坏421点(2,460g)、黒色土器Aの坏57点(510g)、土師器壺18点(260g)、土師器壺6点(90g)、瓦1点(25g)など計510点(3,495g)が出土し、13Fからは須恵器坏310点(175g)、黒色土器Aの坏40点(380g)、土師器甕8点(100

g)、土師器坏3点(10g)など計368点(2,340g)が、14Fからは須恵器坏320点(1,310g)、黒色土器Aの坏23点(310g)、土師器甕24点(315g)、土師器坏7点(90g)、瓦1点(15g)など計387点(2,275g)が出土している。

このうち、13Eの遺物についてはSK4と、13Fの遺物についてはSX1と関わりがあるものとも考えられる。遺物は、いずれも小片で図示できるものはなかった。

#### 4 成果と課題

##### ア 土坑の性格

ここで出土した土坑の多くは、粘土探掘に伴う土坑である可能性が強い。同様な遺跡は、中野市で2遺跡確認されているほか<sup>[6]</sup>、多摩ニュータウンNa146遺跡<sup>[7]</sup>や東京造形大学宇津賀校地内遺跡<sup>[8]</sup>など各地でも発掘され、近年しだいに注目されてきている。

中村浩氏は『須恵器窯跡の分布と変遷』<sup>[9]</sup>の中で、粘土探掘坑の検出された9遺跡を紹介され、粘土探掘に伴う遺跡であるかどうかは、白神紀之氏の区分基準によるのが妥当とし、次のように紹介されている。

「(A類は)粘土の掘削が目的で、粘土層より下を掘り抜くものではなく、下層に良質な粘土のないところでは水平方向に粘土を探掘していった状況が観察される。立地は、埴輪あるいは須恵器の窯に伴うことが多い。平面は、不定形のものが多いが、円形、隅丸方形のものもある。断面の状況は上部より下部に広がるいわゆる袋状のものが多い。埋土の状況は一定ではなく、あるものは自然堆積、あるものは残土を捨てた状況を示している。これらに共通することは、掘削土をそのまま同じ土坑に埋め戻していないことである。切り合い完形は持つ場合と持たない場合がある。遺物は、焼成不良品や破損品が多いが、まったく検出されない場合もある。」

ここで指摘された点を本遺跡で検出した土坑と比較してみた場合、水平方向に粘土を探掘していった状況や平面形、断面の状況、埋土の状況など共通する部分が多い。

さらに、本遺跡の周辺には窯址がいくつか存在しており、最も近い明神山(仮称)窯址は北西250mほどの位置に、また、500mほど北には本報告書に記載した上の山窯址、600mほど北には仮称旨の沢窯址・針の木窯址がある<sup>[10]</sup>など立地の点からも粘土探掘坑と判断できそうである。

##### イ SK2の出土遺物の年代

SK2と類似の構造は前高山窯址で検出している。上水内郡誌には前高山古窯北二号址の「煙り出し部の左側方に径一・五m余の円形状の掘り込みがあり、中に坏を主体とした須恵器が完形で多量に出土した。製品収蔵穴であろう。」と記されている<sup>[11]</sup>。報告書が未刊であり詳細がつかめないがSK2と同様な構造ではないかと思われる。

SK2出土の遺物の総重量比は須恵器75.5%、土師器10.9%、黒色土器A10.4%、瓦2.2%、その他1.0%となっており、須恵器を中心にして土師器と黒色土器Aをまじえることがわかる。なお、灰釉陶器は一点も含まない。

これを器種別に見ると須恵器では壺が須恵器全体の出土重量の98.4%（出土数の99.7%）をしめSK2の中心をなす遺物が須恵器の壺であるといえる<sup>[12]</sup>。

SK2に廻棄<sup>[13]</sup>されていた壺の個体数は、1,000点前後になるものと思われる。（壺の総重量を完形の壺の一個体の平均重量125g<sup>[14]</sup>で割って求めてみると1,065点となる。）

これらの壺はすでにふれたように、いわゆる軟質須恵器で、そこに黒色土器Aの壺とごく少量の碗・皿、をまじえる食器具の様相は、吉田川西遺跡のSB144段階<sup>[15]</sup>、松本平における7期<sup>[16]</sup>に相当するものと思われる。

両遺跡の研究成果から年代は9世紀の第III四半期に位置付けられるものと思われる。

現在までのところ、この時期の窯址は発見されていないが、SK2の壺の出土量の多さや赤みのある製品が多いこと、また、軟質須恵器の割合の高いことなど考えあわせて、近くに窯址が存在したものと思われる。

#### ウ 土坑の年代

土坑の切り合ひ関係が見られるので、少なくとも2時期には分けられる。

十分ではないが出土遺物の接合を試みたところ、A地区のSK16とB地区のSX1（盤）、同じくSK16とB地区SK2（黒色土器壺・第22図1）の遺物に接合するものがあった。

また、それぞれの土坑から出土した須恵器の壺を比較してみるとB地区のSX1・SK2・SK4・SK5、A地区のSK11は同一時期のものであり、9世紀第III四半期に位置付けられよう。他の多くの土坑も土坑の並びなどからこの時期に属するのが多いものと思われる。

もっとも、この年代は土坑内に廻棄された時期を示すものであって、必ずしも土坑の掘られた時期を特定するものではない。B地区のSK3では、あれだけ大きな土坑内に堆積した埋土の上層から硬質の須恵器壺が出土しており、いくぶん時間差があることが考えられる。

#### エ 須恵器の製作技法について

##### ・壺の底部に円盤を重ねてつくる方法（写真図版25）

試掘調査の段階で「底部円柱づくり」の技法を持つ壺の底部を確認していたが、今回SK2出土の壺の中にも同技法のものを確認できた。これまでこの技法によるものは、10世紀の製品のみといわれたが<sup>[17]</sup>、SK2出土の遺物は9世紀後半にはおさまるもので同技法の開始時期や分布を考える上で大事な資料になるものと思われる。

##### ・甕の擬口縁内部に残る同心円の叩き目（挿図9、写真図版24）

大形甕の成形法を示す資料が一点A地区から出土している。（整理の段階での不手際のため出土時のデーターが不明である。）

この甕は内面の一部に粗い格子目の叩き目を、表面には全面に細かな格子目ふうの叩き目を残しているが、挿図9にみるように表面が剥離した擬口縁部分に同心円の叩き目を施している。

「体部を成形する場合、普通粘土紐を積み上げ、器壁の内側に当て道具をあて、外側から叩き板をもって叩きながら成形する」<sup>[18]</sup>のであるが、擬口縁部には外側に当て具をあてていることが分



図9 窯の擬円錐内部に残る同心円の叩き目(左)

かる事例で貴重である。おそらく、先にいくほど薄くなる粘土紐の先端部分を外側から強く叩くことができず外側に当て具をあてて成形したものであろう。

#### オ 瓦

当地からさほど離れていない長野市若槻地区には3ヶ所の瓦を焼いた窯が確認されている。

最も近いのは長野市若槻下田子の東沢窑址で普光寺瓦の最も古式のものが焼かれている。さらに、若槻田中からは昭和23年上水道導管工事中に唐草文を持つ軒平瓦と平瓦が出上している。この瓦を使用した寺跡は判明していない[19]。

筆者らも若槻田中の現在の県道長野荒瀬原線の路肩部分で、唐草文とは名ばかりの文様を持つ軒平瓦と平瓦を出土した窯址を確認している[20]。長野市で調査した牛込バイパスD地点[21]では9世紀代の軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が多量に出土しているが、この窯址とはわずかな距離の地点である。

また、「中郷村史」にも現在の牛込村地区内から出土した、凸面が繩叩き目によって成形された平瓦の写真が掲載されている[22]。詳しい山土地は不明であるが、SK2とSX1を中心に出土した瓦には凸面を繩叩き目によって成形した平瓦は1点もなく、別の地点からの出土品と考えられる。当村にも瓦を焼いた窯が複数存在したのではないかと思われる。

このように若槻地区や平出地区にはいくつかの瓦窯が存在した可能性が高いが、発見されている瓦窯址もいずれも偶然見つかったもので十分調査が行われておらず不明な点が多い。今後の調査に期待したい。

#### 註

- 1 萩野繁春 「老洞古窯址群発掘調査報告書」P47 1981 岐阜市教育委員会
- 2 牛込村古町の陶芸家朝比奈克文氏の教示による。
- 3 服部敬史 「八王子市南部地区の遺跡」P24 1980 八王子市南部地区遺跡調査会  
玉川時雄・小金井靖 「土器・須恵器の知識」P118 1984 東京美術
- 4 このような特徴の須恵器を註16文献では「軟質須恵器」と呼ぶ。
- 5 笹沢 浩 「凸帯付四耳壺考」 長野県考古学会誌51 1986
- 6 「沢田鍋土遺跡」「長野県埋蔵文化財センター年報8」P37 1992 長野県埋蔵文化財センター  
「池田窯窯跡」「長野県埋蔵文化財センター年報9」P87 1993 長野県埋蔵文化財センター
- 7 「多摩ニュータウン遺跡—昭和56年度—第一分冊」 1982 東京都埋蔵文化財センター
- 8 遠藤政孝 南多摩窯跡群の調査—東京造形大学宇津賀校地内遺跡—『季刊考古学』34号 1991
- 9 中村 浩 「須恵器窯跡の分布と変遷」P159~166 1992 雄山閣
- 10 現地調査を進めているところである。詳細は後日を期したい。

- 11 笹沢 浩 「上水内郡誌歴史編」P196 上水内郡誌編集会 1976
- 12 上師器では甕が土師器全体の出土重量の65.1%（出土数の76.7%）、盤が20.3%（出土数の5.9%）をしめ環の割合は7.3%（出土数の14.8%）、黒色土器Aでは甕が黑色土器全体の出土 重量の77.4 %（出土数の95.8%）をしめている。
- 13 出土した完形の甕は53点あった。その重量は100~151gと思ひのほか幅のあるものだったが中心は115~130g前後のものであり、53点の平均は125.0gであった。
- 14 ただ、甕の多くは重なった状態で（十数枚重なったものもあった）出土しており、廃棄という言葉については検討すべき余地もある。類例を待って考えたい。
- 15 原 明芳 「古田川西遺跡における食器の変容」「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 3」P300~
- 16 小平和夫 「古代の土器」「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 4」P97~ 1990
- 17 計3服部の報告P23ではG59窯址（9世紀後半）の資料の中に底部が円柱の形に割れている甕を示し、円柱づくりの「間接的証拠」としている。
- 18 田辺昭三 「須恵器大成」P23 角川書店 1981
- 19 米山一政 「信濃の古瓦」「一志茂樹博士喜寿記念論集」 1971  
米山一政 「善光寺瓦と善光寺の草創」「地方研究論叢」 一志茂樹先生誕辰記念会編 1954  
同書では若狭吉村にも瓦の多量に出土する地点のあることを記載されており（P334）、調査が進むれば若狭地区の瓦窯址の分布はさらに広がるものと思われる。
- 20 小柳義男 「長野市東北部の分布調査報告」「無定形」 1969 長野吉田高校地歴班  
報告では「土京山」とした瓦出土地は水田の工事のさい発見したものであるが、田中1241番地前の道路敷の下に窓の一部を残している。
- 21 青木和明 「浅川扇状地遺跡群」P147 1986 長野市教育委員会
- 22 清水勝治 「中郷村史」 中郷村史編纂委員会 1960

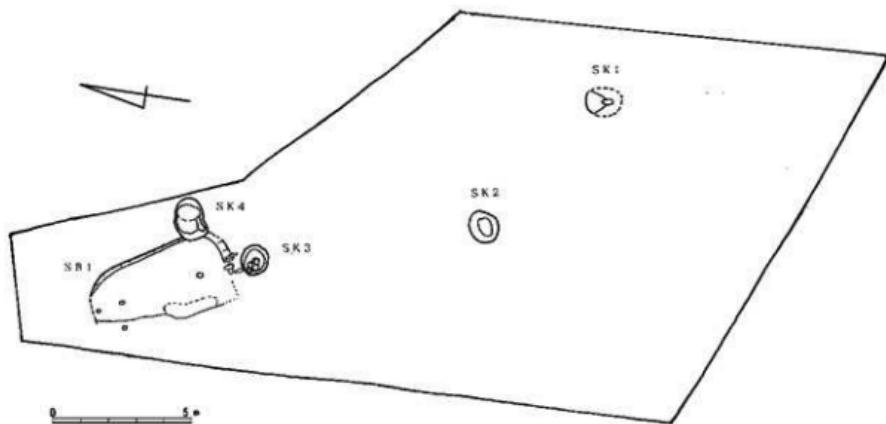
## 第4章 平出東浦遺跡の調査

### 第1節 調査の概要

東浦遺跡は牛込村大字平出字東浦727番地に所在する。

遺跡は県道長野・荒瀬原線の改良工事に伴う事前調査のおり確認された。遺跡は、水田面と接する丘陵部の末端に位置しており（第26図）、果樹園として利用されていた。

当初、調査は平成3年の夏に予定されていたが工事の進捗が早くなり、同年3月中旬から調査を実施した。遺跡からは、縄文時代の土坑2基、平安時代の竪穴住居址が1軒と土坑2基が検出された。



挿図10 東浦遺跡遺構全体図

### 第2節 調査の結果

#### 1 層序と地形

遺跡は、丘陵状に伸びた「上の山」の南西にあたり、南には平出地区唯一の川、月見川が流れている。

平出地区は水利の便が悪く、果樹や畠作を中心とする地域であるが、月見川の流れる一帯は比較的水利に恵まれ地域には数少ない水田地帯となっている。

層序はⅠ層表土（5～10cm）、Ⅱ層黒色土層（10～20cm）、Ⅲ層黒褐色土層（5～10cm）、Ⅳ層黄

白色粘質土層となっている。山側は薄く傾斜の緩む水田近くになると厚く堆積する傾向が見られる。

## 2 繩文時代の造構と造物

### (1) 土 坑

#### ア SK 1 (第27図)

試掘の段階で、ごみ穴として掘り上げられていた土の中から縄文時代早期の絡状帶圧痕文を持つ土器が見つかり、周囲を調査して土坑を検出していた。

南側はほとんど掘り上げられており全体の大きさを知ることができないが、推定長径140cm、短径115cm、深さ65cmと大型の土坑である。楕円形に近い形をしていたものと思われる。

土坑検出部にはIII層は広がっておらず、IV層中のII層の落ち込みとして明瞭に検出することができた。土坑下部にIII層に類似した黒褐色土が薄く堆積していた。

出土遺物 同一個体と見られる絡状帶圧痕文土器が数点出土している(写真図版26)。非常に多く表面も剥離している部分が多い。胎土には纖維が多く含んでいる。4mmほどある石粒も多い。器壁は厚く1cmほどある。外面とも条痕が多くのこり、隆帯上には絡状帶圧痕文が観察できる。

土器は土坑の底部に近い黒褐色土中にまとまっていたようである。

#### イ SK 2 (第27図)

長径130cm、短径105cm、深さ55cmと大型の土坑である。平面は楕円形をしている。

土坑は、IV層中のII層の落ち込みとして明瞭に検出することができた。土坑内は上部から黒色土、黒褐色土、灰白色土混じりの黒褐色土という堆積を示していた。

出土遺物 楕円と山形の押型文を併せ持つ縄文時代早期の土器1点(挿図11)と石片(フレイク)1点出土している。ともに黒褐色土中からの出土である。

押型文土器には楕円と山形がみられる。胎土には細かな白い粒が多く含まれている。器壁は5~6mmほどと薄い。



挿図11 SK 2出土  
押型文土器(ノリ)

## 3 平安時代の造構と造物

### (1) 住居址

#### ア SB 1 (第27図)

西向きの斜面に構築されていることと、西側が道路に面して削られていたため、住居址は東側の近い部分を検出できただけである。住居址のすぐ南にはSK 3があり、南東隅の一部はSK 4によって壊されている。現存部分は520×260cmほどである。

住居址はIV層へのIII層の落ち込みとして検出された。埋土はほぼ一様で分層できなかった。壁は東側がよくのこり壁高は35cmほどあった。住居址の中央南よりの部分には、堅くしまった床が広がっていた。

南壁の東よりに石組みのカマドがあり、扁平な平石を組み合わせてカマドを築いている。西側の石は抜かれていたが、その跡が明瞭に検出できた。この間からは多くの炭化物が見つかっている。

柱穴は4本検出できた。P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>はほぼ一直線状に並ぶ。P<sub>4</sub>は床面が壊された部分に検出されたものであるが、この住居址に伴うものと思われる。P<sub>1</sub>は直径20cm、深さも20cmほどで最も大きいものである。P<sub>2</sub>～P<sub>4</sub>は12～15cmと柱穴の大きさは小さくなる。

出土遺物 須恵器の壺・台付壺・甕・蓋・長頸甕、土師器の甕が出土している。

須恵器は壺が3点、台付壺が1点、蓋が1点、長頸甕が3点、甕が8点出土しているがいずれも小さな破片である。挿図12-1は須恵器の蓋である。

甕は表面に平行叩き目を持つ。内面は平行カキメを残すもの、当て具の跡を残すもの、ていねいなものと分かれる。

台付壺の底部にはヘラケズリが見られる。

土師器は甕が26点出土している。このほか摩滅した破片が数点ある。図示できるものはなかった。

## (2) 土 坑

### ア SK 3 (第27図)

長径120cm、短径100cm、深さ25cmほどの大きさである。平面形はほぼ橢円形をしている。

土坑はⅢ層への黒土の落ち込みとして検出された。土坑内は平石が重なり、炭化物も検出されている。土層は上部から黒土、炭化物を多く含む黒土という堆積を示している。

4枚の平石は50×25cmほどのものが2枚、35×20cmほどのものが2枚使われている。

出土遺物 須恵器片(壺か)と土師器の壺・羽釜が出土している。

土師器の壺は1番上の石と2番目の石の間から1点出土している。挿図12-4は口径10.1cm・器高2.4cmと小さく浅い皿状のものである。口縁部はほぼ直線的のび、全体に厚ぼったい。胎土は黄褐色に近く、砂粒を含む。器体部はヨコナデ、底は回転糸切り未調整である。

羽釜は土坑の最下部より1点出土している。口縁部はいくぶん内傾する。表裏に右下がりのナデが見られる。鋤の内側には指頭による押さえの跡が残る。胎土には石英や白い粒の石粒が多く含まれる。8mmほどの厚さがある。

須恵器片は黒土中より1点出土した。

### イ SK 4 (第27図)

長径165cm、短径110cm、深さ50cmほどの大型の土坑である。平面形はほぼ橢円形をしている。

土坑はIV層への黒土の落ち込みとして検出された。北側は住居址を壊して作られている。

土坑内は東側が一段深くなっており、七層は上部から黒色土、黒褐色土という堆積を示している。

出土遺物 須恵器の甕、土師器の壺・羽釜が出土している。

須恵器の甕は1点出土している。表面には格子目の叩きが施されて、内面には同心円の叩き目が残る。

土師器は甕が3点出土している。甕には2形態がある。挿図12-2は口縁部が内湾し全体に厚ぼったい。口径10.1cm・器高2.9cm・底径6cmであり口径に比して底径が広い。小型の甕状といえる。挿図12-3は口縁部が内湾しており、底部が厚くなる。口径9.4cm・器高3.3cm・底径3.5cmとなり口径に比して底径が狭い。小型の椀状をしめす。

ともに、器体部がヨコナデ、底が回転糸切り未調整と共通する。胎土は細かで暗褐色をしている。

羽釜には表裏にナデがみられ、胎土に雲母、石英粒など多く含む。6mmほどの厚さである。



挿図12 東浦遺跡出土遺物実測図

#### 4 成果と課題

SK2より出土した押型文土器は牟礼村では初めて発見されたものである。しかし、となりの信濃町には塞ノ神遺跡<sup>[1]</sup>・大道下遺跡<sup>[2]</sup>などいくつかの遺跡が紹介されており、また、未報告ではあるが同町の石原遺跡からは、桶沢タイプの押型文土器と黒鉛を含む押型文土器も出土しているなど、いくつかの形式にわたり数多く分布しており、牟礼村においても押型文土器の分布は今後の調査によって広がりをみせてくるのではないかと思われる。

SK1より出土の縦状帯压痕文土器は、牟礼村丸山遺跡<sup>[3]</sup>にも良好な資料があるが、隆帶上に縦状帯压痕を持つなど、丸山遺跡のものより新しいものようである。

平安時代の住居址は、本村においては丸山遺跡で3軒、前田遺跡<sup>[4]</sup>で4軒確認されている。

前田遺跡の出土遺物をみると1号住居址で須恵器蓋1、土師器小型甕1、黒色土器Aの椀1点が、2号住居址で須恵器甕3・蓋4、土師器甕3点が、3号住居址で須恵器甕1・台付甕1、土師器甕3点が、4号住居址で須恵器甕2・台付甕3・甕1・短頸甕1、土師器甕3、黒色土器Aの甕1点が図示されている。

土師器は甕を主体として、食膳具の中心は須恵器の甕と台付甕がはたしている。須恵器は歪みを持つものが多く前高山窑址等近接する窯址からの製品であることをうかがわせている。

丸山遺跡の出土遺物は2号住居址が土師器甕8・黒色土器Aの甕11、須恵器片1点が、3号住居址からは土師器甕8・黒色土器Aの甕4点が、4号住居址からは土師器甕(鉢)4、黒色土器Aの甕2、須恵器片1と鉄器1点が出土している。

遺物は土師器の甕と黒色土器Aの甕がほとんどである。3軒の住居址は出土した土師器の甕底部の整形が、ヘラケズリを主とする2号住居址と糸切り未調整である3・4号住居址とで、時間的前後関係がとらえられている。

両遺跡の年代であるが、報告では前者が「国分期」あるいは「平安時代」とされ、後者は「9世紀後半～11世紀（あるいは12世紀）」と、ともにかなりの年代幅を持たせているが、前田遺跡の住居址の食膳具は須恵器を主体としてわずかに黒色土器Aを伴うのに対し、丸山遺跡では食膳具のすべては黒色土器Aであることから両遺跡の年代幅はかなり異定されてくる。

原明芳の報告<sup>[5]</sup>等によれば、前田遺跡の住居址の年代は9世紀前半に、丸山遺跡の住居址の年代は9世紀後半あたりに想定できそうである。

さて本遺跡の住居址は、出土遺物はわずかであるが、須恵器は壺・高台壺・蓋・長頸壺・甕、土師器は甕のみと黒色土器Aを混じえない点や住居址が大型である点などから、前田遺跡のものよりいくぶん古そうな要素を持っているように思われる。

S K 3・4 出土の土師器は、平安時代末期に位置づけられるものようである。近年各地で報告されており<sup>[6]</sup>その編年的位置付けもしだいにはっきりしてきた<sup>[7]</sup>。

S K 4はあるいは墓なのかもしれない。前田遺跡でも数基の土壙墓あるいは火葬墓と思われる土坑が調査されている。

#### 註

- 1 笹沢 浩・小林 学 「長野県上水内郡信濃町塙の神遺跡出土の押型文土器」「信濃」18-4
- 2 伊藤・小倉・菅田 「上水内郡信濃町字上の原・大道下採集資料について」「長野県考古学会誌」58 1989
- 3 半礼村丸山遺跡発掘調査報告書 P22・P36～ 1978 半礼村教育委員会
- 4 前田遺跡 長野県半礼村緊急発掘調査報告書 P21～ 1981 半礼村教育委員会
- 5 原明芳 「松本平における平安時代の食膳具」「信濃39-4」  
原明芳ほか 「吉田川西遺跡」中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3 1989
- 6 屋地遺跡II 1990 長野市教育委員会など
- 7 「古代末期～中世における在地系土器の諸問題」神奈川考古第21号 1986 神奈川考古同人会

## 第5章 平出上の山遺跡の調査

### 第1節 調査の概要

上の山遺跡は牟礼村大字平出字上ノ山2799番地に所在する。

上の山遺跡の周辺には、前高山古窯址、番匠古窯址、鬱山古窯址などこれまで数ヶ所の窯址が確認されている。隣接する前高山古窯址群を調査された笹沢浩氏は、これらの窯址を関連するものととらえ「鬱山窯址群」と呼ばれている。そして、一帯に広がる第三紀層中に存在する良質粘土を材料とし、製品は浅川扇状地上遺跡群などに供給したと想定されている[1]。

東浦遺跡の調査中、遺跡の見学に訪れた平井正一郎氏から遺跡の北方で須恵器の出土する場所があるとの教示をいただいた。現地を案内していただき、試掘により2基の窯址が存在することを確認した。

昭和20年代後半に野尻湖から長野市の上水道管を敷設するさい、東浦遺跡の近くから多くの土器が出土したことは、調査に参加された村文化財専門委員の井沢信雄氏より伺っていたがこれによりその地点が判明したことにもなった。

調査は平成3年7月28日より実施した。工事にかかる部分の調査は念入りに行ったが試掘の段階で確認した2基の窯以外は発見できなかった。

なお、調査地から120mほどはなれた池から振りあげた土の中から焼けひずんだ製品や空体が出土するなど、周辺に窯址群が広がることは確実である。

1号窯は部分的に破壊されていたが比較的よく残り、窯の構造や製品について多くの所見を得ることができた。2号窯はわずか残っていただけである。

### 第2節 調査の結果

#### 1 層序と地形

窯は「上の山」の西斜面に築かれている(第28図)。調査地道路部分の断面の層序はⅠ層盛土(50cm)、Ⅱ層黒褐色土(50cm)、Ⅲ層礫混じり黄白色粘質土(60cm)、Ⅳ層灰白色粘質土(80cm)、Ⅴ層砂礫層となっている。

窯址検出地では、30cmほどあるⅡ層の上を表土(腐葉土)が5~10cmほどおおっており、窯址は、Ⅲ層中に構築されていた。床面直下はⅣ層になる。

## 2 平安時代の造構と遺物

### (1) 窯 址

#### ① 1号窯

窯体 窯体残存長は510cm、水道管工事などで一部壊されているがほぼ全体を調査できた。主軸を等しくする2基の窯体がかさなっており、これを第1次窯体と第2次窯体とにわける。

#### ア 1次窯体の構造（第28図）

2次窯体の構築時に削りとられたのか部分的に確認できただけであるが、1次窯より一回り大きめの窯が存在していたのを確認できた。

焚口と、燃焼部と焼成部の傾斜変換部が破壊されている。床面も2次窯体の構築時に削りとられたのか確認できなかった。

残っていた側壁から床幅は最も広いところで150mほどであったと考えられる。

側壁は焼成部が比較的良く残っており、床面からの立ち上がりの部分などは、青灰色に還元している。スサ入り粘土の貼り壁で、貼りつけたさいの指あとと思われる部分がのこるところもある。

燃焼部では2次窯体の床面の下に部分的に砂砾混じりの炭化層が残る。

#### イ 2次窯体の構造（第29図）

1次窯体の内側に構築された形になっている。1次窯体同様、焚口と、燃焼部と焼成部との傾斜変換部が破壊されている。

燃焼部の床面傾斜は5度ほどでほとんど水平にちかい。床幅は100~110cmである。青灰色に還元した堅い面が焚口から焼成部にかけてしだいに厚くなるように広がる。

側壁はスサ入り粘土の貼り壁である。粘土を貼りつけたさいの指あとと思われる部分がのこるところもあるが、全体にはていねいに仕上げている。天井部は残っていない。

焼成部は現存長240cmあるが、傾斜変換部が破壊されているため本来は280cmほどあったものと推定している。

床幅は140cm前後である。床面は青灰色に還元した層が堅く焼けてしまっているが、奥壁にちかくなると還元層は薄くなり、赤く焼けた床面になる。傾斜変換部から現存70cmほどの間は、傾斜角は30度ほどであるが奥壁にちかくなると35度ほどになる。

側壁はスサ入り粘土の貼り壁である。壁の表面には加熱によって自然釉が吹きだしている。粘土を貼りつけたさいの指あとと思われる部分がのこるところもあるが、全体にはていねいに仕上げである。

天井は落ち込んだ状態で比較的良くのこっていた。やはりスサ入り粘土によってつくられていたが、側壁のように自然釉が吹きだすほどには焼けていなかった。焼成部の上部では天井部を検出できなかった。

奥壁、煙りだしは確認できなかった。奥壁部と思われるあたりに、熱を受けた大きな石が認め

られた。ときにIV層中に含まれる石と類似しており、窯構築時にそのままとりこんだものようである。

主軸は東西軸から5度ほど北によっている。

灰原は、現水田面の形成時に破壊されたものと思われ検出されなかった。

#### ウ 2次窯体出土遺物

出土遺物 須恵器の壺A（無高台壺）、壺B（台付壺）、蓋、長頸壺、短頸壺、凸帶付き四耳壺、甕がある。

壺A 底部の観察から壺であることがはっきりしている破片は17点(986g)あった。また、底部を残さず、次に触れる高台壺との区別が明瞭でない破片が25点(210g)ある。この内10点を図示できた（第30図1～10）。

1は口径14.2cm・器高4.1cmある。底部は糸切り後ヘラケズリをしているが、中心部はヘラ状のものの木口を回転させたかのように見える。底部からの立ち上がり部はいくぶん丸みをおび口縁部までいくぶん内湾ぎみに開く。胎土には砂粒が多くある。赤焼けの状態である。2は口径14.0cm・器高4.7cmある。底部は糸切り後周辺部をヘラケズリしている。やはり、厚めの底部から体部を薄く引き出している。底部からの立ち上がり部は丸みをおび、口縁部までいくぶん内湾ぎみに開く。赤焼けの状態である。3は口径14.0cm・器高4.0cmで底部は糸切り後周辺部をヘラケズリしている。底部からの立ち上がり部で屈曲し稜ができる。そのまま口縁部まではほんまっすぐに開く。底部は厚めであるが、体部は薄く引き出す。赤焼けの状態である。

4～10の底部は糸切り未調整となる。4は口径13.0cm・器高3.8cmで、底部からの立ち上がり部は丸みをおび、そこから口縁部まではほんまっすぐに開く。焼成は良く、火埠を残している。5は口径14.0cm・器高3.9cm。底部からの立ち上がり部は丸みをおび、口縁部までいくぶん内湾ぎみに開く。6は口径13.6cm・器高4.2cmある。底部からの立ち上がり部から口縁部までいくぶん内湾ぎみに開く。焼成は良く内外面に十文字に火埠を残している。7は口径13.2cm・器高3.6cmある。底部からほんまっすぐに開く。底部の中央が非常に薄くなり、そのためか破損している。焼成は良く、外面に十文字に火埠を残している。器面に粒状にふくれている部分（いわゆる「ふくがふく」状態）がみられ、かなり高温で焼かれたようすがうかがわれる[2]。8は口径13.3cm・器高3.8cmである。口縁部までいくぶん内湾ぎみに開く。内面に十文字に火埠を残し、外面には明瞭でないが4本の火埠が残る。9は口径13.2cm・器高3.8cmで、口縁部までいくぶん内湾ぎみに開いている。外外面に数本の火埠が残っている。7と同様に器面に粒状にふくれている部分がみられる。10は口径11.6cm・器高3.6cmとやや小ぶりである。底部が厚く、立ち上がりの部分が稜をなすところは特徴的な壺である。

図示できなかつたものを含め壺Aの特徴をまとめてみる。

壺Aは口径13～14cm、器高が3.5～4cmほどのものが主である（第30図1～9）が、口径11.6cm・器高3.6cmとやや小ぶりなもの（同図10）もみられる。糸切り後ヘラ削りしているものは全般にや

や大ぶりである。

器形は底部からの立ち上がりが、丸みをおびるものとほぼ直線的に開くものとがある。口縁部までいくぶん内湾するものもあるが弱く、全体には台形に近い形になる。

17点の壺Aのうち、12点は底部糸切り未調整である。3点は糸切り後ヘラ削りをしたよう（同図1～3）で中央部に糸切り痕が残っている。残りの2点は明瞭でない。底部糸切り未調整のものが主であるが、ヘラケズリを加えるものも少数含まれてといえる。

壺Aは重ね焼きをしたようで、火棒を残すものが半数近くみられる。ロクロの回転方向はすべて右方向である。

壺B（高台付壺）は27点(1,721g)出土している。口径が広く器高が深いものと、口径が狭く器高が浅いもの、口径が広く器高の浅い中間的なものがある。

口径が広く器高が深いものは、4点出土している（第30図11～14）。11・12・14のように体部の開きの大きいものと13のように垂直に近い角度で立ち上がるものとがあるようである。

11は口径15.0cm・器高5.9cmある。底部は厚めであるが、体部は薄く直線的に引き出されている。12は口径15.2cm・器高推定5.7cm前後。14は口径14.0cm・器高5.9cmあり、ともに11とよく似た器形をしている。

13は口径13.6cm・器高6.0cmある。底部からの立ち上がりに稜があり、そこから垂直に近い角度で立ち上がる。底部の中央近くの部分には糸切り痕が残るが周辺部は回転ヘラケズリされている。

口径が広く器高の浅い中間的な大きさのものは1点出土している。第30図16は口径15.1cm・器高4.4cmあり、厚めの底部からやや内湾ぎみに短い体部がのびる。底部の中央部分には糸切り痕が残るが周辺部は回転ヘラケズリされている。他に比べ高台の幅が広い。

口径が狭く器高が浅いものは、6点確認している（第30図18・20・22・23・24・26）。18は口径11.6cm・器高3.7cmある。底部全面を回転ヘラケズリしている。底部からの立ち上がりに稜をつくり外に開きながら口縁部にいたる。20は口径12.0cm・器高3.7cmある。底部は全面を回転ヘラケズリしている。器面が粒状にふくらんでいる部分がある。底部からの立ち上がりに稜をつくり外に開きながら口縁部にいたる。22は口径11.8cm・器高4.0cmある。底部中央部付近に糸切り痕を残し、周辺部は回転ヘラケズリしている。底部からの立ち上がりに稜をつくり外に開きながら口縁部にいたる。斐の破片が癒着している。23は口径11.4cm・器高3.9cmある。底部中央部付近に糸切り痕を残し、周辺部は回転ヘラケズリしているようである。高台は外に開きぎみとなり、外側で接地している。24は口径11.8cm・器高3.6cmある。底部からの立ち上がりに稲をつくり外に開きながら口縁部にいたる。高台は外に開きぎみとなり、外側で接地している。26は焼けひずんでいるが口径10.3cm・器高3.6cmほどになる。底部に異物が付着していて整形がはっきりつかめない。底部からの立ち上がりに稜をつくり、ほぼ垂直に近く口縁部にいたる。

残りの16点の破片の多くは、口径が狭く器高が浅いタイプのものとのようである。

図示できなかったものを含め壺Bの特徴をまとめてみる。

壺Bには3種類の大きさのことなるものがある。口径が広く器高が深いもの（I）は、口径13.5~15cm・器高が6cm前後の大きさであり、口径が広く器高の浅いもの（II）は数が少なくはつきりつかめないが口径15cm・器高4.5cm前後の大きさ、口径が狭く器高が浅いもの（III）は、口径11~12cm・器高3.5~4cm前後の大きさになる。

器形は体部の立ち上がりに稜を持ち、外に開きながら口縁部にいたるものと、より垂直に近い角度で口縁部にいたるものとがある。

高台は垂直に近く下がるものもあるが（15）、いくぶん外びらきになり外側で接地するものが多い。

底部整形の分かるものは17点ある。このうち5点は底部全体をヘラ削りしているが（第30図17・18・19・20）、12点は糸切り後周辺部を回転ヘラケズリしている（第30図13・15・16・21・22・23・25）。底部全体をヘラ削りするものと中央部に糸切り痕を残すものはほぼ1:2の割合となる。小型のものは底部全体をヘラケズリする割合が高いようである。ロクロの回転方向はすべて右回転である。

蓋は30点（1,020g）の破片が出土している。器高の低いもの（第30図27~29）と、高いもの（第30図30・31）との2種類がある。ともに、高台壺IあるいはIIに対応する大きさである。

器高の低いタイプは、口径15~16cm・器高2.5~3.5cm前後のもので、肩部ほぼ中央まで回転ヘラケズリされている。天井部の丸みは少なく扁平に近いものもある。中央には扁平な擬宝珠様つまみがつく。口縁端部は「く」の字に屈曲する。

27は口径15.4cm・器高2.5cmある。天井部からなだらかに下がるが、口縁部近くでいったん湾曲し、端部は薄く引き出され「く」の字に屈曲する。28は口径16.0cm・器高2.7cmある。天井部が扁平に近いが肩部からなだらかに下がり、口縁部近くでいったん湾曲し、端部は「く」の字に屈曲する。29は口径15.4cm・器高3.2cmある。天井部からなだらかに下がり、端部はかるく屈曲する。

器高の高いタイプは、口径14.5~16cm・器高推定4.5cm前後のもので、肩部中央より下部まで回転ヘラケズリされている。天井部に丸みがある。やはり中央には扁平な擬宝珠様つまみがつくものと思われる。口縁端部はかるく「く」の字に屈曲する。

図示した2点はともにつまみ部を欠き、加えて焼けひずみがあるため正確ではないが、30は口径14.4cm・器高推定4.5cm前後ある。天井部は高い。口縁部まで直線的に下がるが、口縁部近くでいったん湾曲し口縁端部はかるく屈曲する。31は口径16.0cm・器高推定4.5cm前後の大きさである。天井部は丸く、なだらかに下がるが、口縁部近くでいったん湾曲し口縁端部はかるく屈曲する。ともにつまみのつく面を下にして焼かれたことが内面の釉の付着状況から観察できる。

両タイプの割合は図示したもの以外の破片が小さく不明である。

長頸壺は7点（690g）の破片が出土した（第31図9・10・11）。

全体の形を知ることができないが、図示した9・10はいずれも球形胴に細い頸部のつくタイプのもので口縁部は屈曲して端部で口縁帯をつくる。11は長頸壺の底部付近の破片と思われる。高

台部がつくことは明瞭であるが欠けていてその形は分からぬ。表面も高熱を受けたのかはじけたようになっていて整形が不明である。底部は中心部に糸切り痕を残すが周辺はヘラケズリされている。

短頸壺は15点(248g)の破片が出土した(第31図6~8)。6は口径18.8cmある。体部の最大径20.4cmで胴部の上部にある。口縁部は一条の凸帯をめぐらしたかのように巧に引き出している。胴部には二条の浅い沈線が回る。全体にロクロナデされている。7も口径18.8cmある。体部の最大径18.8cmで胴部の上部にある。口縁端部を外に引き出すようにして仕上げている。全体にロクロナデされている。8は、あるいは7と接合するのではないかと思われる。底径7.4cmで、底部には糸切り痕が残っている。

凸帶付四耳壺<sup>[3]</sup>は3点(548g。融着した石の重量含む)出土した。凸帶断面は四角形で、破片がわずかであるため肩部の耳のかたちは不明である。体部は叩きによって調整され、内面には当て具の痕が残る。

壺は297点(35,824g)の破片が出土している。全体の形が明らかになるものはないが、大きさや口頭部の形により5種類に分けることができそうである(第30図1~5)。

1は口径が47.5cmと大形のものである。口縁部は屈曲して端部で口縁帯をつくり、頭部には文様を持たない。口頭部と頭部に近い体部は(4~5cmの範囲)はナデによって、体部は平行叩きによって調整されており、体部内面には当て具の痕がわずかに観察できる。

2は口径36cmある。口縁部は屈曲して端部で口縁帯をつくる。口頭部はロクロナデによって調整されている。口頭部は短く、鉢に近い形態になるのかも知れない。

3は口径20.4cmある。口縁部は屈曲して端部で口縁帯をつくる。ロクロナデによって調整されており、頭部に文様を持たない。小型になるが形態など1と類似する。

4は口径29.8cmある。鉢に近い形態をしている。口縁部はロクロナデによって調整されており、ナデの範囲は肩部にまで及ぶ。体部は平行叩きによって調整され、内面には当て具の痕がわずかに観察できる。赤焼である。

5は口縁部を欠く。体部最大径は30cmほどになる。体部は全体に平行叩きによって調整され、内面には当て具の痕が残る。内面最上部にロクロナデの痕が残るので、頭部はロクロによって調整されたようである。

## ② 2号窯(押図13)

2号窯は1号窯の4m程南に位置している。わずかな床面が残っただけで全容を知ることはできなかった。残存部は長さ115cm幅115cm程である。側壁、天井部なども確認できなかった。

窯主軸は東西軸から20度ほど北による。

残存部分は焼成部の上部であったようであるが、床面が高い熱を受けて非常に良く焼け、青灰色還元層となっている。傾斜角度は15~30度ほどある。

出土遺物 須恵器の壺A、壺B、蓋、甕、がある。

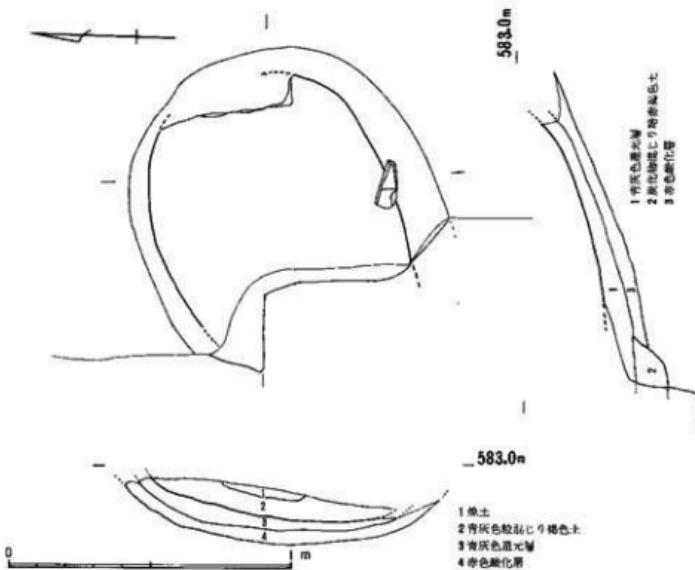


図13 上の山2号窯址実測図

壺Aは16点(150g)の破片が出土している。小片で全体の形を知ることができるものはない。

壺Bは3点の破片が出土している。第31図12は2号窯で器形を知ることができた唯一のものである。口径12cm・器高3.4cmで法量は1号窯の壺BIIIの範囲に重なる。

底部は糸切り後周辺を回転ヘラ削りをしており、中央部に糸切り痕が残る。

蓋は2点(50g)出土している。

甕は9点(170g)の破片が出土している。表面に平行叩き目を持つ。

### 3 成果と課題

1号窯址床面出土の遺物は、図示したものでは第30図4・5・9の壺A、11・12・20・23・25・26の壺B、27・29・31の甕、第31図3・4の甕、6・8の短頸甕である。

しかし、他の遺物との大きな差は認め難く同一時期の遺物として一括できるものと考える。

さて、1号窯址の出土遺物の特徴は、すでに述べたが壺にしほってまとめてみると、壺Aは底部糸切り未調整のものが主であり、ヘラケズリを加えるもが少数あること、壺Bは底部全体をヘラ削りするものと中央部に糸切り痕を残すものはほぼ1:2の割合であること、身の深い法量の壺があることなどを指摘できる。

こうした点を他の事例と比較し出土遺物の時間的な位置を検討してみると、上記の特徴は、お



挿図14 平出遺跡群周辺の古窯址分布図

おむね長野県史でいう平安時代Ⅰ期<sup>[4]</sup>、松本平の5期<sup>[5]</sup>、吉田川西遺跡のS B258<sup>[6]</sup>段階に相当するといえる。近接する前高山古窯址群の遺物<sup>[7]</sup>も平安時代Ⅰ期に属す。

こうしたことから、上の山窯址の2基の窯の操業時期を9世紀の前半と位置付けておきたい。

2基の窯は出土時期に大きな差はなく、ほぼ同時期に操業していたのではないかと思われる。前高山古窯址群においても2基3群が調査されており、あるいは2基をひとつの単位として生産することがあったのかもしれない。

北信地方では昭和40年代の後半から窯址の調査はほとんど行われていなかったが、近年高速道の建設に伴う事前調査などにより、中野市や豊田村での調査があいついでいる。本窯址の周辺でも、これまで知られていなかった窯がいくつか発見されているので<sup>[8]</sup>、今後の研究によって明らかにされることが多いものと思われる<sup>[9]</sup>。

#### 註

- 1 笹沢 浩 上水内郡誌歴史編 P180・195~204 上水内郡誌編集委員会 1976  
後沢 浩・原田勝美 長野県下出土の須恵器(上)・(下)信濃26-9・11 1974
- 2 半札村古町の陶芸家朝比奈克文氏の実験によると遺跡周辺からとれる黄白色粘質土および灰白色粘質土は1,150度はで変形し始めるのことである。
- 3 笹沢 浩 「凸帯付四耳壺考」 長野県考古学会51 1986
- 4 笹沢 浩 長野県史 考古資料編 一巻(4) P268 1988
- 5 小平和夫 「古代の上器」「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1—」 P97~ 1990
- 6 原 明芳 「吉田川西遺跡における食器の変容」「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書—塙尻市内その2—」 P300~1989
- 7 笹沢 浩 上水内郡誌歴史編 P199~201 上水内郡誌編集委員会 1976  
笠沢 浩 長野県史 考古資料編 一巻(4) P323 1988  
後沢 浩 「信濃における奈良時代を中心とした土器編年」 長野県考古学会誌55・56 P21・22 1987
- 8 調査終了後の現地調査によって、少なくとも新たに5ヶ所で窯址を確認している。時代的には本窯址と大きな差がない時期のものが多いが、さらにさかのほりそうな遺物も確認されている。今回、これらの遺物については十分検討することができなかつたが、半札村誌の編纂にも関係しているのでその中で詳細を検討できればと考えている。なお、本図に示した名称は仮称で、詳細な調査を待って変更することがあることを承知願いたい。
- 9 註1 笹沢・原田論文(信濃26-11、P61)で茶臼峯九号窯と六号窯の段階の窯址が存在するのではないかとの指摘がある。

## 第6章 平出三本松遺跡

### 第1節 調査の概要

#### 1 遺跡の概要

三本松遺跡は大字平出に所在する行人塚の通称で、字行人塚2952番地に所在する。この行人塚は字地名の発祥の塚である。延宝7年（1679）の平山村畠方検地帳にも行人塚耕地名が記載されている。塚の中央には終戦直後まで大きな3本の老松が植えられていたのでこの地を通称三本松と呼んでいたものである。

一般的には行人塚は「山伏の一種とみてよく、彼らは一般の人々と同じような社会生活をし、多くはこれを世襲とし、妻帯もしていたといわれ、下層農民に対し加持祈禱などしながら暮らしていたようです。したがって行人塚は、これらの人々の働きかけによって塚が営まれたといえそうです。」[1]のことである。

一方『中郷村史』では「修驗道人の墳墓か又は旅する人達の不慮の死に対する供養地である」とされている。道路に面して高さ48cmの墓碑があり、碑面に「坂元幽雲幽妙靈 常陸国画工 弘化三年（1846）正月六日」と刻されている。幽雲は男、幽妙は女で、常陸國（茨城県）の絵師の墓である。夫婦であろうか。また傍らに寛政10年（1798）10月建立の馬頭觀世音（高さ45cm）もある。ここは慶長16年（1611）全面開通した北国街道端であること等を考えると、不幸にも旅に死した人の埋葬地であった可能性が強い。

塚の一角に昭和36年7月1日、一茶親子別れの地として一茶句碑が建立された。これは一茶の『父の終焉日記』の「卯の下刻、車札てふ駅にいたるに、こはそのかみ一茶江戸へおもよけるの日、父の翁見送り給ひし里なりけるが…」にちなんだものであるが、ここが一茶父子別れの地としては若干無理がある。

字行人塚に接して北側の大字牟礼字本塚にいわゆる本塚がある。直径9m・高さ1.8m程である。古老は境塚か旗塚であるといっている。またその近く四ツ屋集落には北国街道の左右に2箇の一里塚がある。延宝6年室飯村畠方検地帳には二ツ塚として記載されている。その他、四ツ屋集落内には今塚はないが一つ塚の耕地名が残っている。とにかく、行人塚周辺は塚の多い地域である。

（矢野恒雄）

#### 2 調査の概要

西浦遺跡の調査範囲を確認するため現地に出かけたさい、県道長野・荒瀬原線の括幅にともない行人塚の一部が削りとられているのを知った。

塚へ立ち寄ってみたところ、ローム層中に黒土の落ち込みが見つかった。その中に人骨と思わ

れる骨の一部も見えたので、ただちに、村教育委員会に連絡し、所定の手続きをとつてもらい、緊急調査を実施した。

塚は径6m、高さ1mほどの円墳状をしており、「三本松」といわれるよう�数本の松の木とともに一茶の句碑と弘化3年銘の墓塔等が存在している（第32図）。

今回の調査では、塚の裾の部分を調査しただけであるが、塚の内部構造や層序をつかむことはできなかった。

調査地点における層序はI層表土（5~10cm）、II層黒土層（10~20cm）、III層黒褐色土層（40cm）、IV層赤褐色粘質土（ローム層）となっていた。

調査の結果、江戸時代のものと考えられる二基の土葬墓（一基には寛永通寶を伴う）とそれぞれの墓から人骨が各一体分検出された。

土葬墓は、III層及びIV層を掘り込んでおり、容易に検出できたが一部すでに破壊され全体の三分の一程度を調査できたのみである。

県道の拡幅にともない、行人塚の一部に歩道がかかることになったのは承知していたが、協議により塚の部分は盛土によって保存されることになっていた。しかし、盛土部分になるとされた部分も基礎工事のために一部影響を受ける結果となってしまったのは残念なことであった。

## 第2節 調査の結果

### 1 江戸時代の遺構と遺物

#### (1) 土葬墓

##### ① 1号墓（第32図）

南に検出したものを1号墓とした。墓壙の西半分程が検出できた。墓壙はIII層及び硬いIV層を60cmほど掘り込んでいる。平面形は長楕円状であり、現存部は120cm×40cmの大きさである。

人骨は背を南に向けて足を折り曲げて座り、うつぶせになった状況で検出された。頭骨は北壁際に顔面を下にした状態で見つかっている。

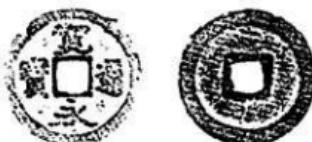
##### ② 2号墓（第32図）

1号墓の北側に1mほど離れて検出した。やはり、墓壙の西半分程が検出できのみである。墓壙はIII層とIV層の上面をわずか掘り込んだだけで、検出できた深さは40cmほどである。平面形は長楕円状であり、現存部は100cm×40cmの大きさである。

1号墓と比べるとやや小型で浅い造りである。

人骨は背を南に向けて足を折り曲げて座りあおむけになった状況で検出された。

頭骨は南壁際に顔面を上に向かっていた状態で見つかっている。



挿図15 二号墓出土遺物（ノイ）

出土遺物 人骨の左脇（西側）から寛永通寶が1枚出土している（挿図14）。

## (2) 出土人骨

2体の人骨は、信州大学の西澤寿晃氏に観察いただいた。2体とも保存が悪く、計測による判定は困難であるが観察的な結果から、1号人骨については男性。2号人骨については、「1号人骨と極めて相似した形質であり、特に四肢骨の大きさなどは性差を明瞭に指摘できないが、頭蓋骨の大きさ、特に下顎骨や歯の大きさなどは、あえていえば女性的であると判断できる程度に微妙である。女性としてもかなりしっかりした骨格を有するもの」とのご教示をいただいた。

## 2 成果と課題

2基の墓の人骨が棺桶に納められていたものか、地中に直に葬られたものか直接の手がかりはなかったが、墓壙の大きさや埋葬姿勢から棺桶に納められていたものと考えている。

土壙墓の人骨は当初、1号墓の人骨が男性、2号墓の人骨が女性と推測した。

それは、現在位置が若干移動しているが、検出された土壙墓の上にかつて「坂元幽雲幽妙堂 常陸国画工 弘化三午年正月六日」とかかれた墓石があり、夫婦、あるいは兄・妹の墓と考えられたこと<sup>[2]</sup>。また、埋葬方法が1号人骨が正座しうつぶせに葬られ、2号人骨が同様にあおむけに葬られていたことが民俗例と合致することも判断材料であった。

当地で土葬を行っていた当時の埋葬方法については、発掘にあたられた村文化財専門委員の原田茂氏に教示を得た。それによると男性も女性も膝をおおりまげ、合掌した格好で体が動かないように綱で縛り納棺するが、墓穴に納めるさい、必ず棺を男性はうつぶせになるように、女性はあおむけになるよう動かして埋葬したことである<sup>[3]</sup>。

男女によって棺に納める品に違いのあることはこれまでよく知られているが<sup>[4]</sup>本例のように男女によって埋葬姿勢に相違があるという事例はこれまでのところ確認していない。十分資料にあたってないので今後確認されるかもしれないが、これまであまり注意が払われていなかったようである。

群馬県上野村白井では「埋葬したうえに籠カゴを女の場合には外皮を上に、男の場合は外皮を地に付けて石ふせす。」<sup>[5]</sup>例が見られる。埋葬後ではあるが、男女の違いをはっきり区別している点、埋葬姿勢にも差が見られたのかもしれないが、やはり、その点までは注意して調査されていない。今後の調査をまつことにしたい。

今回は部分的な調査であったが、行人塚の性格や当地の埋葬方法などに新しい知見を加えることができたように思われる。

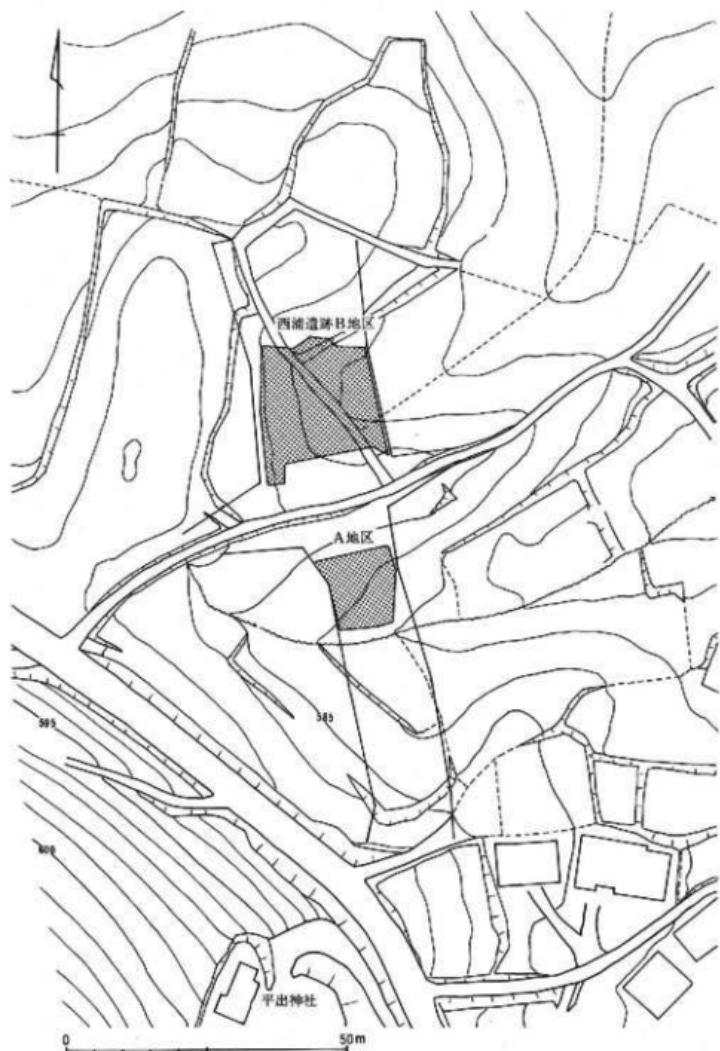
### 註・参考文献

1 松崎岩夫 「長野県の地名その由来」 P567 信濃古代文化研究所 1991

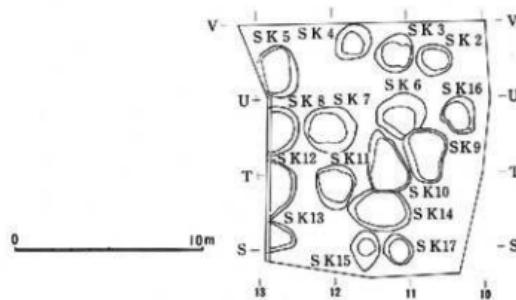
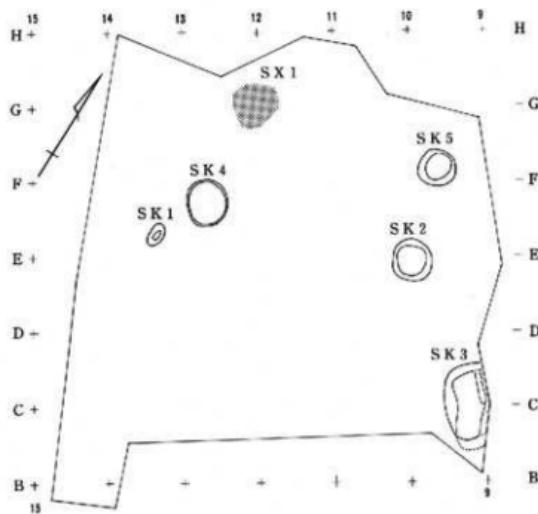
2 「牛札村の石像文化時」 P18 牛札村教育委員会 1988 及び矢野恒雄氏の教示による

3 火葬をする場合もこの姿勢をとったという。牛札村平出 原田茂氏談

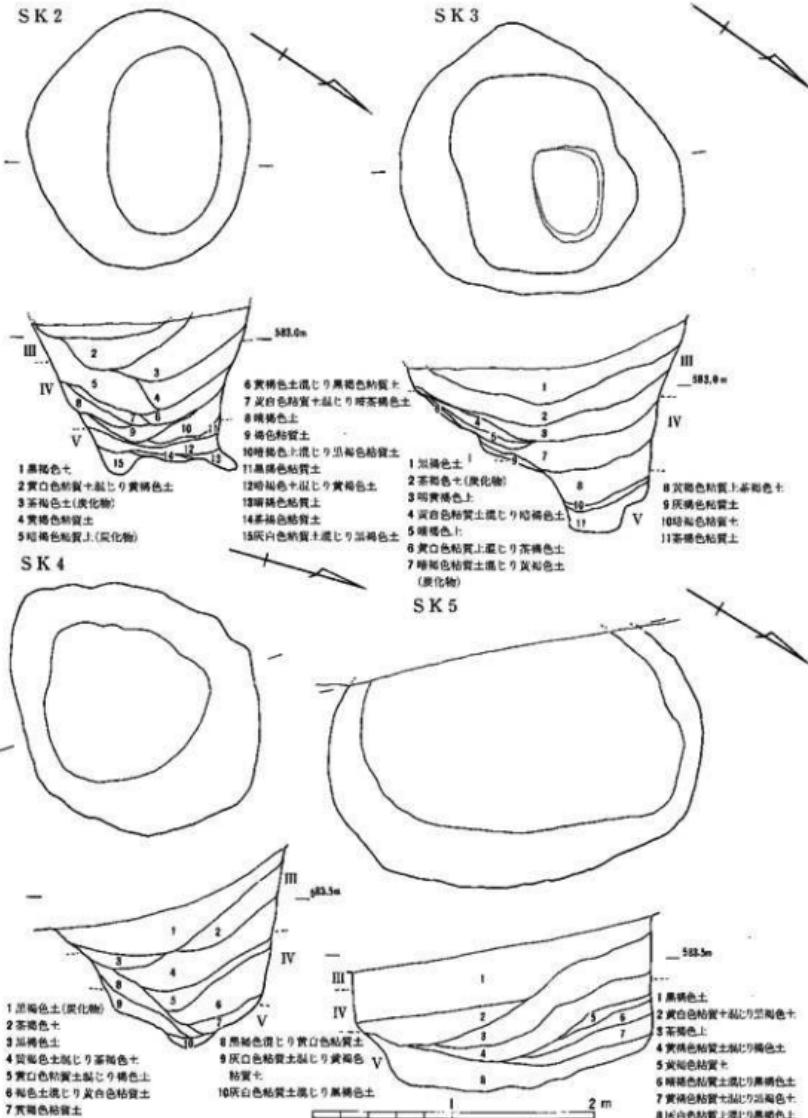
- 4 長野県史 民俗編第五巻総説 I P105 長野県史刊行会 1991
- 5 県境を越えて第二集（県外調査報告書 東信関係）P157 長野県史刊行会 1981



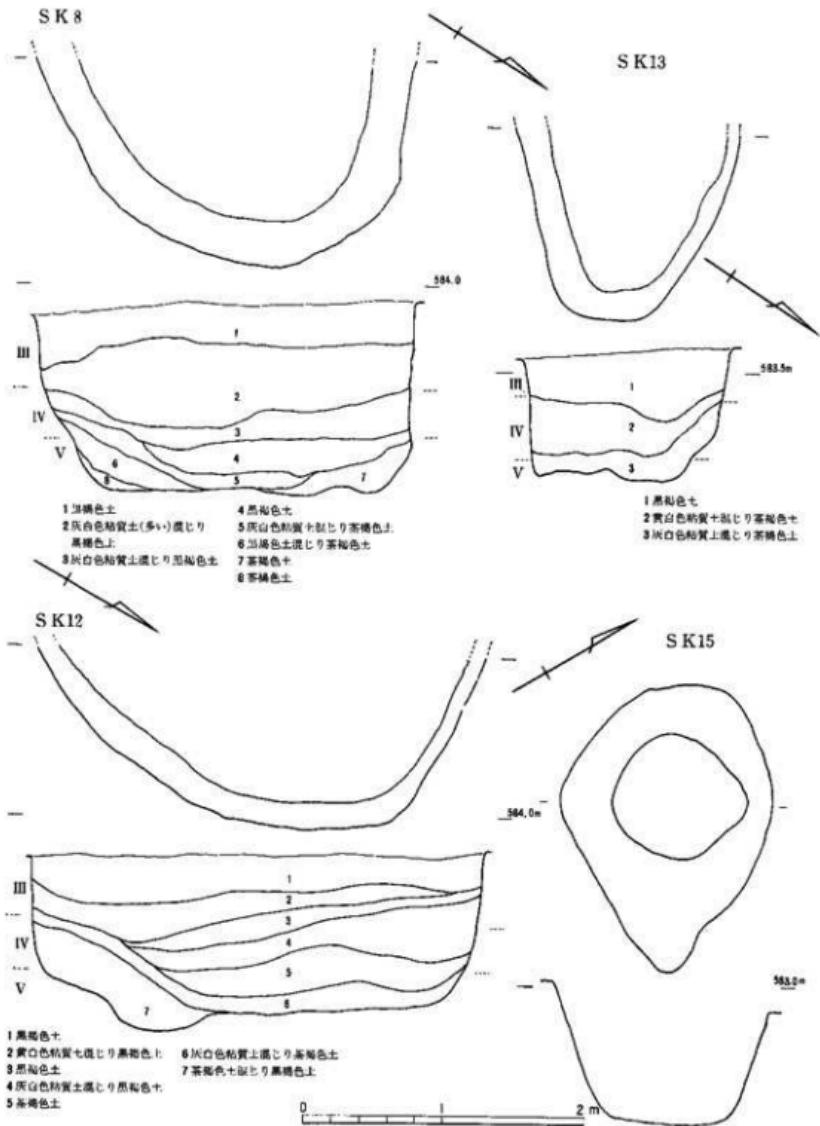
第1図 西浦遺跡地形図



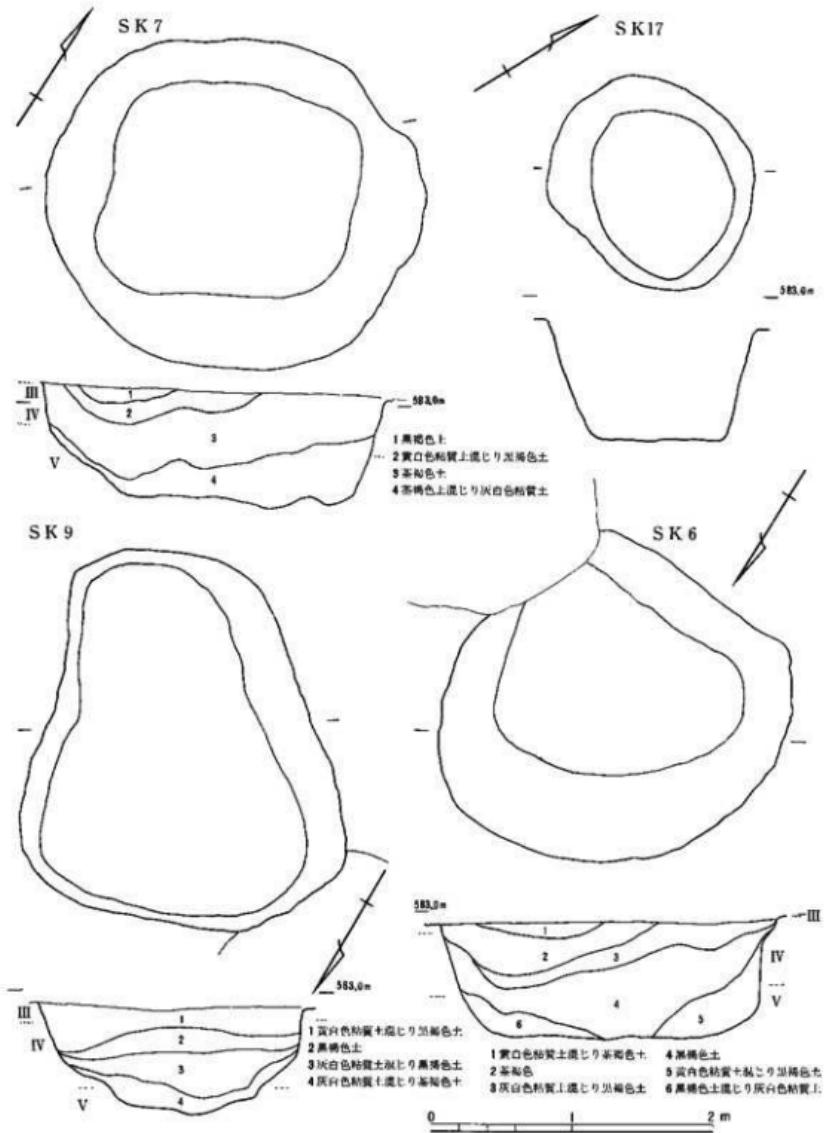
第2図 西浦遺跡遺構分布図



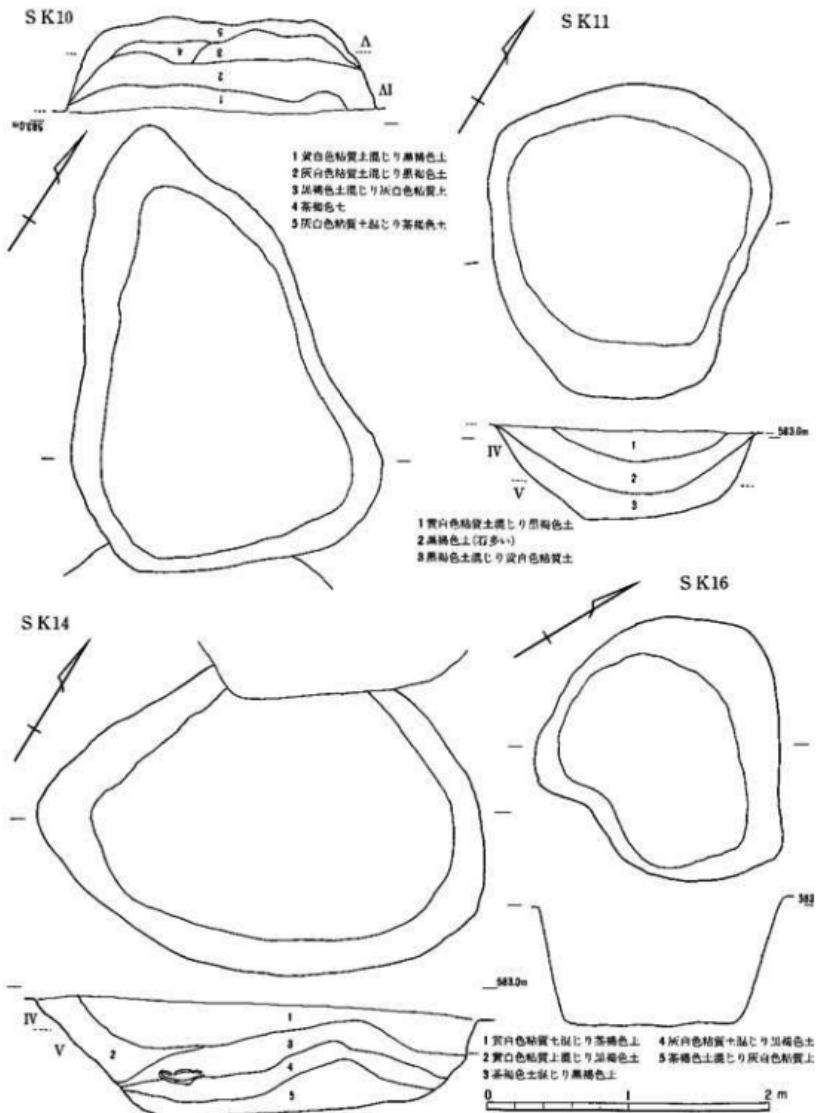
第3図 西浦遺跡A地区土坑実測図



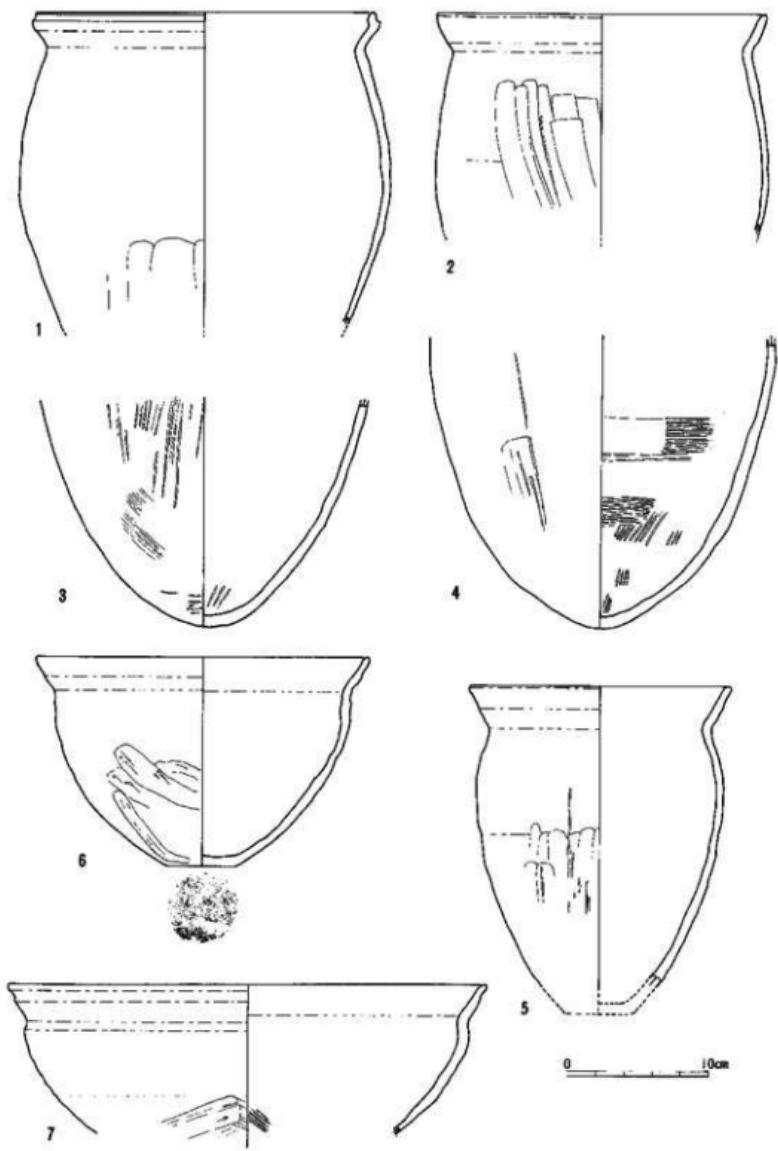
第4図 西浦遺跡A地区土坑実測図



第5図 西浦遺跡A地区土坑実測図

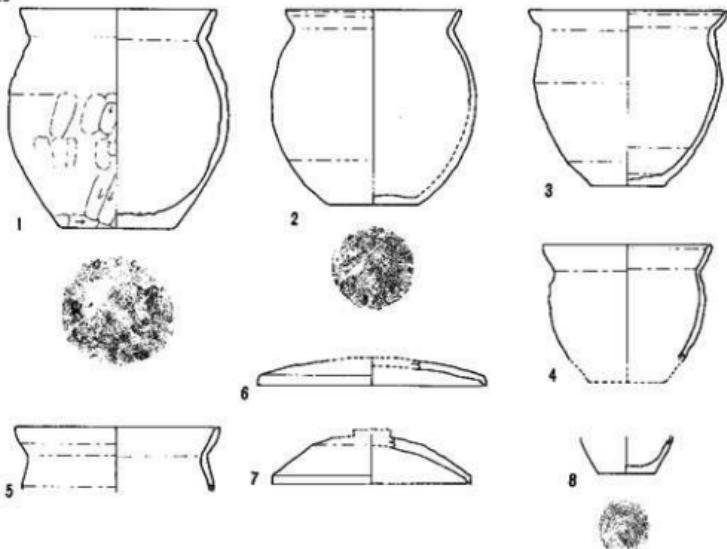


第6図 西浦遺跡A地区土坑実測図

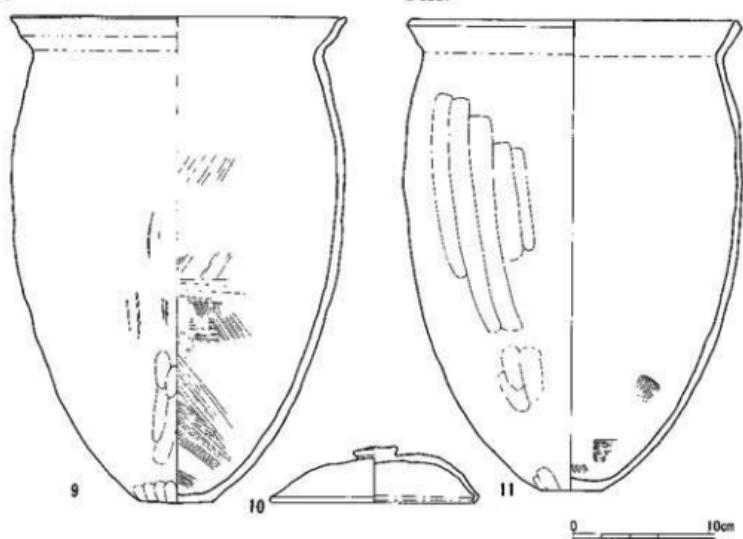


第7図 西満遺跡A地区SK 16出土遺物実測図

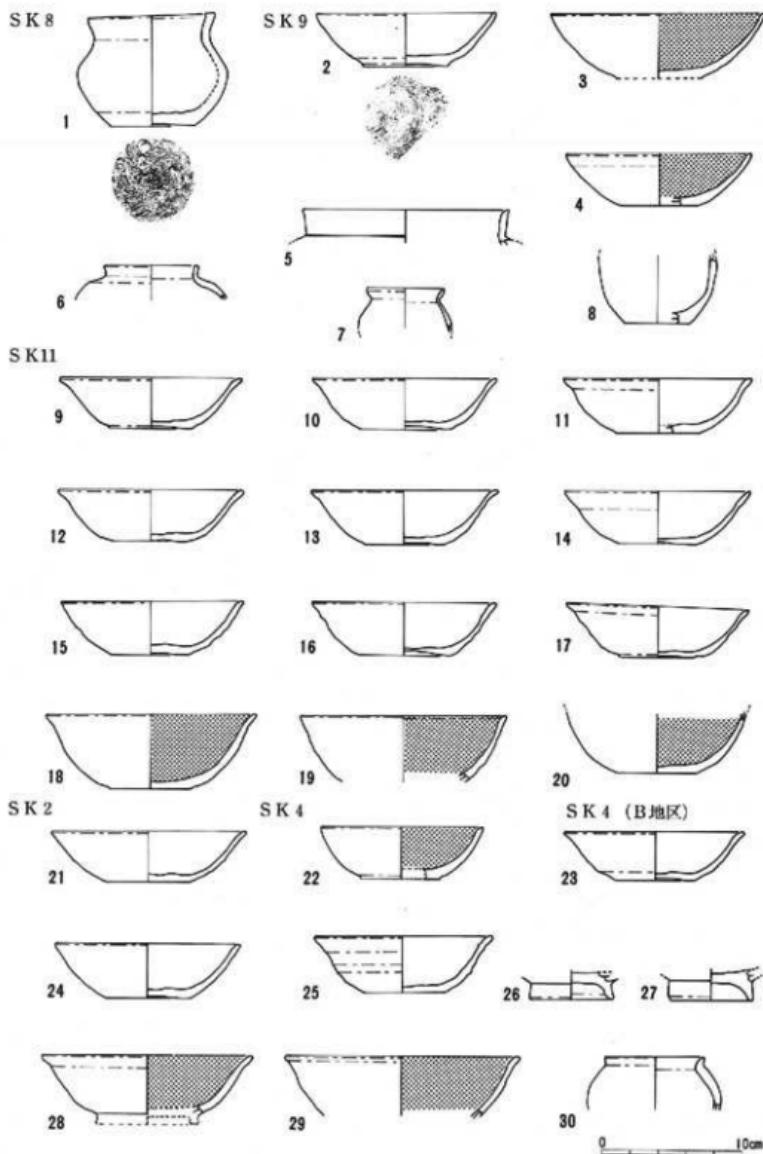
SK16



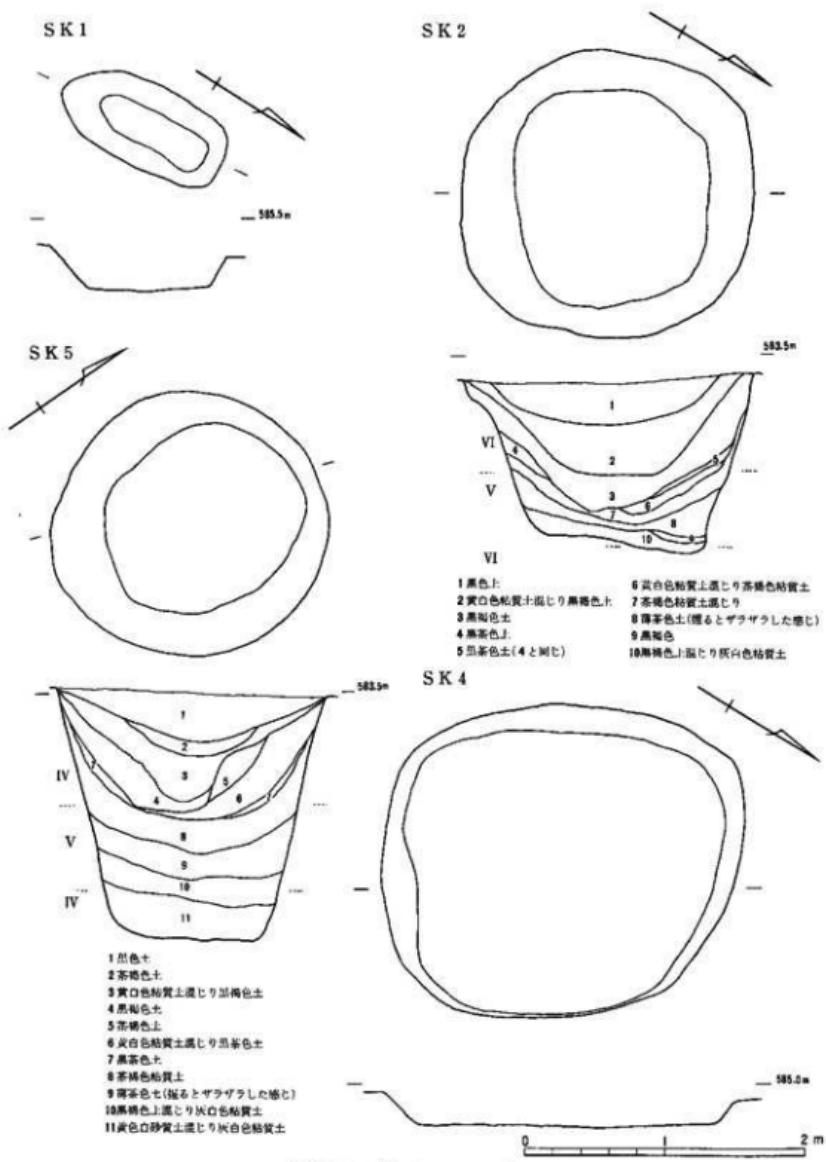
SK14



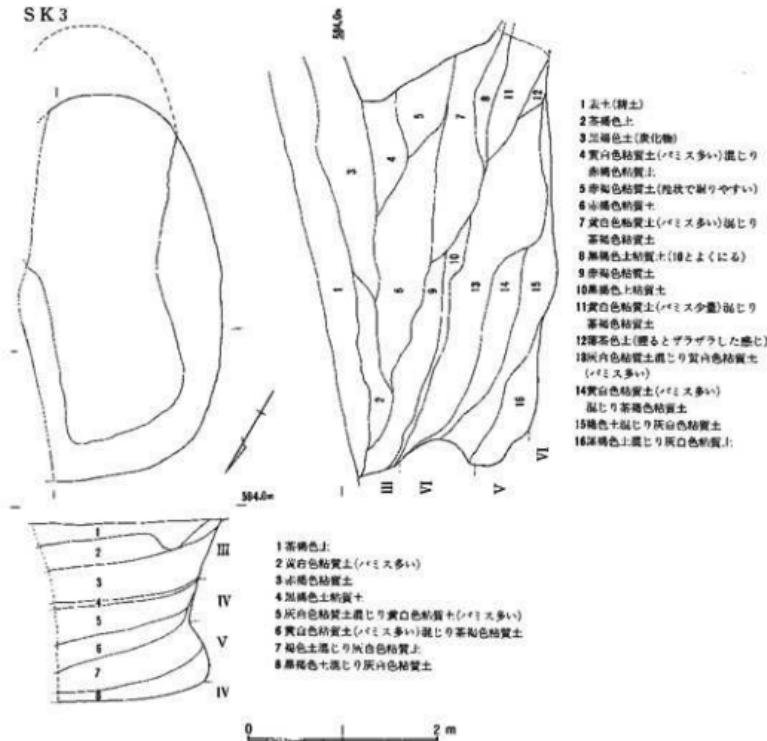
第8図 西浦遺跡A地区土坑出土遺物実測図



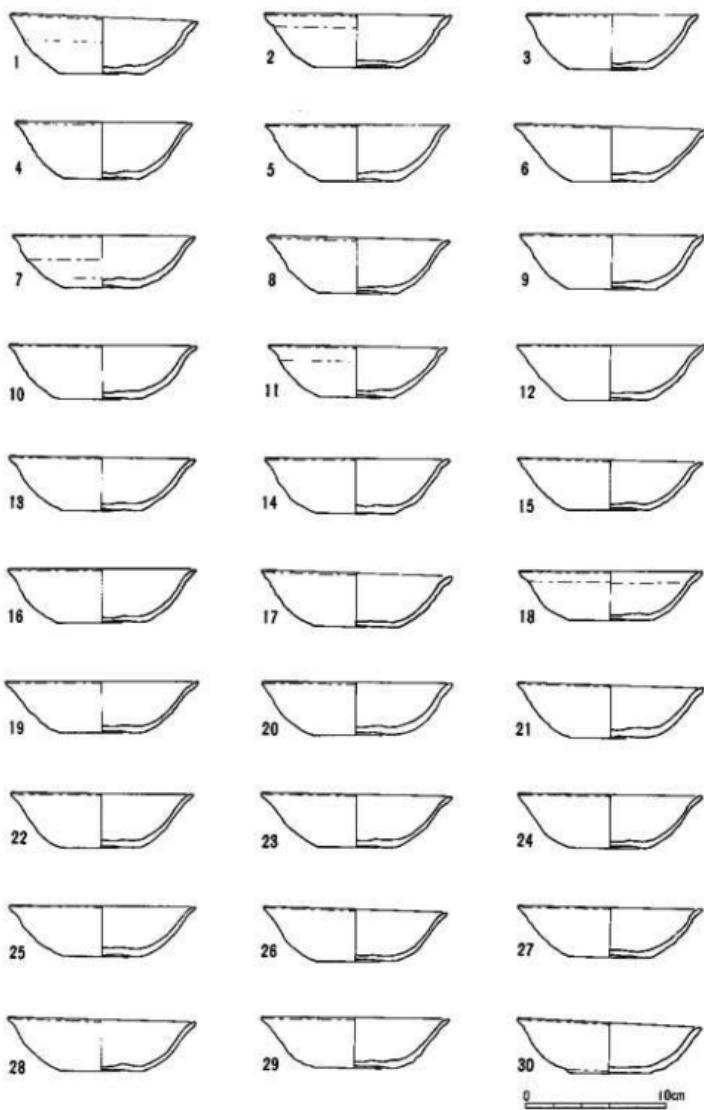
第9図 西浦遺跡A地区土坑出土遺物実測図 (23~30はB地区SK 4の遺物)



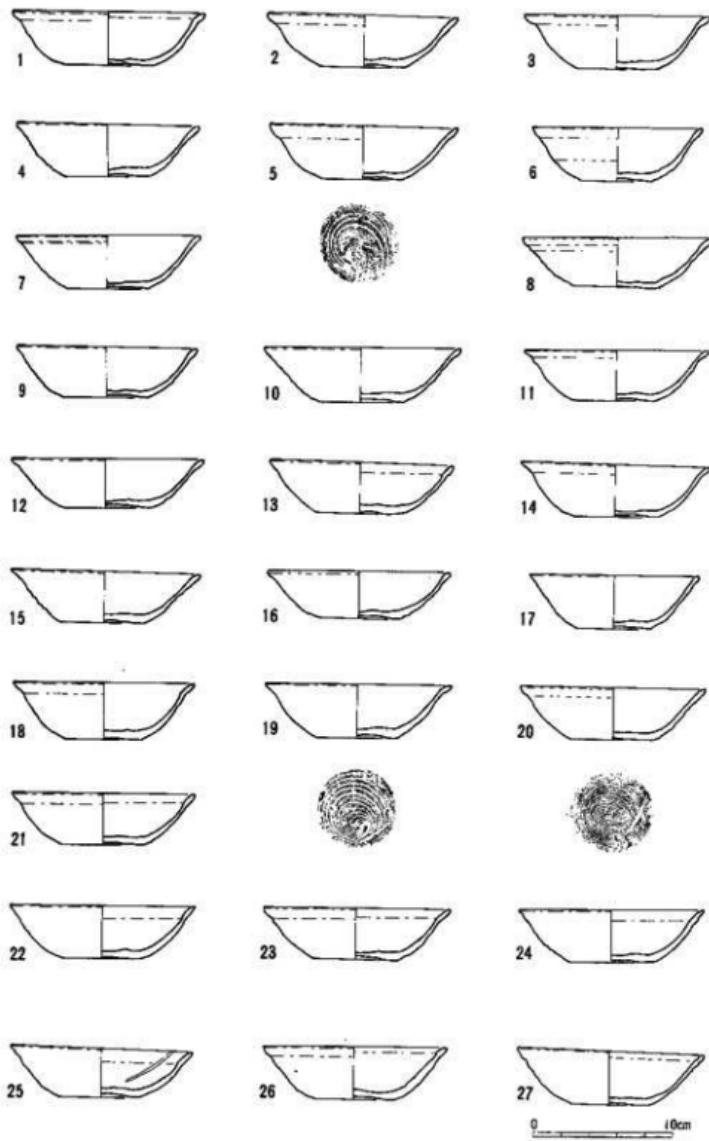
第10図 西浦遺跡B地区土坑実測図



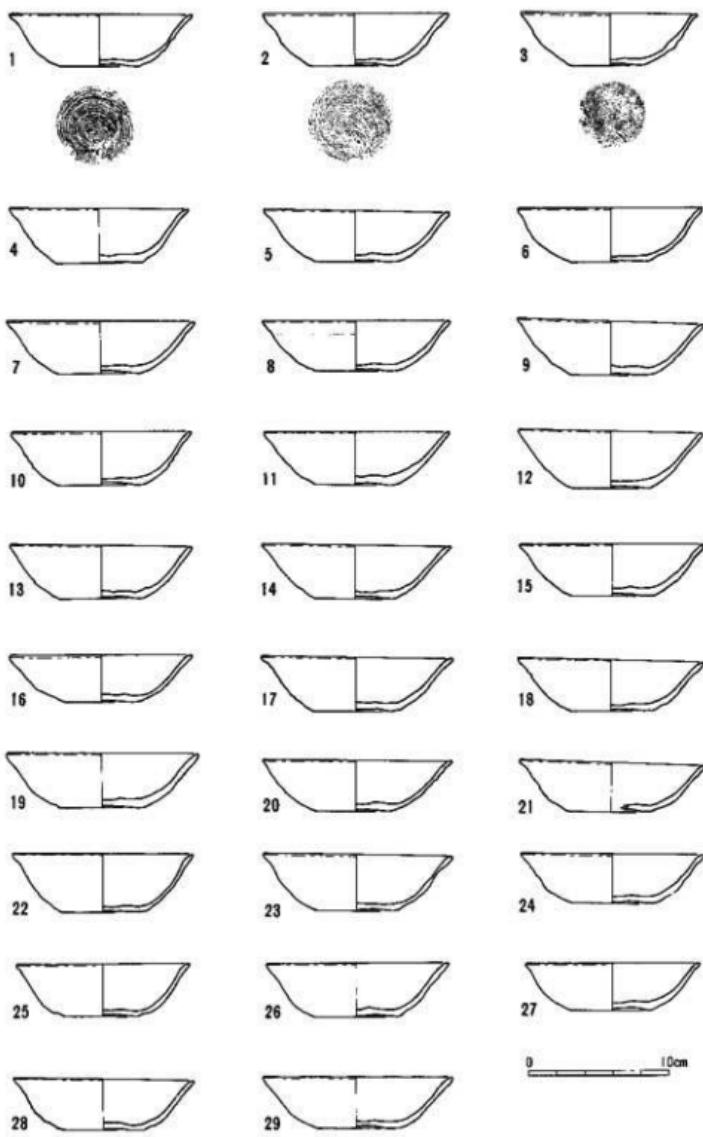
第II圖 西浦遺跡B地区土坑(SK 3) 実測図



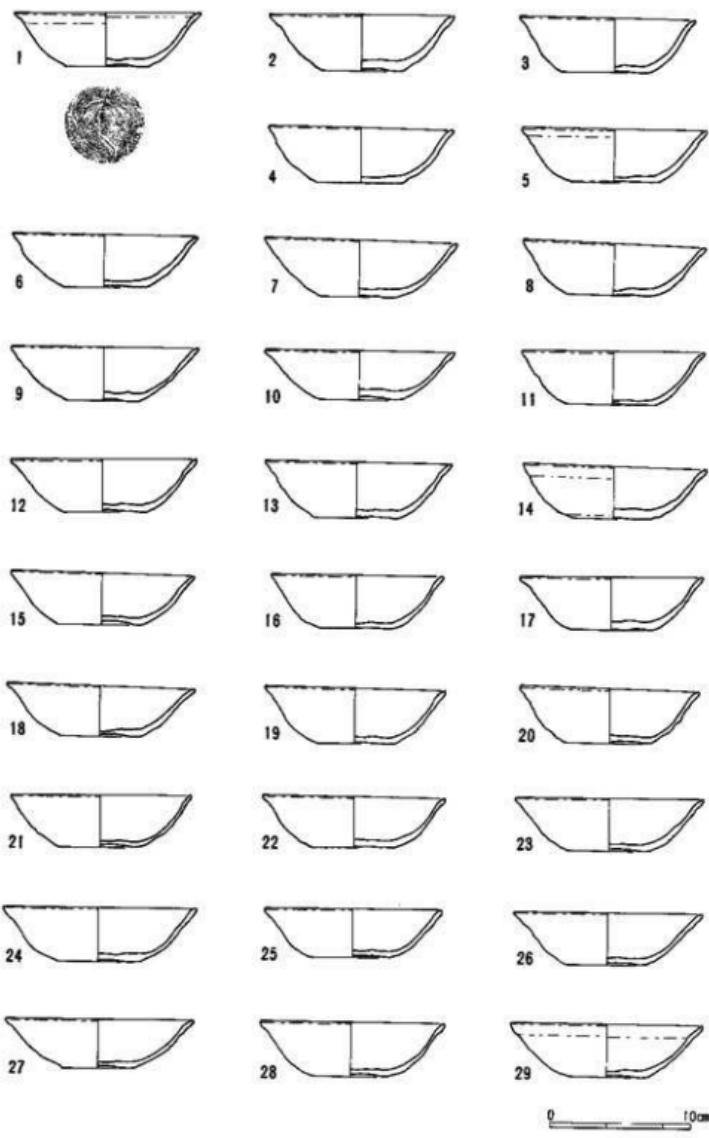
第12図 西浦遺跡B地区 S K 2 出土遺物実測図



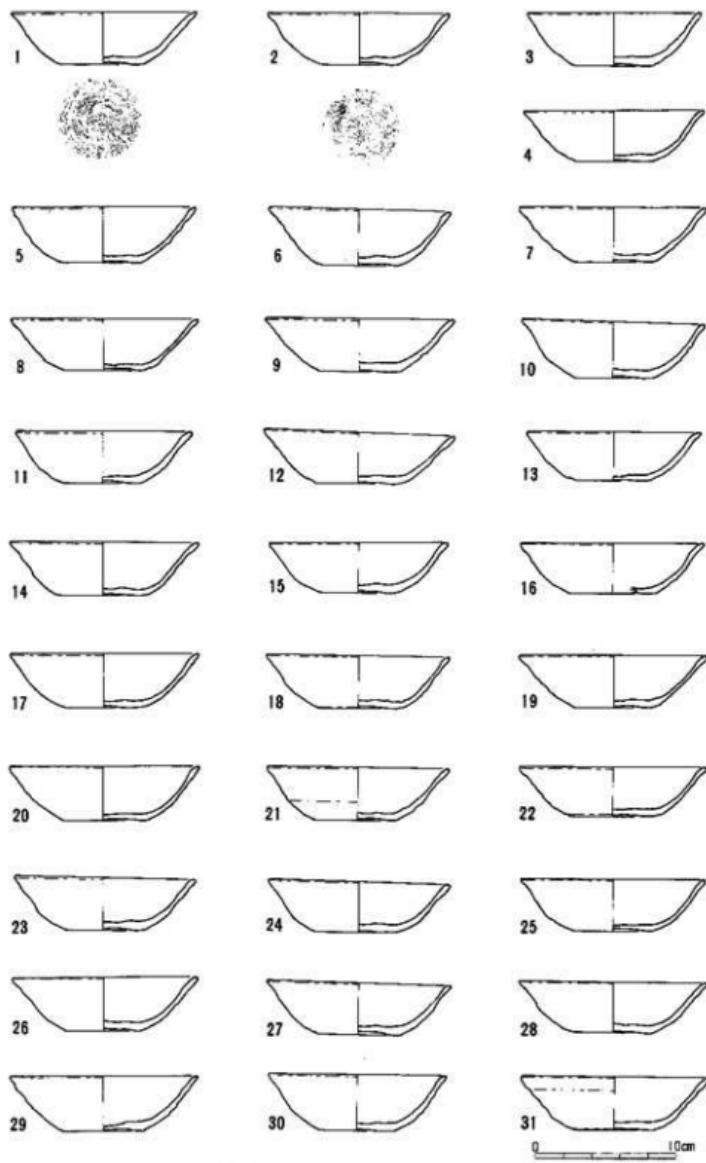
第13図 西浦遺跡B地区SK2出土遺物実測図



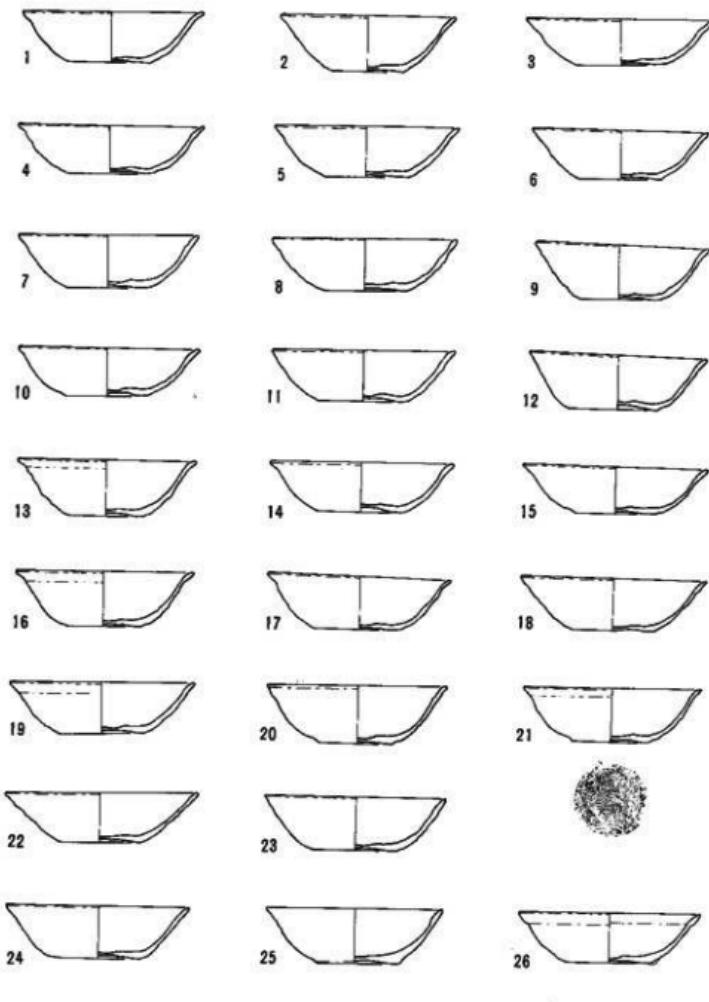
第14図 西浦遺跡B地区SK2出土遺物実測図



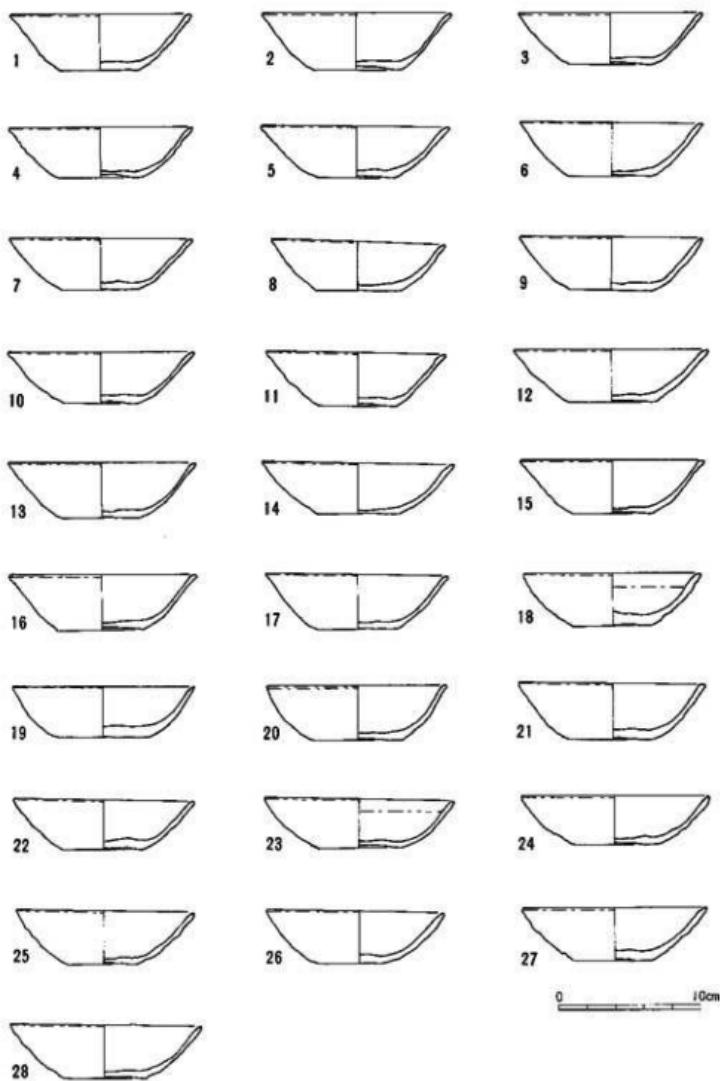
第15図 西浦遺跡B地区SK2出土遺物実測図



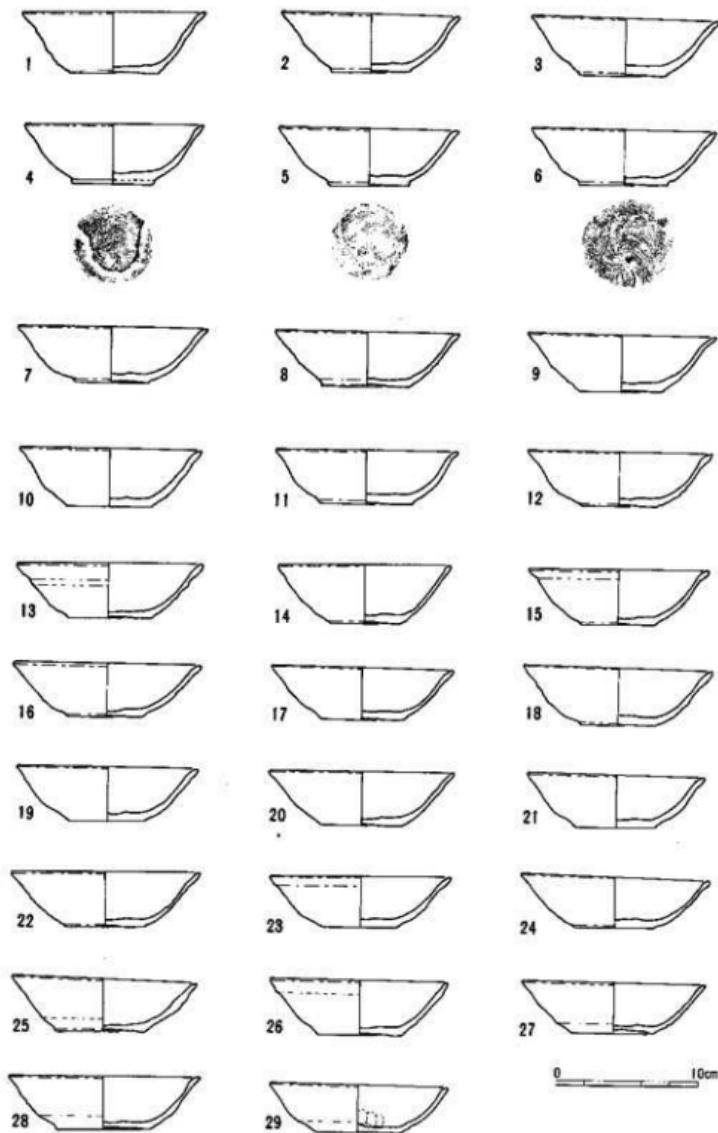
第16図 西浦遺跡B地区SK2出土遺物実測図



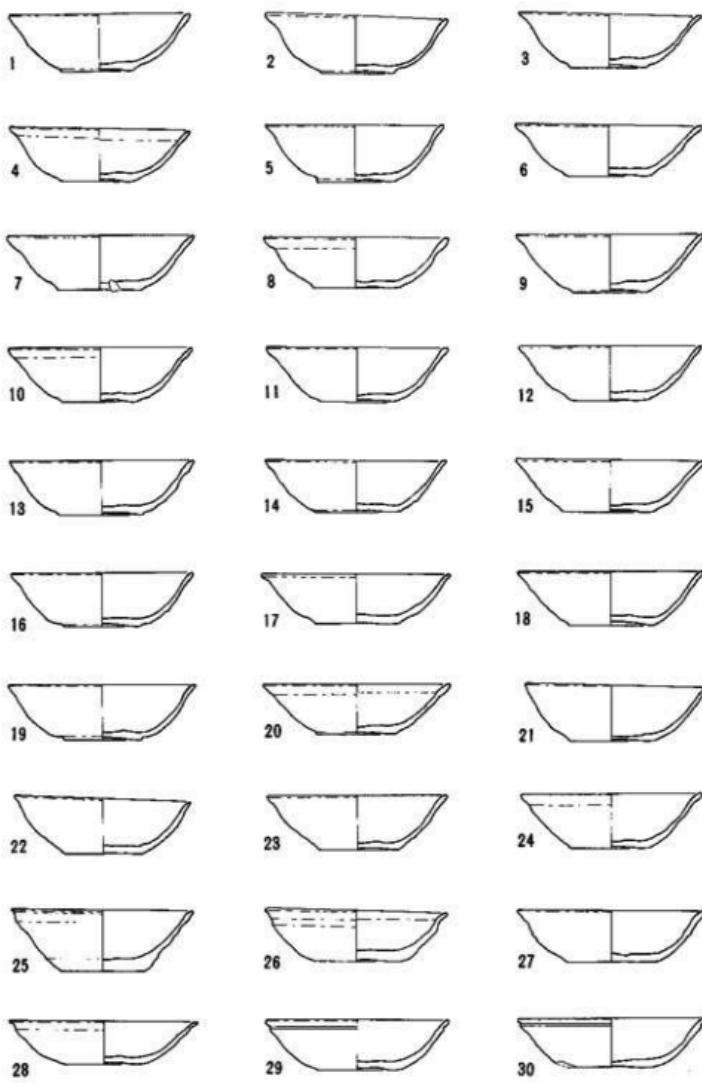
第17図 西浦遺跡B地区SK2出土遺物実測図



第18图 西浦遗址B地区SK 2出土遗物实测图

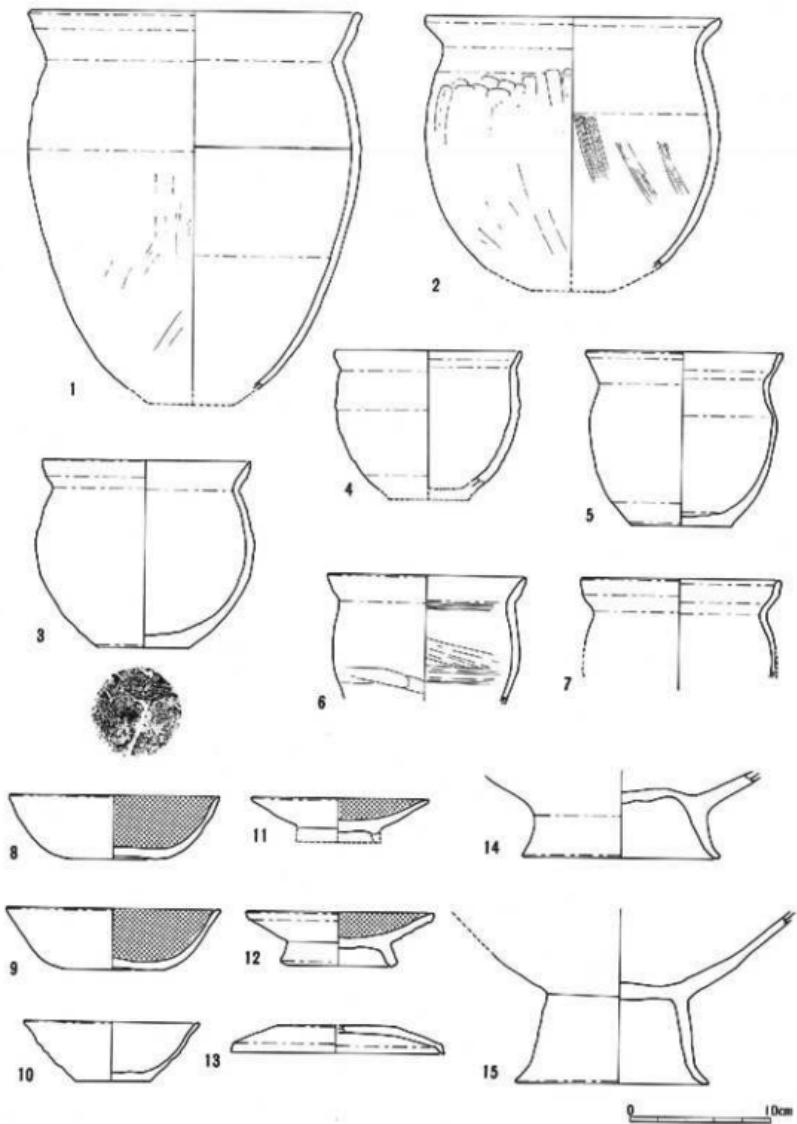


第19図 西溝遺跡B地区SK2出土遺物実測図

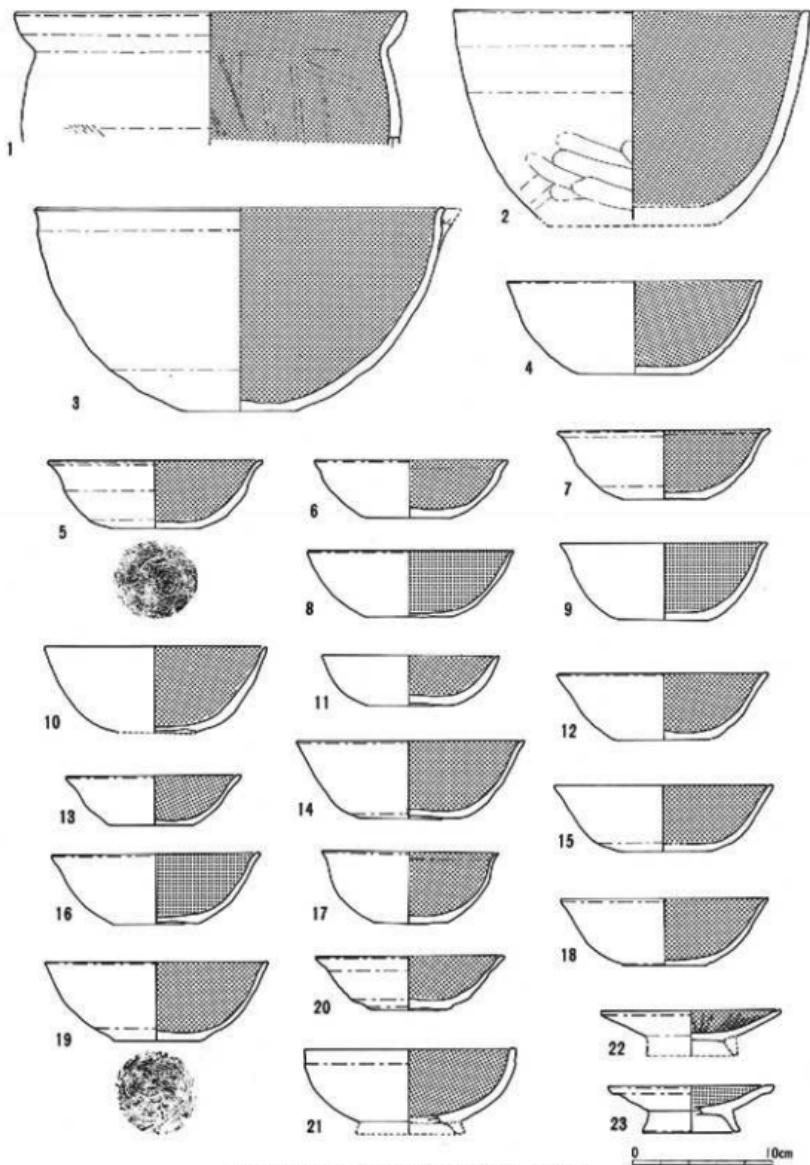


0 10cm

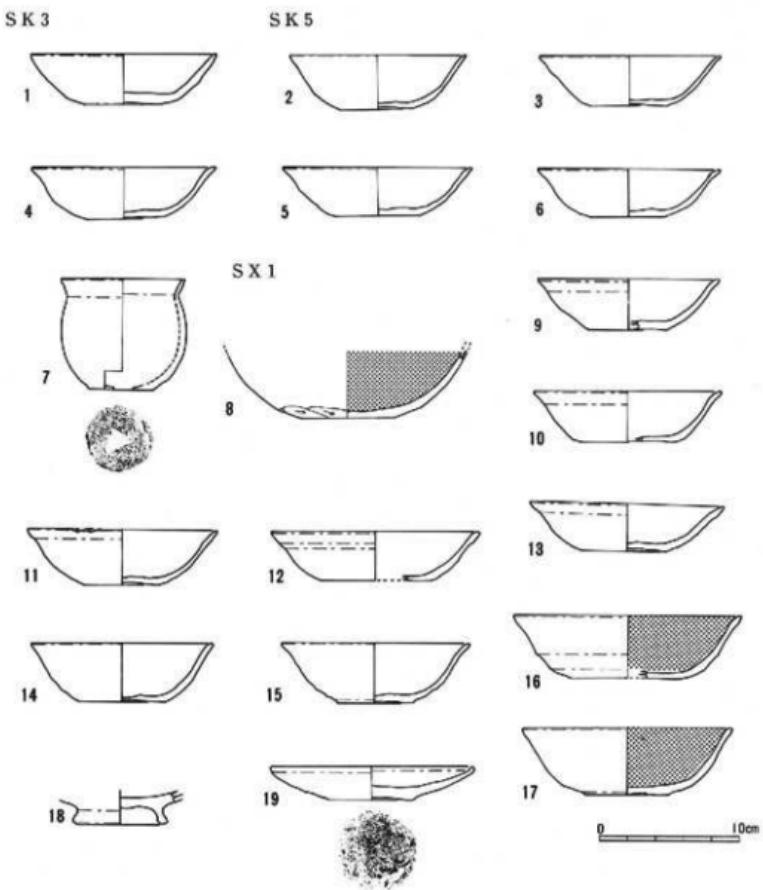
第20図 西浦遺跡B地区SK2出土遺物実測図



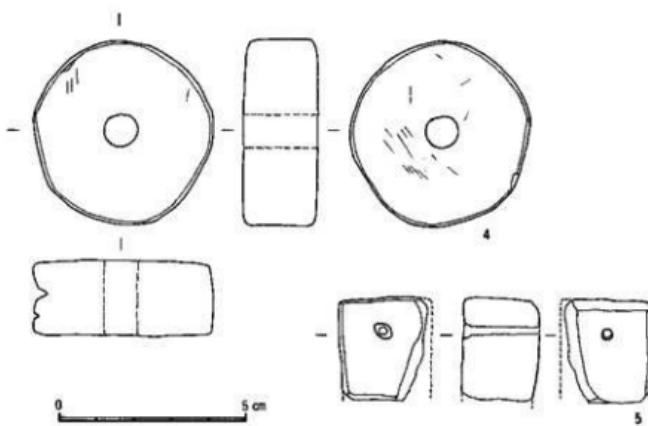
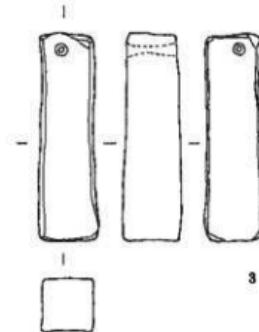
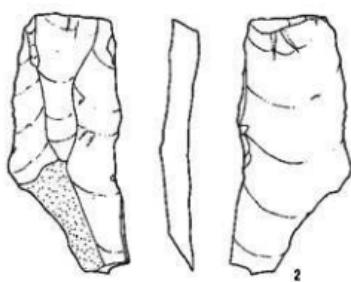
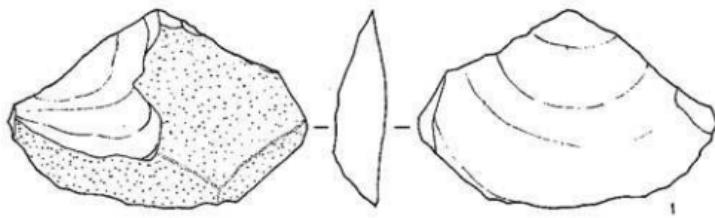
第21図 西浦遺跡B地区SK 2出土遺物実測図



第22図 西浦遺跡B地区SK2出土遺物実測図

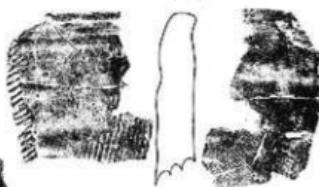
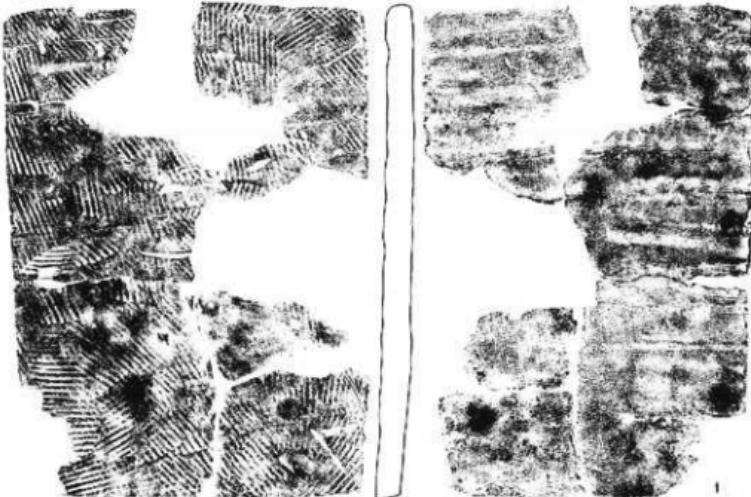


第23図 西浦遺跡B地区出土遺物実測図



第24図 西浦遺跡出土石製品実測図

S K 2



2



3

4



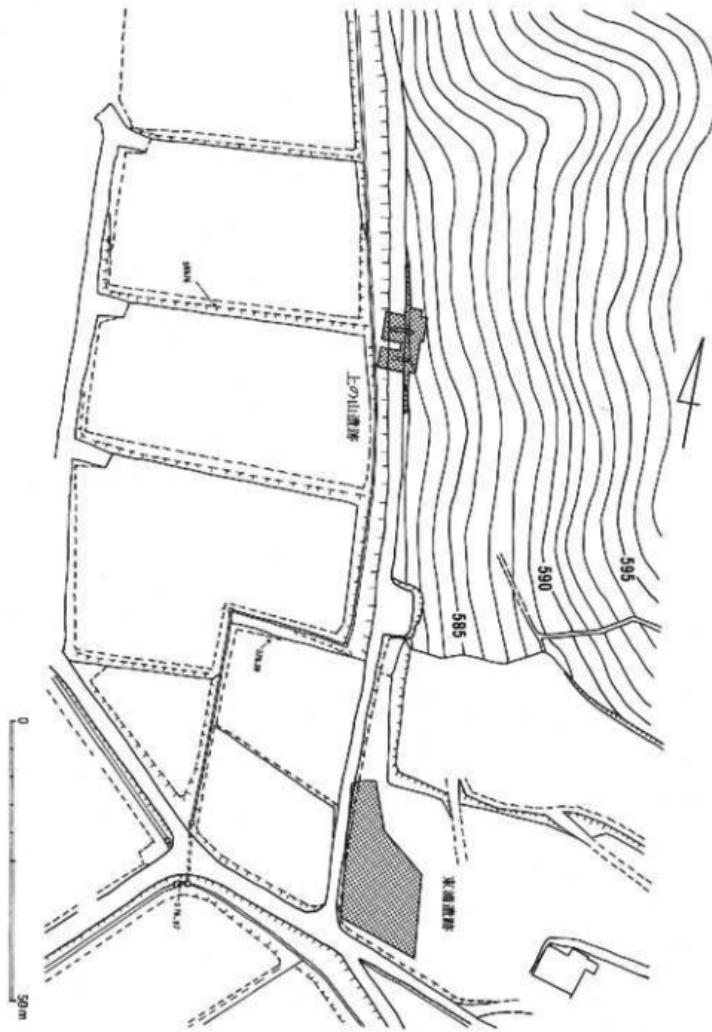
5



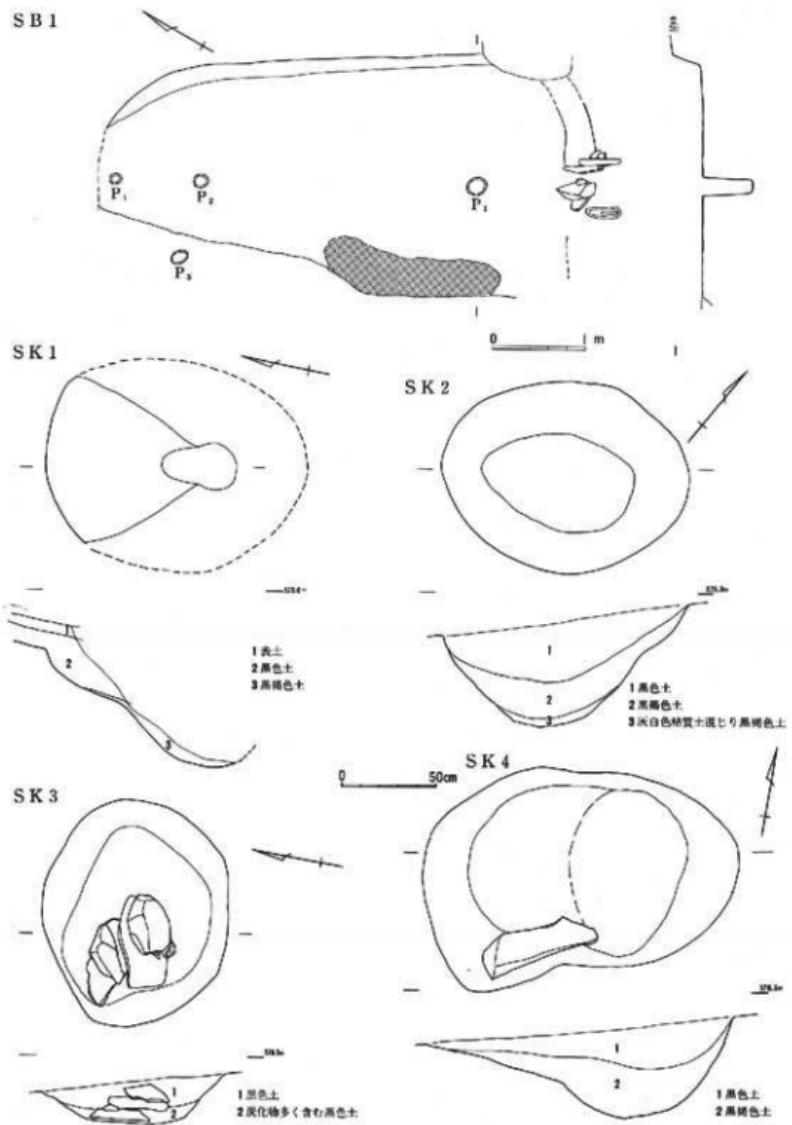
6

0 5 10cm

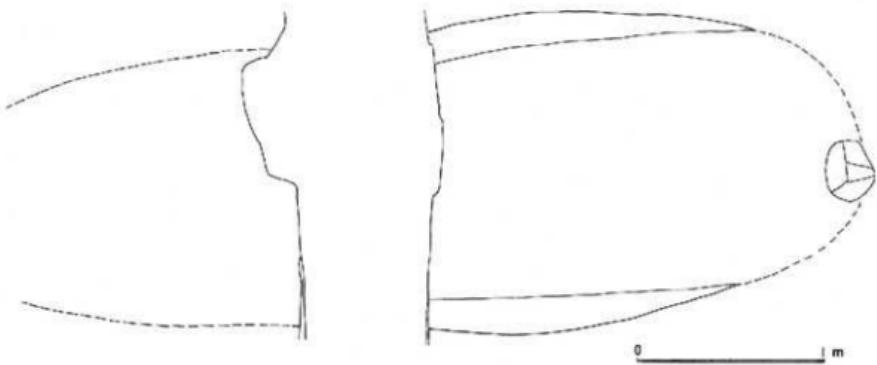
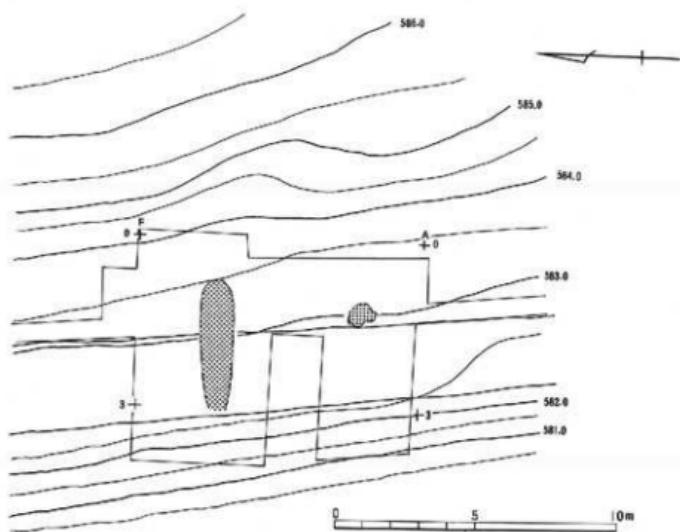
第25図 西浦遺跡出土瓦拓影



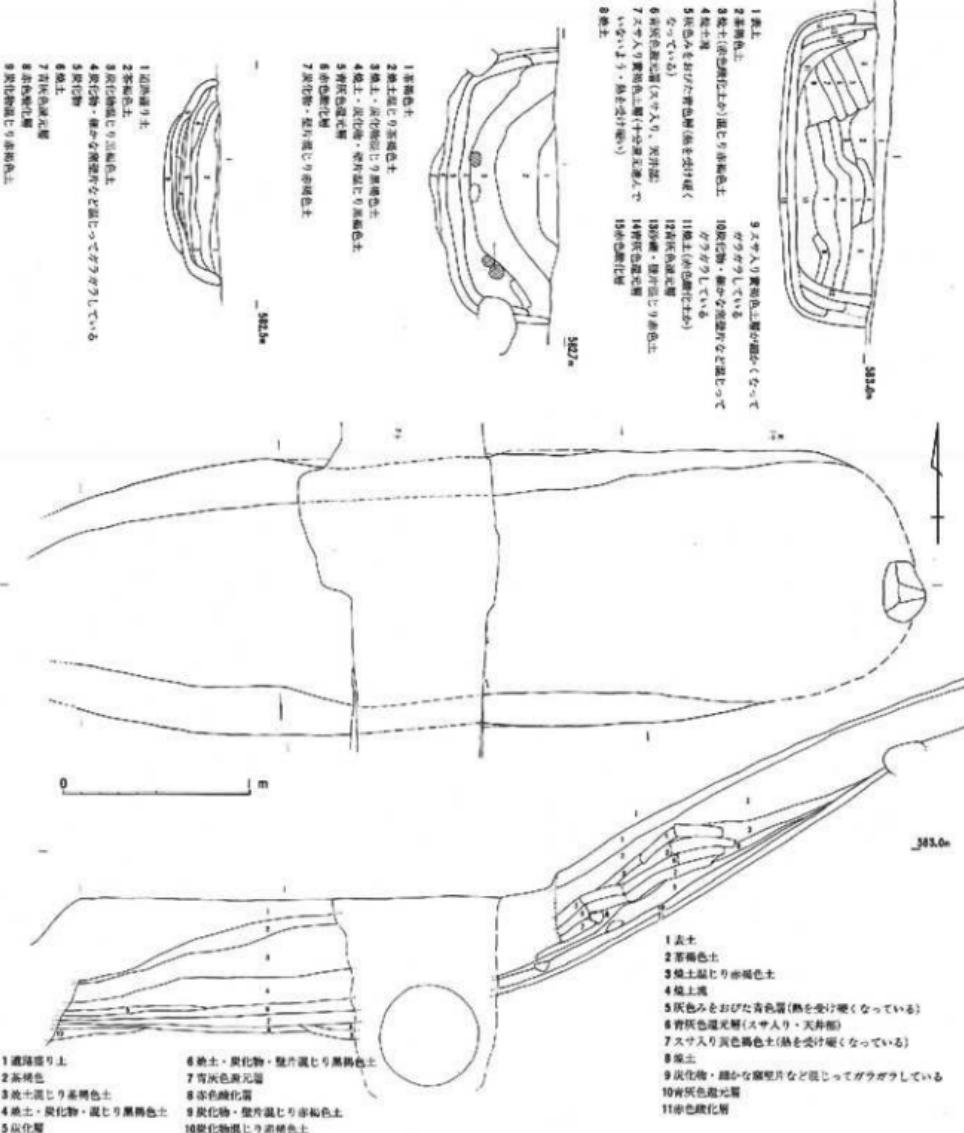
第26図 東浦遺跡、上の山遺跡地形図



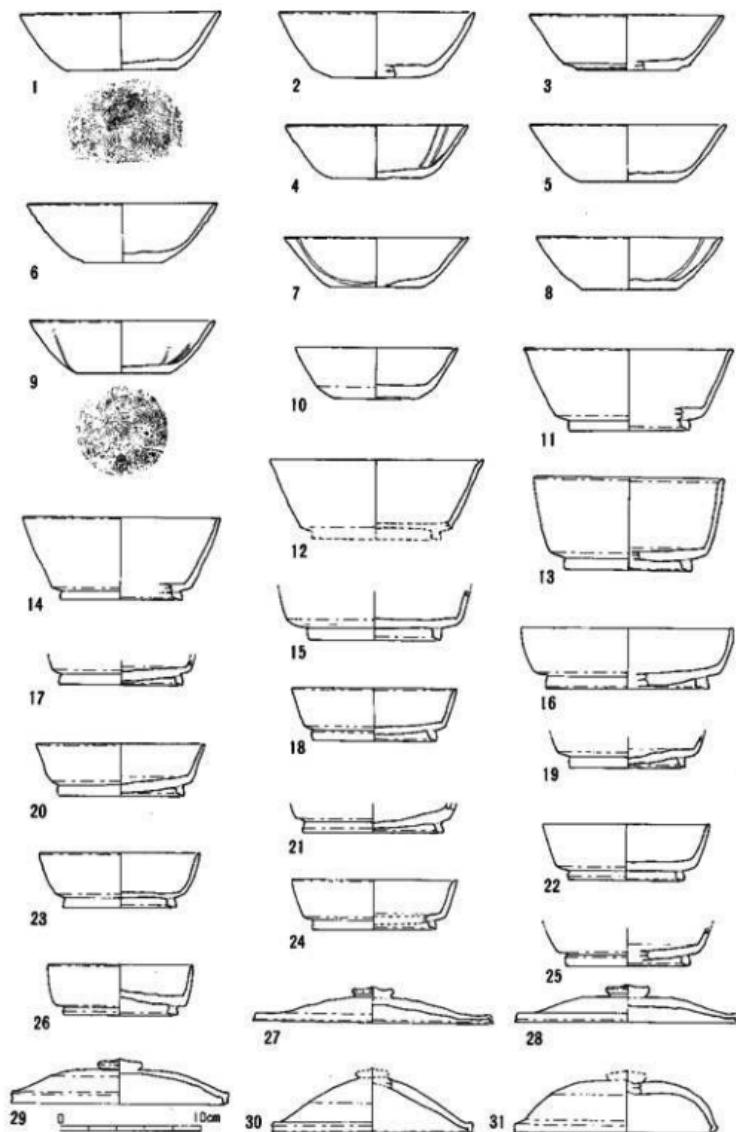
第27図 東浦遺跡遺構実測図



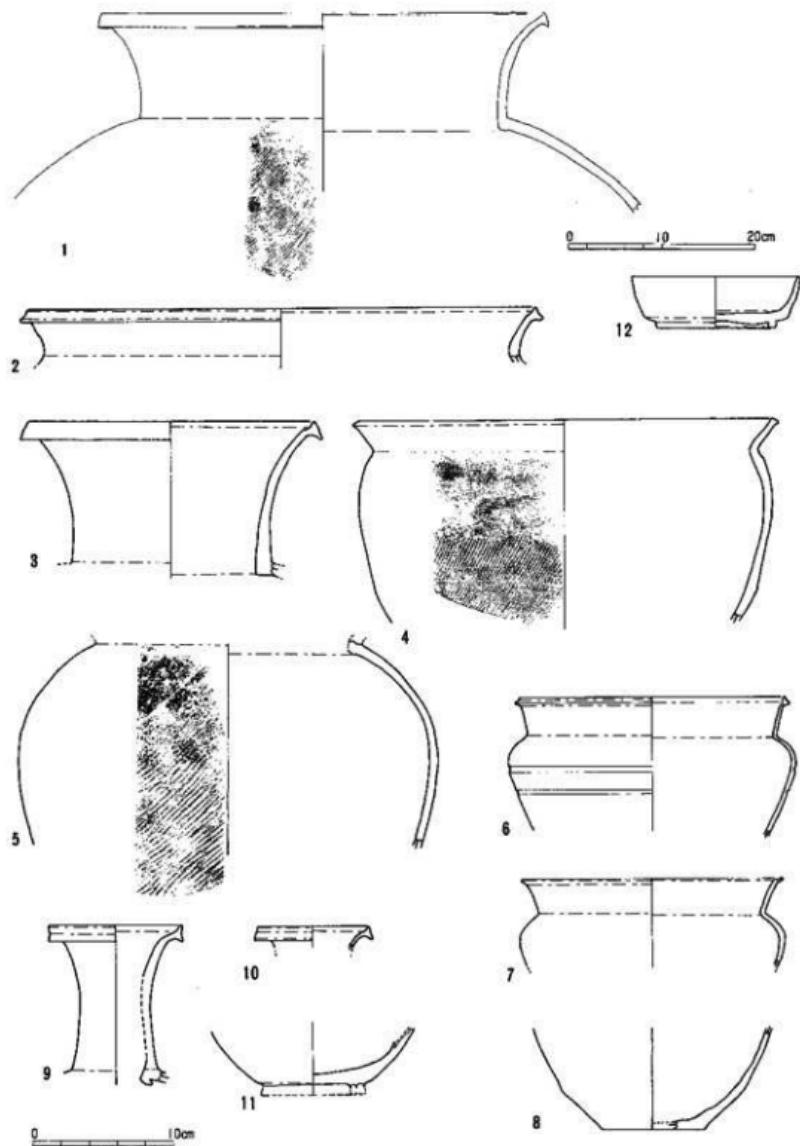
第28図 上の山遺跡地形図（上）1号窯址・次窯体実測図（下）



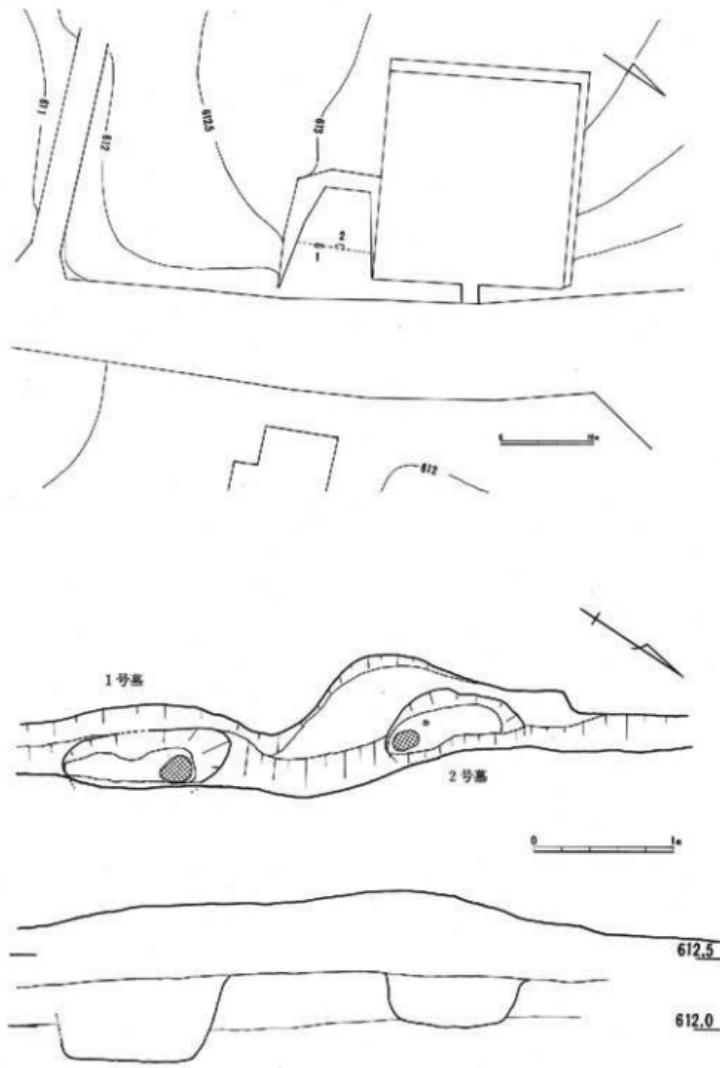
第29図 上の山遺跡1号窯址（2次窯体）実測図



第30図 上の山遺跡I号墓跡出土遺物実測図



第31図 上の山遺跡出土遺物実測図（1～11・1号窯、12・2号窯）



第32図 三本松遺跡地形図・土葬墓実測図

# 図 版



西浦遺跡（写真中央部・遠景は飯綱山）



調査風景

西浦遺跡

図版 2



S K14断面と出土した甕



土坑群（北東方より）

西浦遺跡 A 地区



土坑群（北東方より）



土坑群（南方より）

西浦遺跡 A 地区

図版 4



土坑群（南東方より）



土坑群（東方より）

西浦遺跡 A 地区



A地区土坑調査風景



西浦遺跡調査団

西浦遺跡 A 地区

図版 6



B地区遺景（南東方より）



B地区全景（南方より）

西浦遺跡



S K 2 遺物出土状況



S K 2 遺物出土状況

西浦遺跡 B 地区

图版 8



S K 2 遗物出土状况



S K 2 遗物出土状况

西浦遗址 B 地区



SK 2 遺物出土状況



SK 2 (中央の凹地に遺物が集中した)

西浦遺跡日地区

図版10



SK 3 全景



SK 3 (北壁と未開墳土堆積状況)

西浦遺跡B地区



S K 4 全景



S K 5 遺物出土状況

西浦遺跡B地区

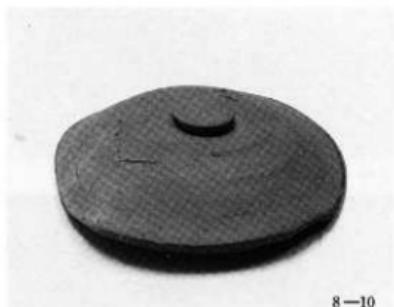
図版12



9—1



8—2



8—10

- 9—1 A地区SK8出土  
8—2 A地区SK16出土  
8—10 A地区SK14出土  
8—9 A地区SK14出土  
8—11 A地区SK17出土

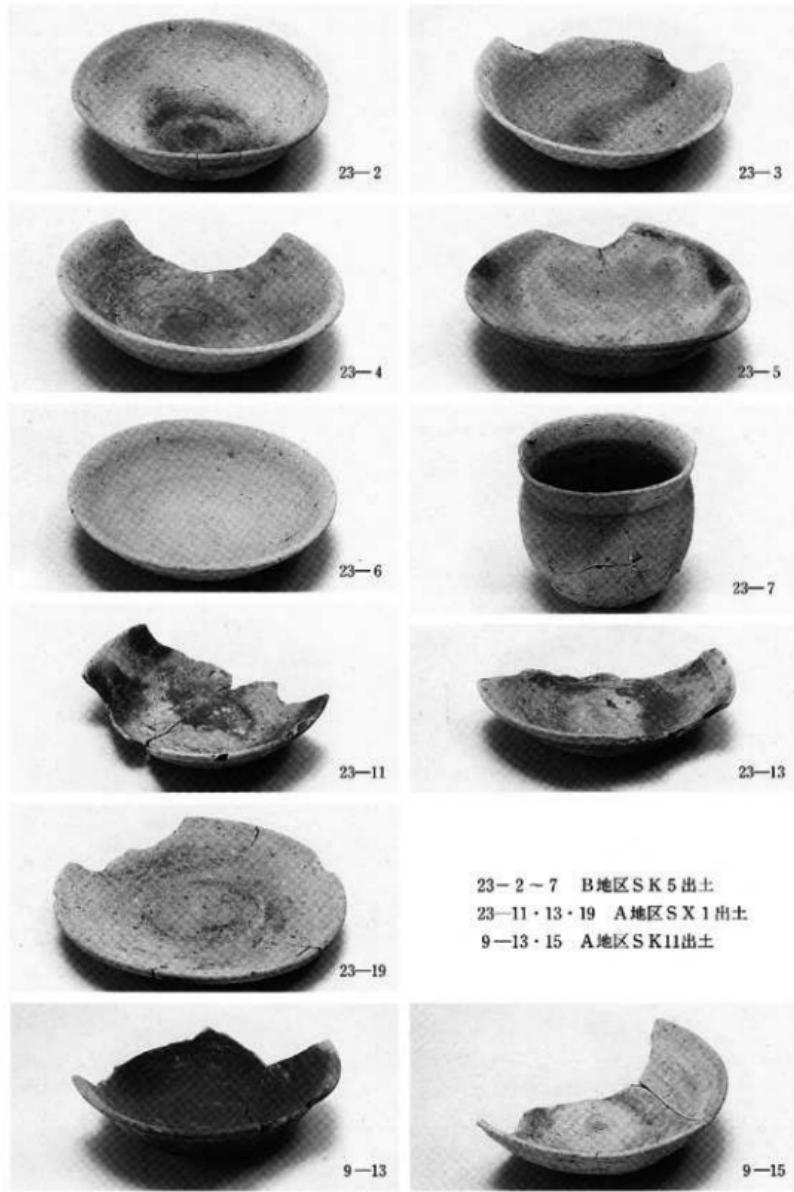


8—9



8—11

西浦遺跡出土遺物



23-2~7 B地区SK5出土  
23-11・13・19 A地区SX1出土  
9-13・15 A地区SK11出土

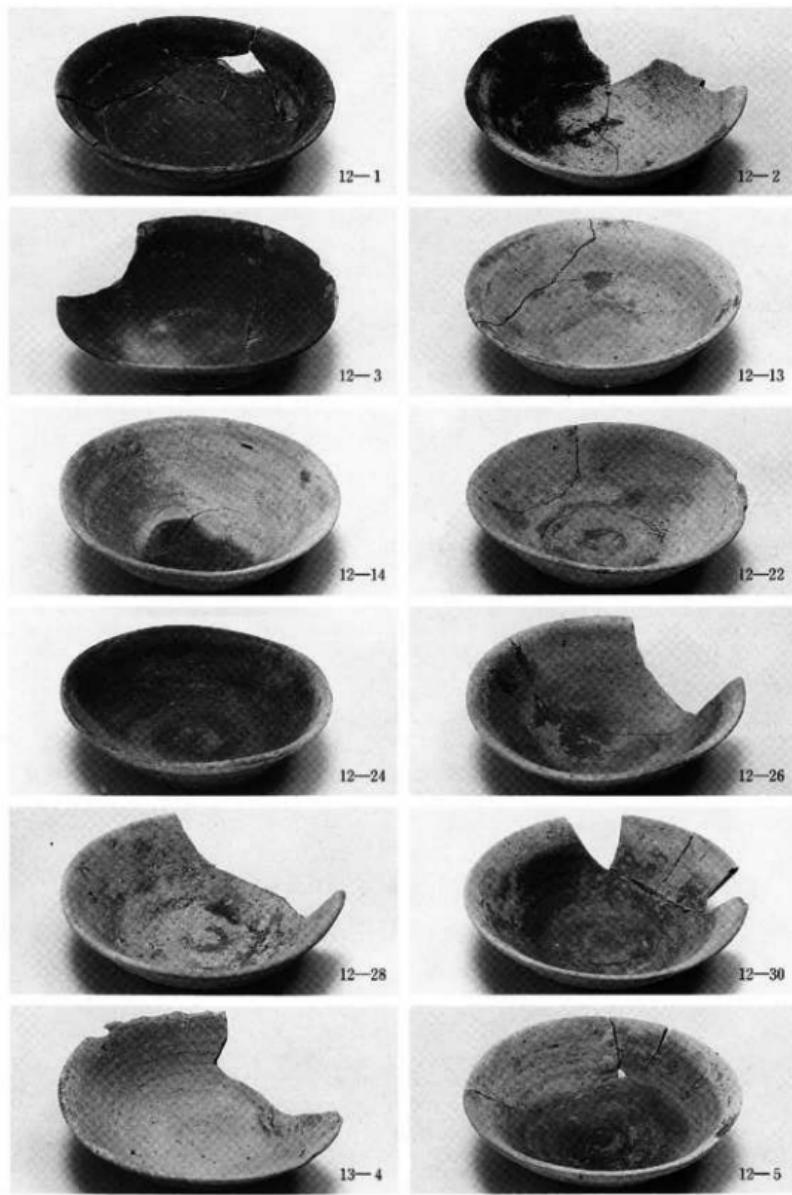
23-19

9-13

9-15

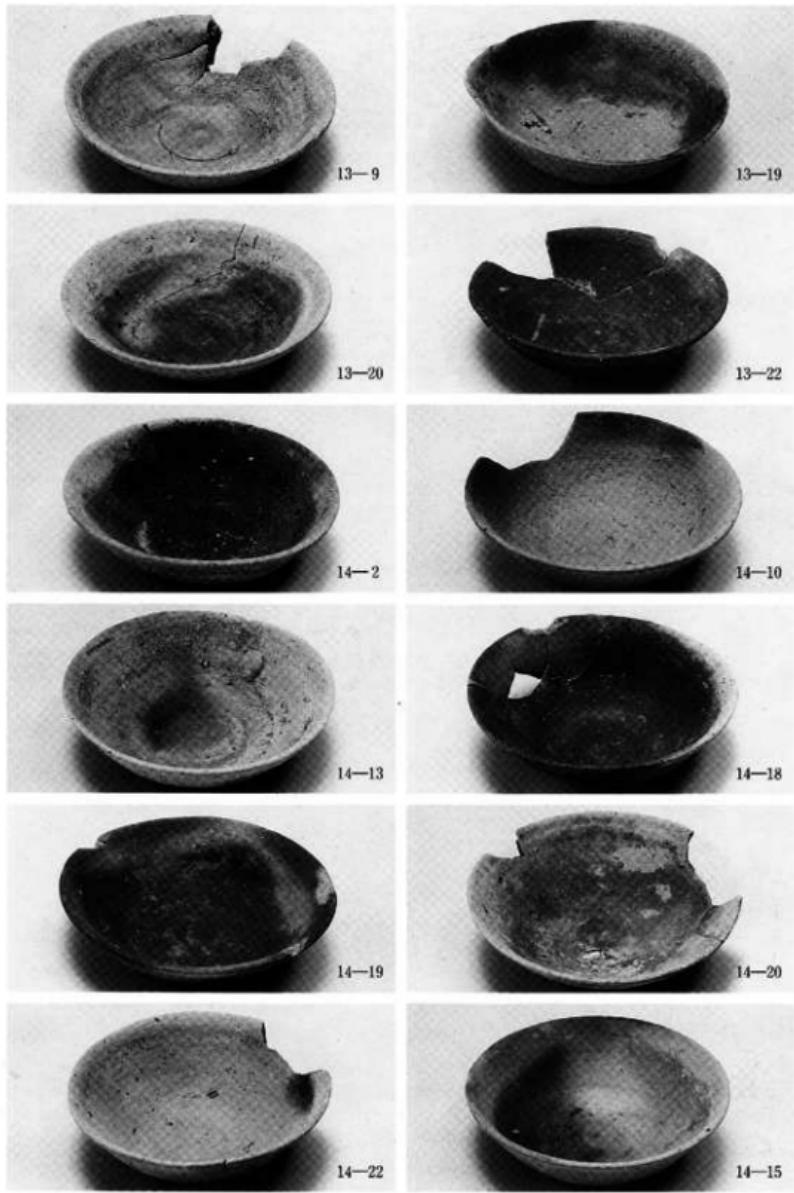
西浦遺跡出土遺物

図版14



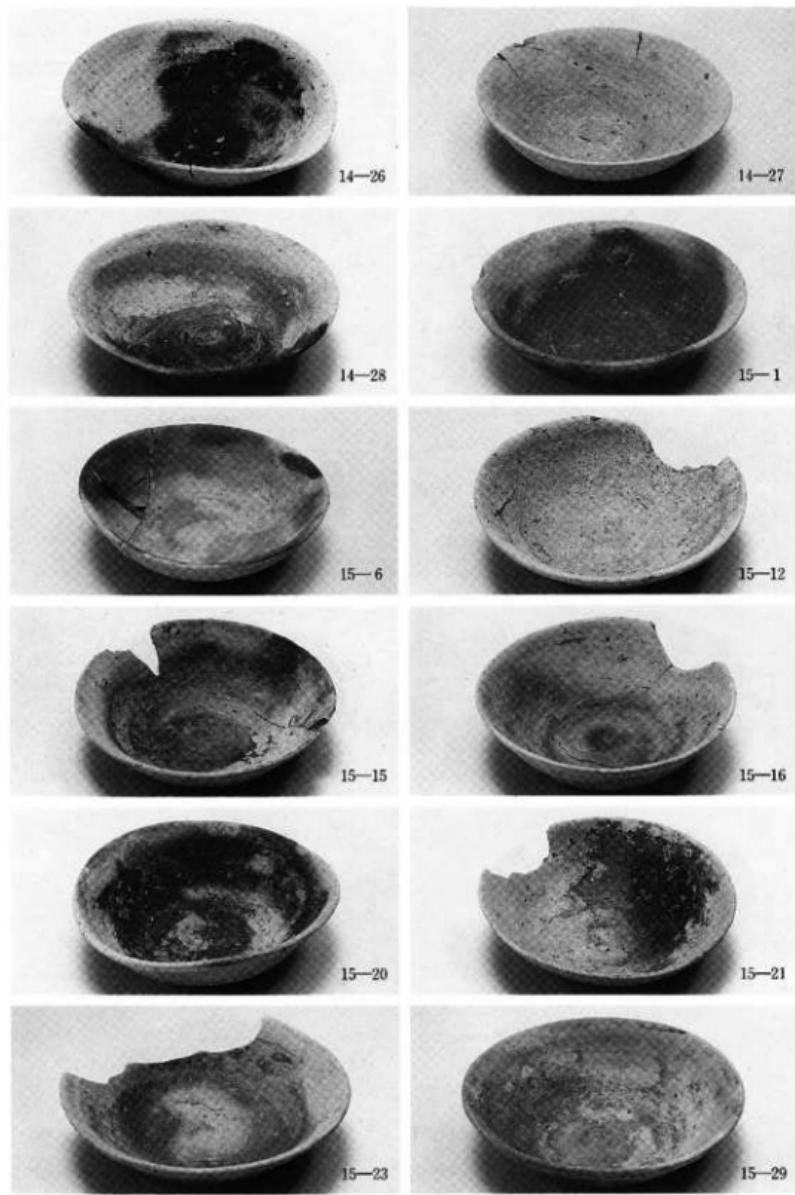
日地区 SK 2 出土坏

図版15

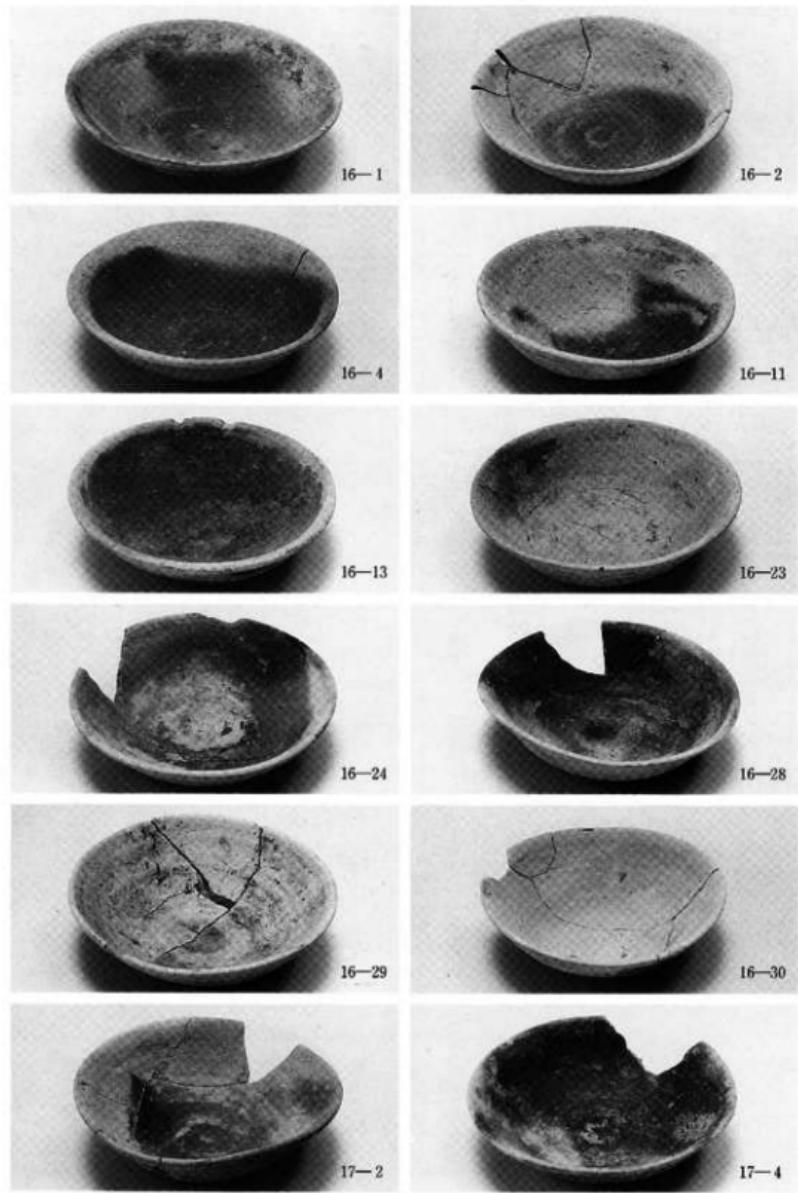


B地区SK2出土坏

图版16

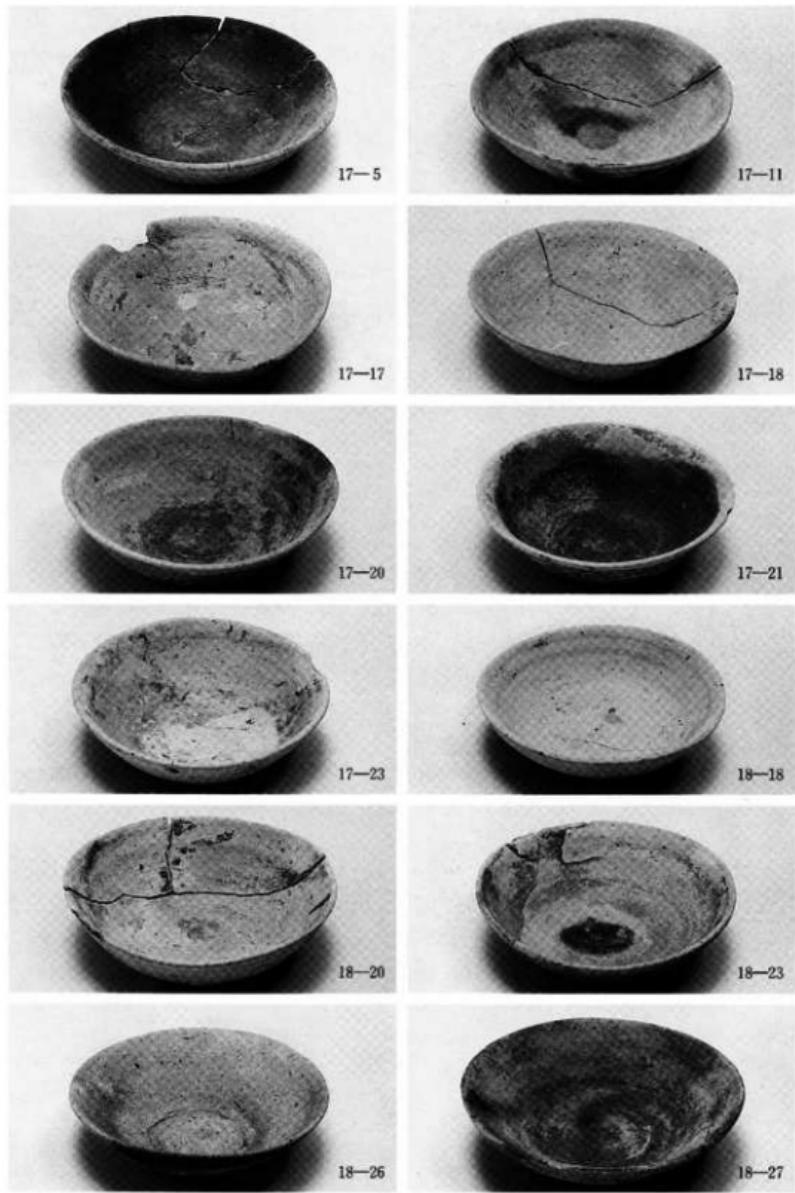


B地区 SK 2 出土坏

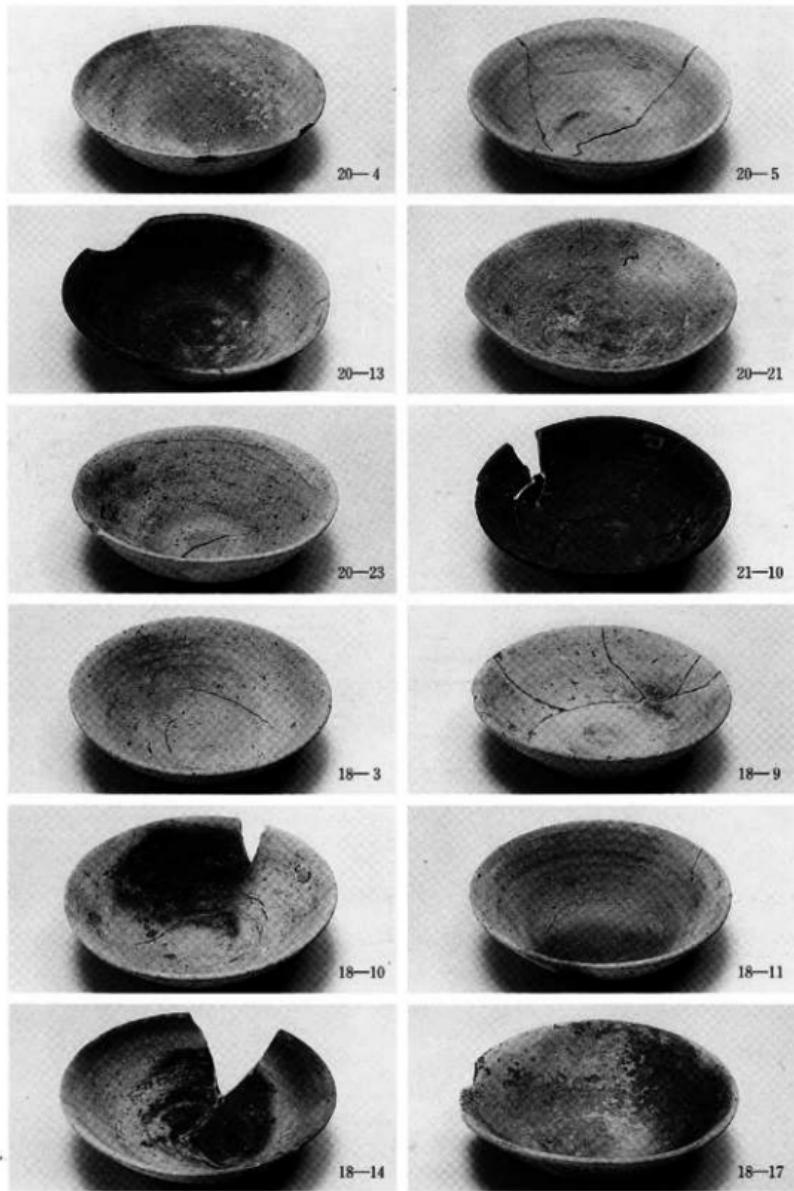


B地区SK2出土坯

图版18

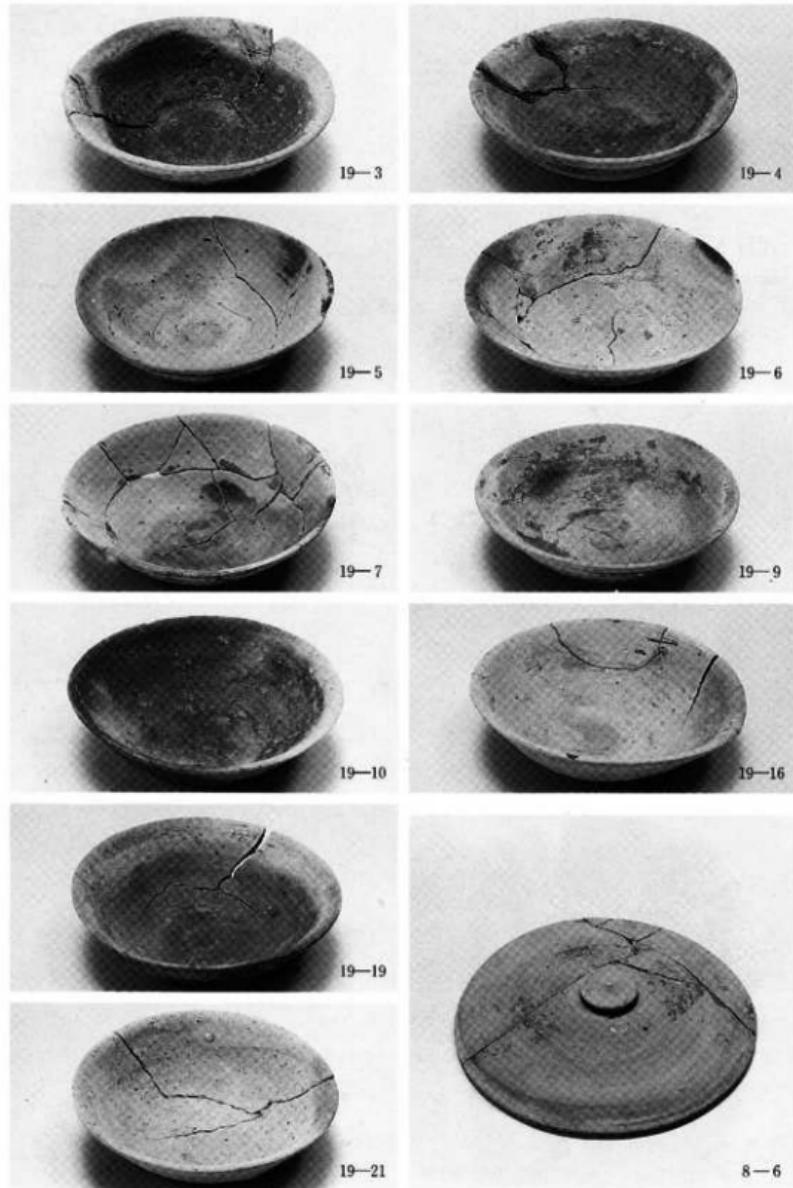


B地区SK2出土环

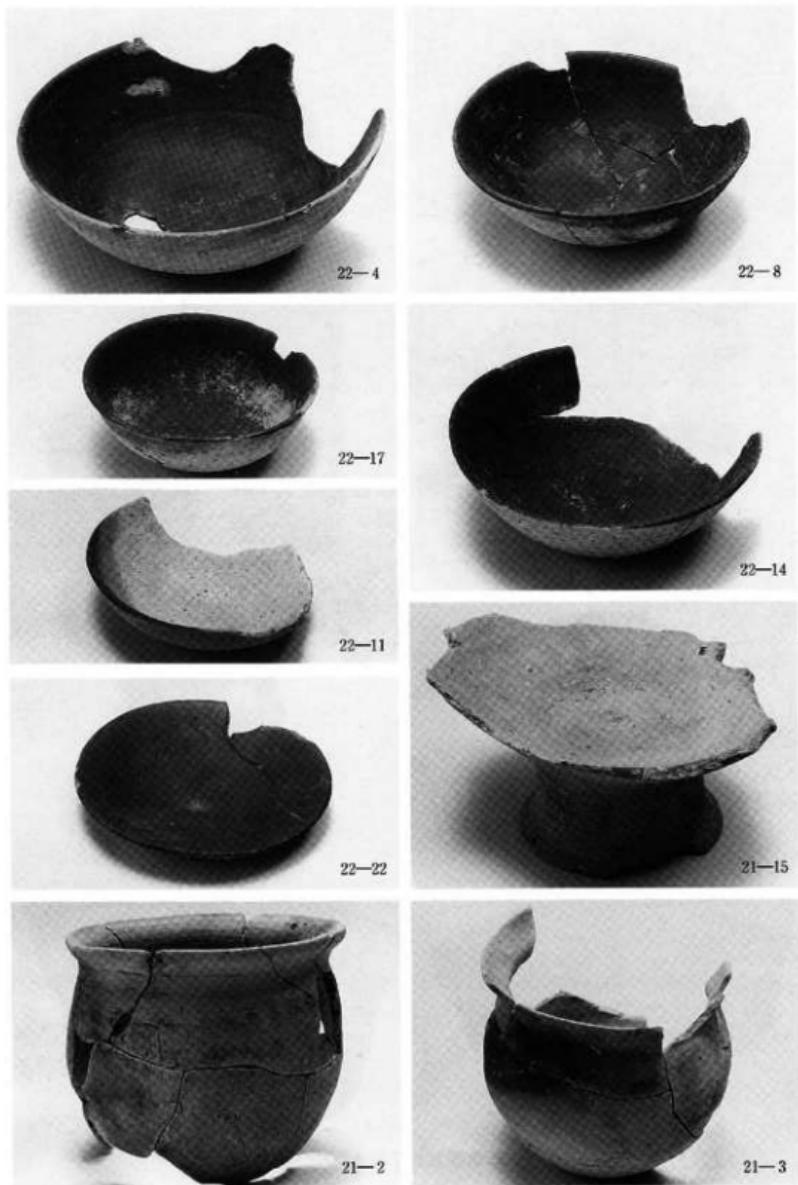


日地区 SK 2 出土环

图版20

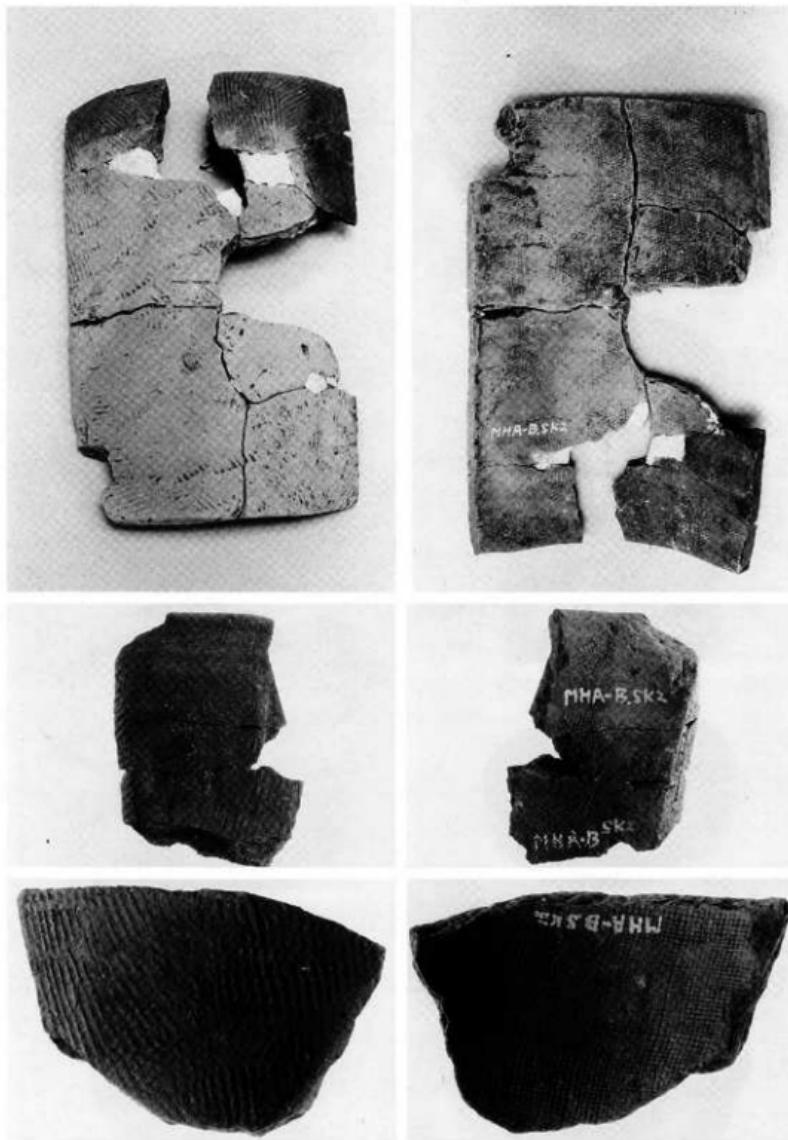


B地区 SK 2 出土坏・蓋



B地区SK2出土遺物

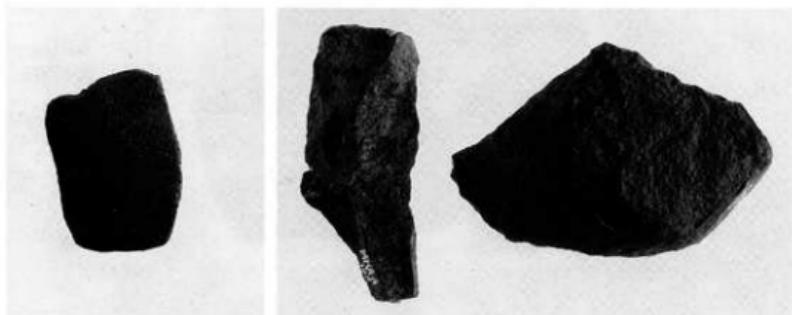
図版22



B地区SK2出土瓦

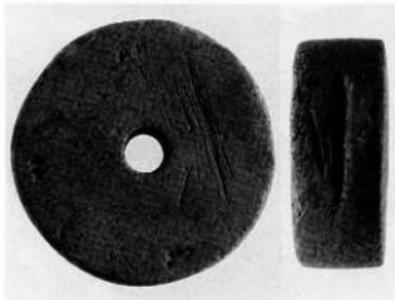


B地区S X 1出土の文様を持つ土器



A地区S K 9出土文様を持つ土器

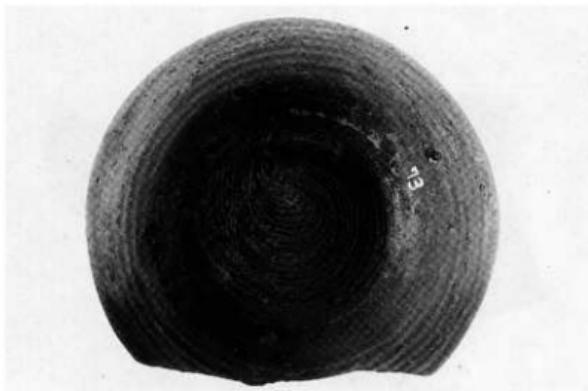
A地区出土旧石器



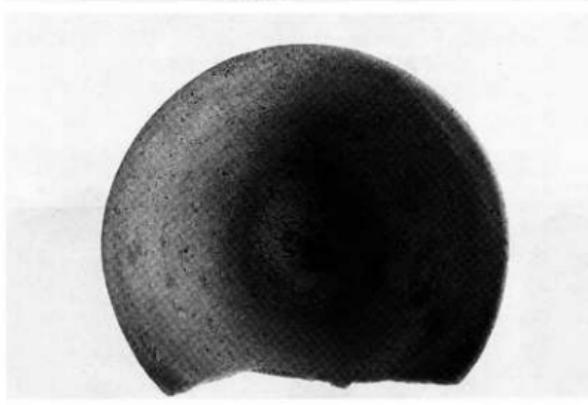
B地区  
S X 1出土の防錬車

西浦遺跡出土遺物

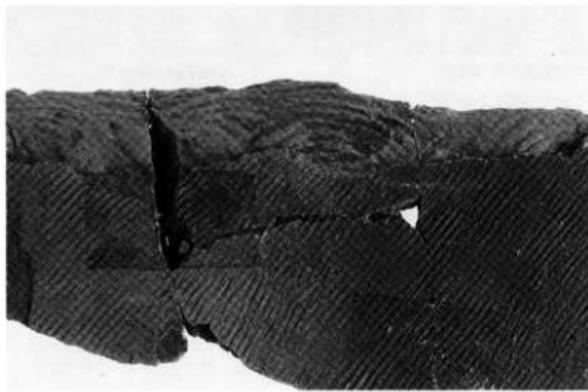
図版24



爪形圧痕の  
残る底部



爪状圧痕の  
残る内面



斐の擬口縁  
内部に残る  
同心円の叩  
き目



剥離した底部の下にも、  
糸切り痕が  
みえている

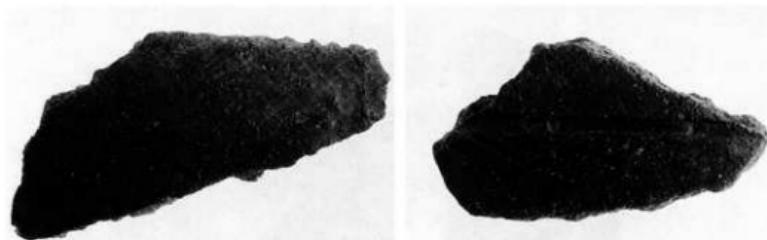


内面の剥離  
した部分に、  
糸切痕がみ  
える

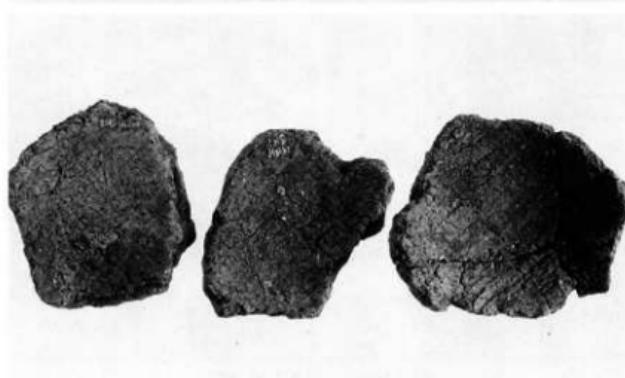
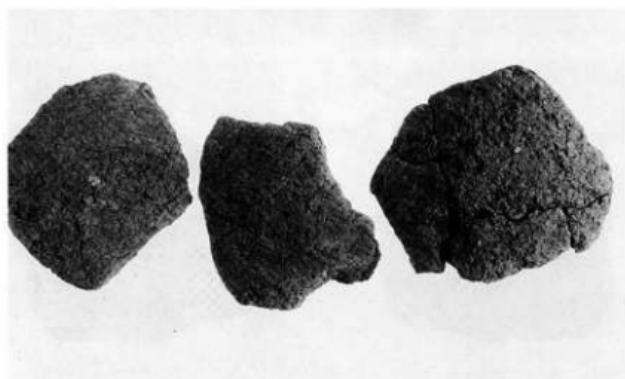


底部円柱づくりをしめた坏

図版26



西浦遺跡B地区出土縄文土器



東浦遺跡SK1出土縄文土器



上の山遺跡遠景（西方より）



上の山遺跡近景

上の山遺跡

図版28



上の山遺跡近景（南方より）



1号窯址と2号窯址（西方より）

上の山遺跡



1号窯址検出状況



1号窯（第2次窯体）

上の山遺跡

図版30



1号窯  
(第2次窯体)

焼成部断面



燃焼部断面  
(水道管が通る)



燃焼部断面

上の山遺跡



1号窯（第2次窯体）焼成部遺物出土状況



1号窯（第2次窯体）燃焼部南側壁

上の山遺跡

図版32



1号窯（第2次窯体）焼成部



1号窯2次窯体床面（青灰色還元層）下の状況

上の山遺跡



1号窯（第1次窯体）焼成部



1号窯（第1次窯体）全景

上の山遺跡

図版34



1号窯（第1次窯体）焼成部床面すみに帯状に残る炭化物



1号窯（第1次窯体）焼成部床面すみに帯状に残る炭化物

上の山遺跡



2号窯址検出状況



2号窯址全景

上の山遺跡

図版36



30-20



30-18



30-1

1号窯（第2次窯体）出土坏底部

上の山遺跡



30-8



東浦遺跡遠景（中央△印付近）



東浦遺跡遠景

東浦遺跡

図版38

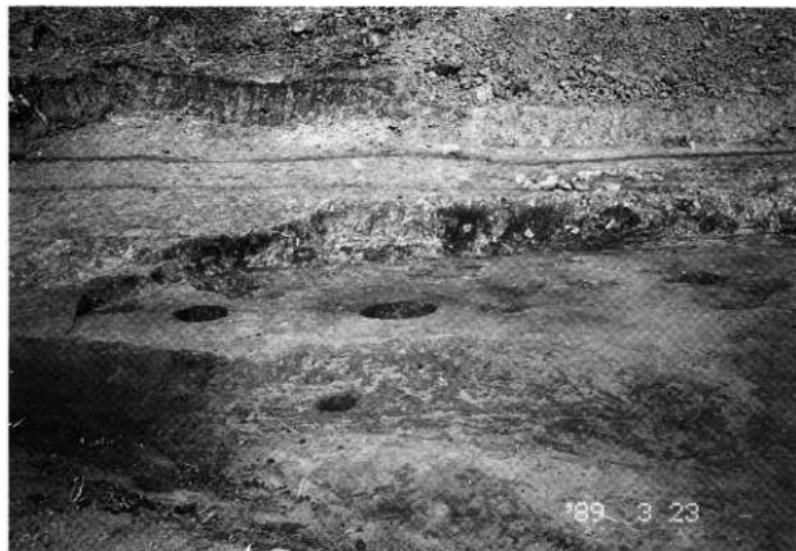


SK 2



SK 3

東浦遺跡



1号住居址



1号住居址石組みカマド

東浦遺跡

図版40



三本松遺跡（行人塚）の全景



1号墓出土人骨

三本松遺跡

## おわりに

ようやく、平出遺跡群の4遺跡の報告書を発行できることになりました。

炎天下の西浦遺跡の調査から、春の淡雪にみまわれ寒さにふるえた東浦遺跡の調査等々、それぞれに感慨のあるものでした。

そうした中、年配の作業員さんが本当に良く頑張ってくれ無事調査をやり上げることができました。

いよいよ、整理作業に入ってみると、なかなか時間がとれず思いがけなく時をかけてしましました。また、調査の不十分な点も出てきて情けない思いをしたものです。力不足で十分評価できなかった点も多いかと思います。ご批判、ご叱正をお願いいたします。

本来なら、もっと早く発行すべきところを多忙にかこつけて引き伸ばしてしまい、牟礼村教育委員会事務局の皆さんはじめ関係各位にご迷惑をおかけ致しました。にもかかわらず、終始あなたかくご協力いただきましたことに深く感謝申し上げます。

(小柳義男)

### 平出遺跡群発掘調査報告書

—県道長野・荒瀬原線バイパス工事に伴う発掘調査—

発行日 平成4年3月30日

編集 平出遺跡群発掘調査団

発行 牟礼村教育委員会  
長野県上水内郡牟礼村大字牟礼2795-1

印刷 ほおづき書籍株式会社  
〒381 長野市柳原2133-5

